UFOの正体を知る米政府

UFO contactee

GAP-JAPAN NEWSLETTER
UFO・超能力・宇宙哲学
コンタクティー

WINTER
1987
99

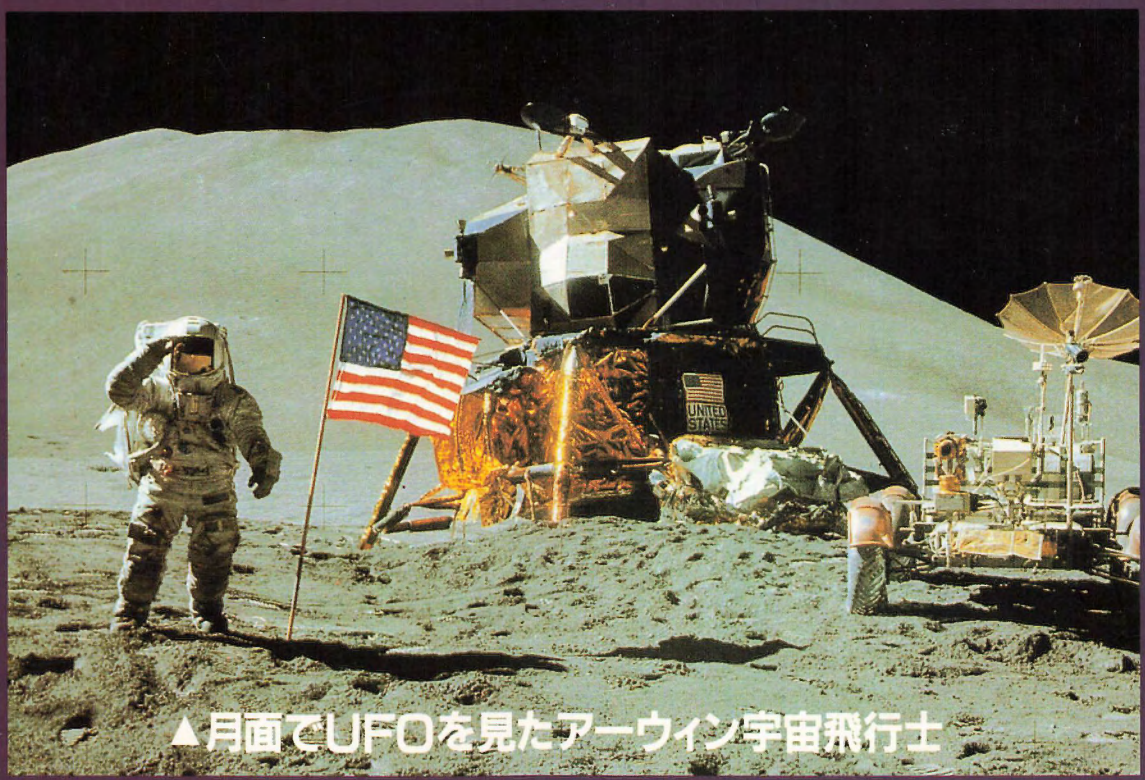
〈連載第2回〉
UFO-宇宙からの完全な証拠

山中湖畔で空中を飛んだ自動車!

富士山にUFOが大挙して出現

〈写真〉大分市上空のUFO

アダムスキーの大地とマヤの国へ



▲月面でUFOを見たアーウィン宇宙飛行士

UFO contactee　99号

〈巻頭言〉恐怖，マンネリ，信念 1
UFO-宇宙からの完全な証拠〈連載第2回〉 ダニエル・ロス 2
山中湖畔で空中を飛んだ自動車! 清水　南 12
富士山にUFOが大挙出現 清水敏恵 16
科学——SCIENCE 18
〈写真〉大分市上空のUFO 20
GAP短信 21
アダムスキーの大地とマヤの国へ 久保田八郎 22
旅行団と日本GAPの皆様へ アリス・ポマロイ 34
「アメリカ東部 西部・メキシコの旅」に参加して 参加者一同 34
「昭和62年度総会，大盛況 安藤澄雄 40
〈投稿欄〉ユーコン広場 42
〈広告〉63年度エジプト・イスラエル・イタリアの旅 44
〈予告〉62年度地方支部大会〈その4〉 45
〈広告〉アダムスキー全集／英文版ユーコン 46
全国月例研究会案内 47

◀金星人からジョージ・アダムスキーに伝えられた金星のシンボルマーク。2個の図形の内、左側は宇宙の父性原理(陽)、右側は母性原理(陰)を意味する。円は宇宙をあらわしている。

GAPについて

GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がUFOの真相について“知る”機会を与えられるべきであるという見地に基づいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて“コスミック・パワー”の子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な訪問者からもたらされた“生命の科学”の研究と理解を通じて体得できます。

日本GAPの目的はUFOとスペース・ブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1．この太陽系の他の惑星群には偉大な発達をとげた人類が居住しているが、米ソ等の大国政府はこの真相を隠している。
2．他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3．ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の精神の向上と地球の輝かしい未来を築くために不可欠のものである。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

■表紙写真は1971年7月26日から8月7日まで月へ飛行したアポロ15号のジェームズ・アーウィン中佐がアペニン山脈をバックに米国旗へ敬礼している光景。彼は地球へ帰還後，月面でUFOを見たと言明した。

〈巻頭言〉

恐怖，マンネリ 信念

本年九月十三日に東京で大地震が発生するという〝予言〟が二カ所から流れた。〝震源地〟は仙台と兵庫県方面で、いずれも女性である。しかし当日は何事も発生しなかった。前者は〝宇宙人〟から聞いた情報だといい、後者は霊感の強い女性で、これまでに予感がよく当たったという。

ある高名な地震学者の説によると、大地震のごとき未来の大災害の予告で、年月日をはっきりと打ち出した予告は百パーセント的中しないという。戦後いつ頃だったか、何年何月何日の何時何分にどこそこで大地震が起こると予言して、はずれたために割腹自殺を図った人がいた。これなどはまだ責任感の強い方だが、大半の〝予言者〟は的中しなくても詫びることはせず、宇宙人が地震を未然に防いでくれたとか、本当は起こるはずだったのに何かの理由で発生の時期がずれたなどと称してうやむやに終わってしまう。

アダムスキーが何度も力説しているように、真実のスペース・ピープル（友好的な惑星の人々）は地球人に対して恐怖心を起こさせるような予言を絶対に与えないという。したがって宇宙人から聞いたという未来の大異変の予言類はニセ宇宙人を源泉とすることに間違いない。いわゆる霊感なるものも真実のテレパシーではなくて、肉体細胞から放たれる非宇宙的印象が内部で増幅される場合が多いと、アダムスキーは『生命の科学』で説いている。

生物細胞が生き物であることは『生物フォトン（光子）』と呼ばれる発光現象を起こすことで理解できる。この不思議な光について最近、新技術開発事業団の『生物フォトン』研究グループ（総括責任者・稲場文男東北大電気通信研究所教授）が撮影に成功した。大豆の発芽に伴う生体細胞の微弱な光をカメラでとらえたのである。この生物フォトンなるものは細胞が分裂して生まれたり、敵と闘うなど、重大な時に出される信号と考えられるという。細胞が印象を放つというアダムスキーの説は次第に科学的に裏づけられる方向にむかっていると言えるだろう。

アダムスキー哲学と総称されるものは『宇宙哲学』『テレパシー開発法』『生命の科学』の三部作から成っている（いずれも邦訳版アダムスキー全集に収録）。これらを研究すると、人間が恐怖心を起こすのは「一寸先は闇」という諺が示すように未来に対するテレパシックな予知能力を持たないからでもあるが、強力な信念の欠如も大きな原因だとされている。「自分は絶対に危険に遭遇しない！」という断固たる想念を持ち続けることが重要だが、もっと大切なのは「そのような大地震は絶対に発生しない！」というプラスの想念を起こすことにある。このような人が増大すればするほど、結集した想念波動によって自然界に何らかの変化が生じるだろう。人間の想念は事物に影響を与える偉大な力を持っているからだ。

したがって、前記の二カ所から流れ出た東京大地震発生説も、昔から巷間に流布する噂の一種とみれば何ということはないが、これに踊らされて右往左往する人がいたとすれば精神分析学的な絶好のレッスンになる。地球人のメンタリティー（ものの考え方）や恐怖心発生のメカニズムなどを研究できるからだ。

アダムスキーは人間は誰でも大地震を予知できると言う。真のテレパシックな受信状態になれば、大地から発する波動を感知できるからだ。これには全身の細胞をコズミック（宇宙的）細胞に変化させて、外部の波動に対して鋭敏になるようにトレーニングを行なう必要がある。こうしてエゴ細胞のでたらめな発信を消滅させてゆくのである。いわば全身を濁り気のない透明な状態にし、『宇宙の意識』とアダムスキーが呼んでいる大宇宙の英知波動と一体化するのだ。

もちろんこれは容易な事ではない。日夜自己の心のトレーニングに励む必要があるが、詳細は前記三点の書物を熟読研究して実践されたい。

重要なのは「テレパシーその他の超能力開発に王道（楽な道）はない」ということだ。外国語の習得と同様に常に同じ事を反復練習するのが秘訣である。GAPの月例会はマンネリ化して新鮮味がないのでだめだという意見があるとすれば、これは宇宙哲学の研鑽や超能力開発に妥当ではない。南インドのバラモン出身で中国・嵩山の少林寺で禅宗の始祖となった達磨大師は面壁九年にして偉大な覚者になったし、松山市のGAP会員・坂本正廣氏は『生命の科学』を毎日六時間読み、両手を見つめる練習を毎日六時間行ない、これを数カ月続けて、ついにオーラ透視、遠隔透視の超能力を開発した。

マンネリ化というのはある一定の状態に飽きがきて意欲を失うことを意味する。それは方法の側に誤りがあるのではなく、人間の側の敗北にほかならない。マンネリを超えて前進しなければ勝利はないのだ。方法ばかり変えても忍耐力と信念が伴わねば停滞するだけだろう。

本誌は次号で100号となる。これも多年、マンネリを超えて常に同じ事を繰り返してきたからこそ達成できたのである。これには莫大な忍耐力と信念の力を要したが、それだけの価値はあったと信ずる。

（久）

UFOs and the Complete Evidence from Space
By Daniel Ross

UFO——宇宙からの完全な証拠

金星、火星、月に関する真相

●ダニエル・ロス／久保田八郎訳

連載第2回

〈前号のあらすじ〉米海軍の潜水艦乗務員として冒険にあこがれたロス青年は、故郷ニューヨーク州グレンズフォールズで大UFO事件に遭遇してUFO問題に目を開き、さらにサンディエゴのUFO講習でアダムスキーを知るに及んで俄然宇宙問題の研究に没入した。

世界的に名高いコンタクティー（異星人と接触した人）であるジョージ・アダムスキーは一九五二年十一月二十日、カリフォルニア州南部の砂漠地帯デザートセンターに着陸した円盤から出てきた金星人と会見する。相手はスキー服タイプの上下続きの服を着た長髪の美しい顔をした男。二人はテレパシーと身振りで重要な問題を語る。遠くから六名の同行者がその光景を目撃している。世紀の大コンタクト事件はさらに続く——。

このコンタクト（接触）中に相手が伝えた事柄のすべてにおいて、相手の顔に怒りまたは非難の様子はなかった。「その表情は理解と大いなる憐れみのそれであった。ちょうどわれわれが、無知と理解力のなさによって過失をおかした愛すべき幼児に対してもつような憐れみである」

この憐れみの感じは会見のあいだずっとアダムスキーに印象づけられた。

アダムスキーは二、三の話題に関して応答を得ることに成功した。その話題は彼らの宇宙旅行の基本的な方法に関する回答から、地球以外の生命存在について訪問者たちが地球人に気づかせようとしている理由に及ぶものである。

その宇宙人が地球人の代表者（アダムスキー）に明確にしようとして強調した点は、人間というものは太陽系や大宇宙全体にわたって普遍的（ユニヴァーサル）なものであるということだ。（訳注＝宇宙のどこにでも同じ姿で存在しているという意味）。文明を持つ惑星のすべてには地球と同様に人間が住んでいる。そして宇宙旅行者（訳注＝いわゆる宇宙人）のすべては人間なのであり、男や女であるのだ。アダムスキーがこの上なく確信したのは、その宇宙の訪問者は自分で語っている事柄を確実に知っているということである。心の狭い人間や知識のない〝専門家〟が言っているような気味の悪い円盤乗船者、奇妙な姿の宇宙人、その他の空想による産物などは存在しないのだ。

二人の会見は約三十分続いた。すると相手はもう円盤へ引き返す時間がきたと言った。彼はアダムスキーに一緒について来るようにと手招きした。

近くの丘の方へ約百メートル近く一緒に歩くと、そこに小型のスカウトクラフト（円盤型UFO）が地面から数フィート浮かび上がって停止していた。アダムスキーは船体内に別な人がいるのをちらりと見たが、どうやらそれは金星からの訪問者の帰りを待っている小型機のパイロットらしかった。

アダムスキーはこうした美しい宇宙船の一つにこうまで接近してスリルを感じ、ものも言えなかった。それは円盤というよりも吊り鐘型に近いと彼は述べている。金属的な船体は半透明な性質をもち、美しい虹色を放って日光を反射していた。彼の著書にはその小型機の全体の様子が詳細に述べてある。丸窓や基部に磁気パワーコイルのあるドーム状の上部、三個の球型着陸装置の上に広がったどっしりした周縁部（フランジ）など——。

アダムスキーは船内へ入ってよいかと尋ねたが、その要求は拒（こば）まれた。もう行かねばならず、時間がないと相手が言ったからだ。しかし相手はアダムスキーがポケットに入れていた写真のシートフィルムの一枚を持って行きたいと言う。そして後日それを返すとい

うことをアダムスキーに理解させた。それから相手は船体側面の入口まで歩いて登り、船体内へ入った。

宇宙機はゆっくりと上昇し、遠くの山々の峰の方へ無音のまま飛んで行き、ついに高度を上げて空の彼方に消えてしまった。

アダムスキーはその訪問者との初めの頃の会話からみて、小型機は地球の大気圏を超えた位置で待っている大型の惑星間航行母船へ帰って行くことに気づいていた。

彼は待機地点から見守っていた友人たちに合図をした。彼らはコンタクトの一部始終を目撃できたし、小型機が離陸するのを見ていたのである。一同はアダムスキーと話すために急いでやって来て、あらゆる種類の質問をあびせかけた上、コンタクトが行なわれた地点へ一緒に歩いて引き返した。

訪問者がアダムスキーとともに船体の方へ引き返す前に、明瞭な足跡をわざと残したのはこの場所である。相手は痕跡の中に残された模様に重要な意味があることをほのめかしていたので、アダムスキーは相手がこのコンタクトの目的のために特別に浮き彫りにした靴をはいていたのだと推測した。

きれいな足跡には奇妙な図形や模様が残っている。アダムスキーのグループはスケッチをし、写真を撮り、続いて二つの足跡を石膏にとったあと、あらゆる道具類やカメラ道具一式などを集めて、すべて車に積み込んだ。

一同は石膏が充分に乾くのを待つあいだ、発生した出来事のとてつもない実感に心をうばわれながら一、二時間をすごした。彼らは石を集めてその位置を示す二、三の目印を作った。だれかが近い将来、出かけて行って、その位置を調査するのにそなえるためだ。それからアダムスキーと仲間たちはデザートセンターへ向かって十六キロをドライブし、そこで彼らは夕食をとりながら注目すべき出来事の体験を語り合って夕方をすごした。

以上が一九五二年十一月二十日に発生した歴史的なコンタクト（会見）の様子である（訳注＝このコンタクトの詳細は邦訳アダムスキー全集第一巻『宇宙からの訪問者』（文久書林刊）に出ている）。

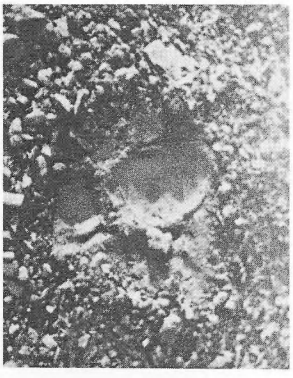
事件から数日以内にこの話はアリゾナ州とカリフォルニア州の新聞記者へ伝えられた。詳細な内容、写真、目撃者たちが伝えた説明などを慎重に調べたあと、二つの新聞がこの驚くべきコンタクトの詳細な記事を掲載した。そしてアダムスキーの著書が翌年刊行されたとき、それは別な惑星から来た訪問者との会見に関して、一般に受け入れられた最初の報告書となったのである。

この書物の中には、一九五二年十二月十三日にふたたび飛来した金星の小型機の望遠鏡によるクローズアップ写真が掲載されている。パロマー・ガーデンズの自宅でアダムスキーはこのような可能性があることを絶えず感じていた。例の宇宙人が、借りたフィルムを返すつもりだと言っていたからだ。その最初のコンタクトから二十三日後にその約束は果たされた。

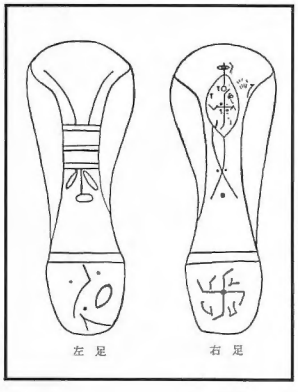
アダムスキーは頭上をジェット機が飛ぶ音を聞いていたので、望遠鏡のそばでじっとしていた。朝の九時頃である。飛行機がいなくなってまもなく彼は空中に一つの閃光を見た。すぐに彼は望遠鏡をそれに向けた。物体が彼の地所の方へ音もなく飛んで来るにつれて焦点を調節しながら、アダムスキーはその吊り鐘型の宇宙機が朝の日光をあびてきらめく色光を反射しているのをはっきり見ることができた。

彼から約九百メートルの位置でそれは突然停止し、谷の上空百五十メートルの中空にじっと浮かんだ。アダムスキーは自分が望遠鏡のそばにいることをパイロットが知っていると思ったので、カメラで急速に二枚ほど撮った。それからアイピース（訳注＝望遠鏡の接眼鏡）上でカメラを回してもう一枚撮影した。小型機がふたたび動き始めたとき四枚目を撮った。

◀一九五二年十一月二十日、カリフォルニア州デザートセンターの砂漠でアダムスキーが会見した金星人。目撃者の一人アリス・ウェルズ夫人のスケッチをもとに女流画家ゲイ・ベッツが描いた等身大の油絵（原画はカラー）。



◀金星人が残した足跡

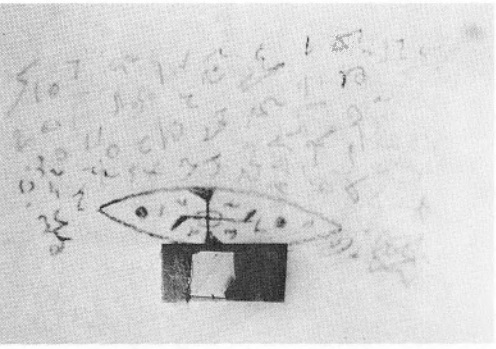


◀足跡の奇妙な図形

小型機がアダムスキーから三十メートル以内に接近したとき、一つの丸窓が少し開き、片手が突き出て、以前に借りた写真のシートフィルムを地面に落とした。小型機はとまらないで地所の上空を急速に移動して東に向かい、輝く空の中へ急速に消えて行った。

数日後シートフィルムは現像され、フィルム面に象徴的なメッセージが焼きつけられているのがわかった。ずっと後になって、この象徴的な文字と筆跡には二種類の異なる面があると判断された。地球の古代の記録にたいするつながりと、別な惑星の文明人による宇宙旅行の方法を提示するために述べられた象徴類である。

自分の空飛ぶ円盤研究と十一月二十日のコンタクトについて充分に論じつくした後、アダムスキーは彼の最初の著書を次のように述べて結んでいる。



▲金星人がアダムスキーに返したフィルムに焼きつけられていた奇妙な図形によるメッセージ

「空飛ぶ円盤の事実は絶対に存在する。われわれのど真ん中に宇宙からの訪問者がいるのであって、しかも彼らはある目的をもって地球へ来ているのである。われわれはこの事実を調査して熟知し、それが投げかける諸問題に取り組んで究極の結論を出すほうがよい。（中略）過去のもろもろの出来事の綿密な分析によって、他の惑星から来たこの人々はわれわれの友人であることを私は確信している。彼らの願望や目的は太陽系中の他の惑星群の安全とバランスを確保することのみならず、地球人を援助することと、おそらく地球人自身からも毒されないように地球人を保護する（自滅させないようにする）ことにあると確信する」

アダムスキーのその後の情報の多くは本書を通じて論じられる予定である。

米空軍はUFOの正体を知っていた

多くの書物がUFO目撃の（戦後の）初期の頃について詳細を伝えている。ケネス・アーノルドは一九四七年六月二十四日に最初の公式報告を行なった。ワシントン州レイニア山地域の上空を自家用機で飛行中、彼は突然左方に九個の輝く物体の編隊がいるのに気づいた。それらは山の頂上に低く接近して飛んでおり、彼の飛行機のすぐ前を通過するかのように同高度で進行していた。全物体が円盤型で、大きさは十三メートルないし十五メートルと思われた。

▶ケネス・アーノルド

物体群は山々の地形上空をうねるように飛んでいたが、それをアーノルドは水面に斜めに投げられた皿が飛び跳ねながら飛んで行く状況にたとえている。この説明を聞いたとき、新聞記者団はケネス・アーノルドが見たタマゴ型物体を意味するために flying saucer（空飛ぶコーヒー台皿）という言葉を作り出したのである。彼の報告は世界中に発生した無数のUFO目撃の最初となった。

続く数カ月間、多くの目撃報告が軍及び民間航空会社パイロットから出された。パイロットたちは空中からふってわいた未知の物体が自分たちの飛行機の近くを飛んだり、驚くべき軽業を演じたり加速したりするのを見て仰天した。空軍はトップレベルで調査を開始したし、一方新聞は一般大衆からひんぱんに出る目撃報告を掲載した。

三カ月以内にある秘密の文書が起草されて空軍の司令長官へ送られたが、それには「空飛ぶ円盤は実在し、知的に操縦されている」と述べてあった。

しかし真実を述べた解答は大衆に与えられなかった。毎月のように多くのUFO目撃報告が出続けるというのにだ。多くのバカげた解釈が軍から新聞社に伝えられた。既知の物体、高く飛ぶ鳥または気球などの誤認、インチキ、蜃気楼、錯覚だというのだ。

しかし空軍向けの航空技術情報センターは『状況の評価』と呼ばれるトップシークレット（極秘）のレポートを作成したが、これにはUFOは惑星間を飛ぶ宇宙船だと結論づけてあった。それ以来、UFO問題の取締りは政府レベルにおいてきびしくなったのである。

空軍は続く数年間苦しい広報活動を強いられて、研究活動や調査を行なったけれども、絶対的な証拠は存在しないと公言した。しかも保守的な地位にある科学顧問の助言を持ち出して政府の立場に重みと威信を加えたのである。また空軍は空飛ぶ円盤という語は宇宙船の意味を暗示しすぎるというので、もっと公的な言葉であるUnidentified Flying Object（未確認飛行物体）を用いることを好んだ。この名称は「〝未知〟で定義されない現象」の概念を永続させるのに役立つだろう。

大気圏外の宇宙船に関しては確かに何もわからないという政府関係の立場にもかかわらず、本物のUFOが絶えずその存在を知らしめるにつれて、地球以外の所にも生命体が存在するという考え方を大衆は着実に身につけてい

た。『UFOに関する報告』の著者、エドワード・ルッペルトは、空軍プロジェクト・ブルーブック調査団を率いた後、一九五二年だけで六カ月の間にUFOに関する一万六千のニュース記事が全米百社の主要新聞に掲載されたと書いている。これは一新聞につき平均百六十件のニュース記事を載せたことになるのだ。これらは公の報告にすぎない。同時にこの時期にはプロジェクト・ブルーブックの事務所は「全米の情報将校から、あわてふためいた電話を受けていた。アメリカのあらゆる空軍施設にUFO目撃報告が殺到していたからだ。(ルッペルトは)最上と思われる報告類を送れと情報将校たちに命じた」

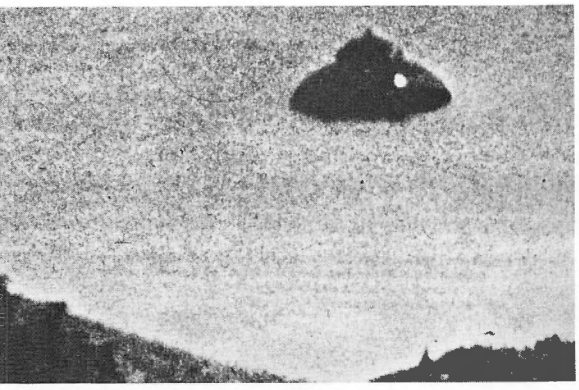
米東部沖合の潜水艦型UFO出現事件

一九四〇年代後半以後から目撃されてきた宇宙船(UFO)には二つのタイプがある。小型機は皿型、タマゴ型、円盤、球型、そして吊鐘型のスカウトシップなどで、これらは物体と目撃者間の距離、または目撃者が見た場合の空中における物体の姿勢によるものである。

こうした円盤型宇宙船は直径九メートルないし四十五メートルまで大きさがいろいろある。このタイプの宇宙船は地球上に着陸するように操縦が可能で、このことは多年にわたって多くのUFO事件で報告されてきた。

惑星間を航行する宇宙船は大きな葉巻型の船体で、この輸送船はめったに地球の大気層の上層部の下へ降下しない。そしてうんと小型のスカウトシップが着陸して、これらの母船へ帰って行く。この大きな惑星間輸送船、すなわち一般で母船と呼ばれているものは、最小でも長さが数百メートルある。巨大なものになると、うんと長いものもある。輸送船とスカウトシップの両方とも、宇宙空間の自然の電磁エネルギーフィールドを利用して作動パワーを取り出す。

あらゆる宇宙船は小さな偵察用円盤を送り出す。これは遠隔操作の小さな球体で、テニスボール大からバスケットボール大までいろいろある。UFOのすべては金属で建造されている。円盤型スカウトシップと偵察用超小型円盤は強烈に反射する表面を持っている。これらはしばしば強く輝く蛍光を放つが、特に夜空ではそうである。これは機体の推進エネルギーの電磁波で起こる効果である。このエネルギーが存在するために、宇宙船または超小型円盤のすぐ周囲に空気のイオン化が起こり、強烈に輝く色光の物体として見える。



◀一九六八年三月二十一日、米ユタ州カナブ付近でフリッツ・ヴァン・ネスト氏が撮影したアダムスキー型円盤。

三番目のタイプの宇宙船があるが、これは宇宙空間を飛ぶばかりでなく、海へ飛び込んだり水中を進行したりすることができる。これは潜水艦のような形をしている。大洋を航海する船の航海日誌には少なからぬ事件が記録されてきた。船員たちがこのタイプの大気圏外の宇宙船に関連した事件を目撃してきたのだ。私は精査された書物に報告された二、三の例について読んでいる。

一九七五年、私は一民間技術者による直接の説明を聞くようになった。その目撃者は中年の男で、核技術者としてやとわれていた。彼は十三年間沈黙を守ってきた体験について私たちのグループに語ってくれたのである。

一九六二年の秋のあいだ、彼は二人の同僚とともにニューイングランド沿岸沖へ漁に出かけた。その日の午後、海岸から数マイルの所にいたとき、彼らは船の近くの海水が荒れ狂って泡立つのに突然気がついた。一行の一人は魚の大群のまっただ中に来たと思い、網を取りに走って行った。別な一人は「きっと浮上の準備をしている潜水艦の近くにいるんだ。あぶないぞ」と叫んだ。

一同のパニックと混乱は急にとまった。そのとき巨大な船体が水中から飛び出て、水面上七メートルの空中に無音で停止したのだ。出現したのは葉巻型の宇宙船で、彼らの小さな船から百三十メートルほどの位置にいる。かなり近距離なので一同には水滴が海面に落ちるのが見えた。男たちがみな仰天して見つめる数秒間のうちに、船体の鼻先が強烈に輝く青い光で取り囲まれてから鼻先は上方に傾いた。船体は高度を少し上げて、ものすごい勢いで空中へ飛び去った。そしてアッというまにそれは空中彼方にかろうじて見られる点になった。

これはまさしく彼らの眼前で発生したのである。発生したということだけは彼らが確信をもって言えるのだが、それが何であったか、何を信じたらよいのかはわからなかった。何らかの討論または結論への飛躍をする前に、一同は各自で発生した出来事について自分の体験記を書くことにきめた。

体験について私たちに語ってくれた技術者はきわめて慎重な人で、自分の告白によってオーソドックスな科学的見解を固く保っている。しかし彼もわ

第2章　重要な目撃例

れわれの技術的レベルを超えた物を見たことを知っていた。ところが彼の目撃した物と一致するように見える写真に出くわしたときに彼は体験を語ろうと決意した。その写真というのはジョージ・アダムスキーが撮影したもので、このタイプの潜水艦型宇宙船を示している（訳注＝アダムスキー撮影の潜水艦型UFOの写真は『宇宙からの訪問者』に掲載されている）。

一九七三年のギャラップ世論調査によれば、アメリカの大人の人口の半分がUFOの実在を信じている。調査された人々の十一パーセントはUFOを見たという。この高い率は、アメリカの千五百万の人々が目撃したことを意味する（原著者注＝デイビッド・ジャコブズ『アメリカのUFO論議』より）。

別な世論調査がMENSAインターナショナル（原著者注＝高い知能指数を持つ人々の団体）について行なわれたが、それによればこの高い教育を受けたメンバーたちの六十四パーセントは、UFOが〝他の惑星（複数）から来る宇宙船〟であり、その宇宙船は〝地球人の態度を研究する乗客を輸送する〟と信じていることを示した。

元宇宙飛行士のゴードン・クーパーは一九七七年一月に『マイク・ダグラス・テレビショー』という全国的な放送にゲストとして出演したが、この番組中、クーパーは一九五〇年代初期に空軍戦闘機中隊のパイロットであったとき、ヨーロッパで目撃した事件のことを詳細に述べた。

高空を飛ぶ物体群が大体に東から西へ一万五千メートルよりもはるかな高度で移動するのが目撃されたのだ。二日間にわたってその地域の上空を数百の物体が通過するのが見られたと判断された。一、二度、その戦闘機中隊に属するパイロットのほとんど全員が到達できる限りの高度へ戦闘機で上昇してUFOを見ようとした。一日、その空軍の中隊全部の戦闘機がUFOを追跡するために発進した。マイク・ダグラスはゴードン・クーパーにむかって、UFOがどのように見えたかを話してくれと言った。

ク「そうですね、それらは一種の典型的、古典的な二重皿の形をしたもので、金属のように見えて翼はなかったとしか言いようはないですね」

ダ「それらは回転していましたか、それとも実際には自転していたのですか」

ク「見たところでは回転していませんでした。それらの背後に飛行雲も出してはいませんでしたね」

▶ゴードン・クーパー宇宙飛行士（中央）

ダ「何人の人がそれらを見たのですか」

ク「たぶん合計百名です」

ダ「あなたはそれを追跡しなかったのですか」

ク「一日はやりましたよ。だが実際にはさほどの追跡はできませんでした。相手がわれわれよりもはるかに高い所にいるからです。彼らはわれわれよりもうんとすぐれていますよ。

別な特殊な例があります。私の二人の友人が実際にアメリカの定期航空路で少し低い高度から一機のUFOに追いついて並んだのです。UFOは急激に上へ傾いて、まっすぐに上昇しました」

ダ「その二人はスピードのことを話しましたか」

ク「そうですね、それはかなり急速に加速したと言っていました。二人はジェット機に乗っていたのです」

NASA（米航空宇宙局）によって選ばれた最初の七人の宇宙飛行士の一人として、ゴードン・クーパーは一九六三年にマーキュリー九号宇宙船に乗り、自分にとって最初の軌道を回る飛行をやったが、二年後には八日間にわたるジェミニ五号の飛行の司令になった。しかし奇妙なことに最も熟練した宇宙飛行士の一人とみなされていたのに、クーパーはアポロ計画による月飛行に全く参加しなかったのである。これは彼が宇宙空間であまりに多くの物（UFO）を見ていたことと、彼はそれについてしゃべりたがるような性質の人であるために、結果的には月に人間を着陸させることになるアポロ飛行からNASAが彼を除外したのだと考える人がその宇宙開発機関に多くいた（原著者注＝モーリス・シャテレイン『われわれの先祖は大気圏外から来た』より）。この情報は数年後までNASA以外の人には閉ざされていたのである。

ゴードン・クーパーがロサンジェルスのインタビューで記者団に次のような声明を発したのは一九七六年八月である。

「他の惑星から来る知的な生物が、われわれ地球人との接触を始めようとして、定期的に地球を訪問している。私は宇宙飛行を行なっているあいだにさまざまの宇宙船（UFO）に遭遇した。NASAとアメリカ政府はこのことを知っており、莫大な証拠を持っている。それにもかかわらず彼らは大衆を驚かさないようにするために沈黙を守っているのだ」（原著者注＝ロサンジェルス・ヘラルド・エグザミナー紙、一九七六年八月十五日付より）。

一九七八年には別な重要声明が、この元宇宙飛行士によってなされた。彼

はマーヴ・グリフィン・テレビショーにゲストとして出演し、次のように述べたのだ。宇宙から来る訪問者たちはどんなふうに見えるのかという質問に答えて、クーパーは「それは信頼のできる話のすべてから知られている」と言い、「UFOの乗員はわれわれと外見は同じだ」と答え、いままでにコンタクトした本物の例（複数）があったことを知っていると簡単に述べた。

しかしその後のインタビューでは、この元宇宙飛行士はそれ以上の情報をつけ加えようとはせず、結局彼がUFOはどこから来るのかを知っていたかどうかは明らかでない。

アルタモントUFO着陸事件

一九七四年八月に発生したニューヨーク州オルバニー目撃事件（第1章で述べた）を調査中に、マーガレット・サッチズは一機のスカウトシップが着陸するという興味深い例を知り、自著『天空の旅行者たち』にそのことを書いている。

この特殊な事件はオルバニー目撃事件の発生時に近い頃、近くのアルタモントという町で起こった。この事件の詳細は地元警察の一刑事がサッチズの共同研究者アーネスト・ジャンと接したあとになって初めて知られたのである。刑事は目撃者の一人であるルース・カリー夫人という女性に会ったらどうかとジャンにすすめたのだ。

カリー夫人はナッシュ私設療養所の所長で、はじめはこの事件について話すのを嫌がっていたけれども、UFO研究家アーネスト・ジャンと会うことに同意した。

この目撃は四月三十日か、またはその頃に発生した。その夜、夫人と娘の二人は療養所から遠くない位置の道路に静止している一個の奇妙な光体に気づいたのである。なんとかして正体を見きわめようと二人は外へ出た。

二人が光体から六十メートル以内まで歩いてきたとき、柔らかい金色の輝きを放っている大きな宇宙船を見て、驚きのあまり目を丸くして見つめた。それは道路に停止しており、大きな丸窓を通して一人の人間が船内で行ったり来たりして歩いているのが見えた。どうやら操縦装置を調べているのか、それとも何かの仕事で働いているらしい。

この頃までには別な女性が療養所から出てきて二人に加わった。この種の目撃に全く不慣れな女性たちは、まもなく療養所へ引き返して、だれかを電話で呼ぶことにしようと決めた。そこで三人は離れようとしたとたん、柔らかいヒューッという音が聞こえた。そして宇宙船が上昇して急速に空中へ消えるのを三人は驚いて見つめていた。

このとき一人の使用人の夫がちょうど療養所へ帰ってくるところで、彼も宇宙船が離陸するのを目撃している。車を停めてから宇宙船が高度を上げてゆくのを見つめていた。その宇宙船が脈打つような断続的な輝きを放っているのに彼は気づいている。それから加速して視界から消えていった。

翌朝、目撃者全員は道路のほうへ出かけて行って、前夜宇宙船が見られた場所をつきとめた。そこには直径約二十二メートルの焼けた円形の部分が残っており、その中に半月の形をした着陸装置の跡があった。

このような例は読者が最初に考えるほど稀なものではない。長いあいだUFO目撃事件はUFOについて何も知らない真面目な正直な人々にも典型的な例として発生してきたのである。目撃者たちは通常自分の家族以外の人に話すのを嫌がった。多くの例で彼らは、目撃は個人的なきわめて深遠な体験であり、そのために信じてくれる人を求めたり、または新聞社に知らせてセンセーションを起こそうという気持を持たなかったのだ。だからUFO研究家が非常に接近した目撃や実際の着陸の本物の話をみつけ出すのは稀なことだった。ときたま円盤のパイロットまたは乗員が船体の内外で短時間見られた。この訪問者たちは、真実の例において常に人間だったと説明されている。これはもちろん彼らが充分に見られた場合の話である。

似たような例について、もう一つ意見を述べておくのもいいだろう。これまでに実際の事件（複数）があった。そしてそのあとで人をだますつもりのない一人の正直な目撃者が、奇妙な細部の状態を報告した。ときとしてこの目撃者は着陸した宇宙船とその乗員を遠方から見たにすぎない。本人は接近したくなかったのだ。ところが本人自身のアイデアが細部を描いて完成させるのである（大抵の人はフィクション映画の主題から持ち越したものとして潜在意識にアイデアを持っている）。

別な例では、未知な物にたいする目撃者の恐怖のせいで、自分が遭遇した物の完全な誤った解釈をした。人間があまりにも恐怖すると、スペース・ピープルはむしろ船体に入り込んで離陸するだろう。これは正しいコンタクトができないからだ。

憐みの表情を浮かべた異星人

一九五四年十月、ジェニー・レステンバーグ夫人と家族は、イングランドの自宅の屋根の真上に、ドームのついた一機の円盤が短時間停止するのを見た。船内には二人の男がドームの仕切り部屋の窓の所にちょっとの間立っており、仰天している家族を見おろしていた。

その男たちはスキー服に似た青い服を着ており、一種の透明なヘルメットをかぶっているのがレステンバーグ夫

人に見えた。二人とも肩まで届く髪を持ち、額は広い。皮膚は白かった。

下方で見上げている小グループをじっくりと見つめているあいだ、宇宙人のパイロットたちは微笑することもなく、表面上は顔に憐みの表情を浮かべていた。

別な惑星から来る宇宙の訪問者たちは、膨大な数の宇宙船によって地球の空中に彼らが存在することを数百万の人々に目撃させてきたのである。UFO目撃現象がいまや四十年の長きにわたってきたのだ。これはわれわれが認める程度にわれわれの知覚力を刺激するためである。彼らの訪問には一つの継続的な目的があった。それは最初、地球人との公然たるコンタクトをするための頻繁な着陸を含んでいた。

一九五〇年代の十年間、着陸や、人間である訪問者たちとの本物のコンタクトが数百件、世界中にあったと思われる。ただし多くの事件は当時はびこっていた態度のために、ほとんど、または全く一般には知れわたらなかった。大衆と新聞社は信じないような態度を示したばかりでなく、当時の主な研究グループは、UFOのデータを目撃事件や目撃報告だけにしぼっていた。加うるに目撃者が自分の体験を語ったり、敵意のある疑っている人に直面したりするのを嫌がる傾向があったが、この気持は理解できるものだった。

しかし地球人側の対等関係の欠如にもかかわらず、近接コンタクトのさまざまの事件がその目的を果たした。多数の目撃報告がUFO存在にたいする人々の目覚めをうながしていたからだ。大衆はしだいに訪問者たちが人間であって、実際にはわれわれと異ならないことを認めるようになった。このことが個人または社会に認められるときにのみ、個人または社会はこの分野の背後に何が横たわっているかを知ることができるだろう。言い替えれば、あらゆる思索に対比して真実が何であるかを知ることなのだ。真実は別な惑星から来る人間によって地球にもたらされたのであるから、信頼し得る個人とコンタクトすることによって、別な惑星の訪問者たちは彼らの来訪の本当の理由を知らせたのである。

彼らの存在を認めるかどうかは大体に社会にまかされている。スペース・ピープルは地球人の考え方を全然強制しないからだ。もしわれわれが証拠を無視しようとすれば、それはわれわれの選択にかかっている。しかし地球人が自分たちだけの方法で学ぶのは（地球は戦争という誤った道を行っているので）緩慢で、困難であり、混乱するだろう。そして核の絶滅の脅威のためにわれわれの文明の正しい進歩は決して来ないだろう。

創作されたコンタクト物語に要注意

私はここで次のことを少し説明したい。UFO論争の初期において、気味の悪い遭遇事件と、もっともらしいコンタクティーの体験主張の両方において、多くのインチキやニセの主張もあった。同じことは今日も行なわれている。そしてそれは自称〝UFO専門家〟によって強く支持されている別な次元に関連があるけれども、やはりナンセンスだ。

人間でない訪問者、または目に見えない実体、またはETといわれる異形、または気味の悪いヒューマノイドなどは存在しないのである。そして心霊的コンタクトには全く真実はない。UFOに関するこうした考え方は人間の想像力によって作られたものだ。しかも大抵の場合、講演したり出版したり、マスメディアを通じてこうした考え方を流している自称UFO専門家の多年にわたるバカげた論議や仮説によって、つちかわれてきたのである。今日の目撃者と思われている人々は、自分の意見を述べる場所は他にないだろう。

ニセのコンタクト物語のすべては、同一の創作の異形である。誘拐、一時的な記憶喪失、時間経過の不明、検査用テーブル、口のない奇妙な生物、催眠術だけによる過去の記憶の呼び出し等々。これは奇妙な周期を持っている。専門家たちは乱暴な奇怪な物語に信憑性を与え、公然と語り、まもなく同一の話をもっと聞いたりするのだ。

地球へやってくる文明人はあらゆる点で人間であるということを固く再確認させる必要がある。たとえそれ以上にそうであってもだ。なぜなら彼らの生命の理解はわれわれよりもはるかに大であるからだ。宇宙のどこでも人間はみな同じである。ただ精神の発達と社会の成長が違うだけなのだ。言い替えれば、唯一の相違は生命の本当の性質にたいする彼らの理解と、彼らの文明の科学技術にあるのだ。

初期の頃の着陸による個人的コンタクトの理由は、地球人との交流を開くことにあった。真実のコンタクトの報告は、われわれの文明によってただちに認められるかどうかは別として、宇宙にたいする社会の考え方を刺激し始めるだろう。これはわれわれの惑星における平和な宇宙研究開発に対する自然の、前もって条件として必要な指導であった。

しかも同時に、われわれの太陽系の他の惑星群における生命に関する真相は、こうした同じコンタクトによってUFO来訪の初期に近い頃に確立されたのである。われわれが自分たちの宇宙時代にむかって前進するにつれて、世界中のUFO目撃も続いた。しかし宇宙からの訪問者による個人的コンタクトの本物の実例は、一九五〇年代と六〇年代初頭以来、比較的に頻度が落ちてきている。この事実に注目することは非常に重要なことである。

彼らの存在の背後にひそむ真相が一九五〇年代の公然たるコンタクトによって確立されたあと、われわれの社会はそれ自体の宇宙開発をまかされた。UFO目撃はこの年代から現代までずっと続いてきた。しかし、宇宙からの訪問者の正体または起源に関して、一九八〇年代にだれかが人々を信じさせるような新しい事実の公開または〝大発見〟はないだろう。真実は今日も同じままにある。そして真実は一九五〇年代に宇宙からの来訪者の側の平和的な公然たるコンタクトによって確立された事柄を理解してこそ学ばれ得るのである。

異星人はどのような地球人とコンタクトするか

ジョージ・アダムスキーはスペース・ピープルとコンタクトした最も重要な人であった。そして彼の宇宙からの訪問者問題と宇宙に関する知識は世界に広く知られるようになった。彼の業績は彼の著書を読めばわかることだ。

比較的多くの人が、見たところ個人的な体験を持ったようだが、しかし真実のコンタクトケースを周知せしめたことは、社会に何かを考えさせる上で重要な役割を演じたのである。

多くのコンタクトは個々に見ればつまらない事のように見えるかもしれないが、それを一緒にすれば圧倒的な数になるのだ。その事件は多くの異なる国々で起こっている。したがってもっと多くの人々が、宇宙からの訪問者たちが地球人のまっただ中にいることを知り始めたのだ。どんな小さな事件でも真実のコンタクトならどれでも社会の側に注意をうながしたのである。地球へ来る宇宙の文明人は一九五〇年代に数百件の着陸と隔離されたコンタクトをやったのだ。

コンタクトをすることは彼らの側においてきわめて重要なジェスチャーであったので、無差別には行なわれなかった。読者が期待するかもしれないような最高のコンタクト候補者は、本人の自然の想念パターンにおいて根本的な誠実さを示している。生活上の職業は関係ない。テレパシックな感受力のバランスのとれた状態と日常生活における真面目さを地球人が持つことが問題になるだけである。このことはスペース・ピープルの波動感知装置によって前もって記録され得るのだ。アダムスキーの『宇宙船の内部』（邦訳アダムスキー全集第一巻『宇宙からの訪問者』第二部）に少し述べてある装置である。

この特殊な装置はただ人間の思考に関係のあるようなタイプの想念波動を記録するだけだ。こんなふうにして宇宙から来る訪問者たちはコンタクトをする前に、だれが友好的で受容的であるかを知るのである。

同じ方法でもって彼らは敵対的な傲慢な人や、好奇心はあっても謙虚さに欠ける人たちを避けることができるはずだ。自分が理解していない物事を過度に恐れる傾向のある人たちも、人間の性質には常に予測しがたいものがあるにしても、通常ふるい分けられる。すでにおわかり頂けると思うが、別な世界から来る友人たちは、人を傷つけたり恐れさせようとして来るのではなかった。彼らはそのタイプの感覚を持たないのだ。

以上はあらかじめ計画されたコンタクトの例である。しかし偶然に会見が発生したという多くの報告がある。目撃者は知らずに着陸した円盤の付近にいて、偶然にそれを見たというのだ。本人次第である人は遠くから円盤を観察することを選ぶし、一方、他の人はもっとよく見ようとして接近して行ったと報告している。

ときとしてガラスの丸窓を通して船体内にパイロットまたは乗員を見ることができたし、時折、何かの理由で乗員が船体の外にいるのが見られたこともある。こうしたこの世のものならぬ体験によってボーッとなっている目撃者は、通常二つの動作のうち一つをとる。逃げるか、またはそのあたりにとどまって発生した事柄を見ることに決めるかだ。

一方、円盤の乗員たちは地球人の目撃者を見たならば、やはり同じように選択するだろう。彼らは偶然の遭遇のために友好的挨拶をすることを選ぶか、または地球人と会話をする時間や好みを持たなければ、宇宙船に乗ってただ離れるだけかもしれない。

したがってこうした偶然の会見の例においては、目撃者と宇宙からの訪問者たちの両方の動作しだいで、コンタクトの度合もさまざまであった。

今日コンタクトは稀だけれども、これは新しい展開がないという意味ではない。むしろUFO訪問の完全な真実は、最初にもたらされた物を知ることによって最もよく理解されるのである。その最もいちじるしいものはアダムスキーの業績なのだ。

世界が空飛ぶ円盤の報告に慣れるようになってからまもなく、宇宙の訪問者たちはまず最初に彼らの飛来の背後にある真相を確立した。充分な確証と世界の容認が得られる前に、ある程度の時間がかかり、社会が発達する必要があることは彼らも知っていた。それが実現しなかったということは彼らの失敗ではなくて、われわれ自身の失敗なのである。こうした理由は本書で論じる余地がある。

『ユーフォロジー＝科学と常識からの新しい洞察』で著者のジェームズ・マキャンベルは次のように述べている。つまり、一九五二年から六八年までのあいだに着陸した宇宙船の近くに普通の大きさのUFOパイロットを目撃者が見たという事件が八十三件報告され

たというのだ。これらの報告された事件が起こっているあいだに、目撃者は宇宙の訪問者と口に出した言葉によって会話することができたのである。マキャンベルはアダムスキーが一九五二年に着陸した円盤の金星人パイロットに会った後、自分の体験を公開した最初の人であると信じている。

メキシコの驚くべきコンタクト事件

引用されている別な例がメキシコで翌年に発生した。個人タクシーの運転をやっているサルバドール・ビリャヌエバはアメリカとの国境へ二人の男を運ぶことを依頼された。しかし彼の車がメキシコ市から約九十六キロメートルの所で故障した。お客は荷物を持って別な車を雇い、エンジンのトラブルと取り組んでいるサルバドールだけを残して去ってしまったので、彼はにっちもさっちもゆかなくなった。しかも雨が降っているのだ。

雨がやんだとき、サルバドールは故障を調べようとして車の下をのぞき込んだ。まもなく彼はだれかが車の方へ歩いてくる足音を聞いた。サルバドールが立ち上がると二人の男が見えた。身長約一メートル四十センチ、上下続きの飛行服を着て、腕にヘルメットをかかえている。顔には楽しそうな表情を浮かべていたが、一人の男が微笑して、故障したのかと運転手に尋ねた。

サルバドールがその男の質問に答えてから普通の会話が始まった。一人の男だけが話すのに気づいたサルバドールは、その友達もスペイン語を話すのかと聞いてみた。そして別な男は話さないことを知ったけれども、言われていることを理解できることはわかった。

雨がふたたび降り始めたあとも、車の中で会話は続いた。そしてビリャヌエバ氏は新しい友人が普通の人間としてはあまりにも知識があることを知ったのである。そこで彼は相手に「どこから来たのか」と尋ねたら、その男は地球の者ではないと答えたのだ。

ビリャヌエバは彼らが「自分たちの宇宙船を見たいか」と尋ねるまでは、相手の言うことを信ずる準備はできていなかった。

車を離れてから彼は泥の沼地を歩いて彼らのあとに従い、道路から約半キロメートルの空地へ来た。ところが二人の男が雨にぬれた沼地を歩くときの様子はビリャヌエバを仰天させたのである。彼らの両足は泥の地面に全然接触しないのだ。目に見えぬある力が彼らの両足と泥沼とを反発させているらしい。両人が腰にしめている、ずらりと穴が並んでいるベルトの表面で光っている光（複数）に関係のある効果らしい。一方、ビリャヌエバの長靴は泥まみれになってしまった。

全員が空地へ到着したとき、そこには別な惑星から来た宇宙船が停止していた。輝く船体は直径約十二メートル。縁から上部には丸窓群のついた低いドームがある。機体は巨大な三個の金属製球体すなわち着陸用球体の上にのっかっている。

一枚のパネルが開いて、内部へ通じる短い階段がわりになっている。二人の宇宙人は入口の方へ昇って行き、振り向いてからビリャヌエバにむかって「中へ入りたいですか」と尋ねた。

このことはすべてビリャヌエバにとってアッというまに起こったのだ。彼は自分の理解をやや超えた出来事になった状況のすべてに突然、少々恐れをなしたので、中へ入らないことにして車の方へ走って帰ったのである。

道路までたどり着いてから後ろを振り返ると、宇宙船が灌木の上を上昇するのが見えた。ちょっと停止した後、常とは逆に振り子運動によって上昇して行き、数百フィートの高度で突然強く輝いてから、信じられぬほどのスピードで垂直に飛んで行った（原著者注＝マックス・ミラー著『空飛ぶ円盤――真実かフィクションか』より）。

ビリャヌエバが自分の体験を他人に話そうと決めるまでに数カ月かかっている。彼は実際に働いている人間としての視野から体験を簡単に述べた。そこで新聞社がそれを取り上げたので、その結果、彼はメキシコ政府の前に呼ばれて話すことになったのである。

その事件は真実と認められて、広く知られることになった。

ブラジルの円盤同乗事件

ジョアン・デ・フレイタス・ギマラエス博士は尊敬される弁護士で、古代ローマ法の権威者だが、彼自身の言葉をかりていえば、彼は空飛ぶ円盤というものを全く考えなかった人で、したがってその問題については全く何も知らなかったのだが、一九五七年の夏にブラジルで最も予期し得ないコンタクトを体験したのである。

太西洋に面したある海岸町で、博士は夕食後、海岸へ夕方の散歩に出かけた。波打際に近い所に腰をおろし、うねる波を見つめていたとき、海の水面が動揺しているのに気づいたのだ。

突然、〝高くふくらんだ船体〟が水面から出てきて、海岸の方へゆっくり飛んできてから、球体の着陸装置を下にして静かに着陸したのである。

まもなく二人の男が船体から出てきてギマラエス氏の方へ歩いてきた。

少し驚いたけれどもギマラエス氏は平静さを取りもどし、ポルトガル語で（それが彼の母国語なので）「あの船体に何か故障でも起こったのか、なぜあなた方は着陸したのか」と尋ねた。多くの言語を知っているので、博士はその質問をフランス語、英語、イタリア語でくり返したが、質問のどれにも答が得られない。

彼はその訪問者たちが完全に人間であり、長い金髪をたらし、白い皮膚を持ち、身長は約一メートル七十五センチあることがわかった。

相手は話さないけれども、彼を船体の中に招き入れようとしているという明瞭な印象を受けた。しかも相手がしゃべらないのに、彼らを前にしていると安らかさと静けさのフィーリングがやってくるのだ。彼らの宇宙船の内部を本当に見たくなったギマラエス氏はその機会をためらいなく受け入れた。

彼は相手と一緒に宇宙船まで歩いて行った。内部へ入ってから彼は三番目の男に会った。そしてまもなく船体は地面を離れて短時間の宇宙飛行へと飛びたったのである。乗っているあいだ彼は相手が時折言葉を口に出すばかりかテレパシーを用いることを知って驚いた。

あらゆる事を知りたくてギマラエスはコンパートメント内の自分の周囲のあらゆる物を観察した。彼が聞かされたところによると、振動する目盛りを示す円形の装置が、宇宙空間の磁気力を実際に計っているという。この力が船体を推進するのに利用されているのだ。

コンパートメントの丸窓から外を見て彼は大気圏外のすごい美しさに驚嘆した。大気圏内のある地域は明るい色のスミレ色を呈しており、他の地域はまっ黒で、星々の絵のような眺めを見せている。もう一つの地域は無数の光点を見せており、強烈に輝く光体群が色光の虹をつらぬいて滝のように落ちていた。このすさまじい光景を見たあと、宇宙船は大気圏の外を飛行した。この飛行に要した時間は三十ないし四十分ほどである。

あとでホテルに入ってから博士はこの素晴らしい体験について、あらゆる人に大声で語りたくなったが、少し考えてから思いとどまった。この後一年以上のあいだ彼は自分の妻以外のだれにも話さなかった。

後に彼が親しい同僚に事件の詳細を述べたところ、そのために話の記事が数種類の新聞に掲載された。大衆は大いに感動し、体験について話せという要求が強く盛り上がった。

ギマラエスは宇宙の訪問者たちが友好的で、彼らは地球の住民を調査する仕事に従事しているのだと躊躇なく述べた。もっと重要なのは、彼らは人間の原子エネルギーの実験でひき起こされる状態を調査しているのだ。

博士は宇宙空間の短い飛行中に非常に多くの事を知った。そして科学者や政治家が核実験を無差別にやって爆発させているようなやり方は、地球の大気圏のさまざまの保護層を破壊するような大きな結果をもたらすのだと結論づけている。結局われわれはみなこうしたつまらない爆発のひどい結果によって苦しむだろう。

宇宙船に乗った体験から、ギマラエス氏は、別な惑星から来る訪問者たちは、この危険な実験に関してわれわれに警告するために来るのだと確信している。

この章で私は記録されている数例だけを述べた。もっと多くの事件が長いあいだ公開されている。すでに述べた代表的な例に見られるように、遠くにいる円盤の丸窓を通して人間を見たというのから、地上の短時間の遭遇の報告、すなわち目撃者が船内に乗るようにと招かれて宇宙空間の観察ばかりか適切な情報を与えられたギマラエス博士のような非常に稀なケースに至るまで、報告類はさまざまにわたっている。

彼らの存在は世界中の無数の目撃によって記録されているのだが、それ以上にわれわれは彼らが彼らなりの条件で地球へ来た理由の真相を認める必要があるだろう。スペース・ピープルは地球人との面とむかったコンタクトを通じて、彼らの来訪の背後にある真相を明らかにするだけだろう。

もちろんコンタクトしたと報告した人のすべてが真実を語っているわけではない。籾殻から小麦を、推測から真実を選び出すのは、われわれの社会にまかされている。

それでもなお、ほとんどのコンタクトの報告は宇宙からの訪問者たちとの友好的な挨拶そのものであったことが認められねばならない。これらの報告は訪問者たちが人間であるという事実を強く支持しているのである。

一方、ジョージ・アダムスキーは宇宙的な理解によって、異星人訪問の完全な事実を公にするためにスペース・ピープルの主な代理人になった。なぜなら彼はそうなるべきさまざまの能力を持っていたからだ。彼の三冊の書物は惑星間を航行する宇宙船と地球へ来る人々に関する決定的な報告書として広く認められた。その書物は少なくとも十八国語に訳されたのである。

先にも述べたことだが、彼ら（スペース・ピープル）の来訪には一定の目的と筋道があった。一九五〇年代と六〇年代にはコンタクトを行なうためにスカウトクラフト（円盤）の着陸がしばしばあったけれども、それ以来、真実のコンタクト事件はほとんど発生していない。基本的に言って次の事柄がその理由である。

一九六五年頃までにはスペース・ピープルは地球以外の惑星に生命が存在するという知識を持つようになるまでわれわれの文明を次第に目覚めさせる仕事を終了した。このことは一般的に言ってちょうど地球の超大国（米ソ）が宇宙を探険しようとしていたようにわれわれ自身の技術の進歩と一致していた。また一九六五年までにはＵＦＯの完全な真相とその知識を生かす計画が与えられていたのだ。

（以下次号）

A Mysterious Car Flies Over A Mountain!

山中湖畔で空中を飛んだ自動車！

驚異的な事実が八年後明るみに――

●清水　南

最近各地でUFO目撃例が多く報告されているが、今回は私が偶然知った私の住む山梨県内での特異な目撃例を紹介させていただく。

この事件は、この地球上でのスペースプログラム（異星人による地球救済計画）により、他の惑星より飛来する人々が実際に活動しているという証拠になると考えられる重要な目撃例である。

私は昨年春より毎月一、二回カメラを持ってUFOの観測に出かけている。もうだいぶ通っているが、まだ一度もUFOが現れたことがない。しかしGAPの地方支部大会等、グループでの活動時にはいともたやすく出現したりする。やはり大勢で結集すると波動が強化されるのだろうか、それとも別な意味があるのだろうか。

UFO観測に行って一人物に会う

今年六月末のある日、朝から少し雨が降っていた。午後になって雨も上がったので、四時近くになってUFOの観測に出かけることにした。あまり時間がないときは近くの山へ行くことにしている。

車にカメラや双眼鏡、そして最近UFO撮影のために買った8ミリビデオカメラ等、さらにUFOコンタクティー誌のバックナンバーも積み込んだ。これはUFO観測中に行き会った人でUFOに関心のある人に差し上げるためである。

車を走らせて、所要時間十分位の、ときどき行っている山の麓に着いたが、山の上の方はまだ雲が厚く垂れ込めているために、どうも観測には向かないようだ。そこで急遽、反対側にある万力公園の方へ入って行った。

ここは笛吹川の辺にあり、市民会館等もあって、ちょっと景色の良い所である。川縁の駐車場に車を停めて、早速ビデオカメラを回し始めた。

驚嘆すべき話を聞く

河原では鮎釣りが解禁になっており、何人かの釣り人が川に入って糸を流している。まわりの山もところどころ青く見えだした。

これらの風景を撮っていると、すぐそばにワゴン車を停めてギターを持ち出し、芝生の上でこれに弦を張っていた人が呼びかけてきた。

「何を撮っているんですか。良く見えますか」

「鮎釣りをしている人や、まわりの景色を撮っているんですよ」と答えたが、「本当はUFOを撮るためにここへ来たんです」と私は思いきって言った。

するとその人は勢いづいて話にのってきた。

「ああ、UFOですか。私もUFOを何回か見ましたよ。だからUFOにはずいぶん関心があるんです」と言って、さらに話を続けた。

「実は私はずっと以前に空中を飛んだ自動車を見たことがありますよ！　あのときは本当にびっくりしました」

「えっ、空中を自動車が飛んだ!?　そ

れはまたどういうことですか」

私は思わず身を乗り出して耳を傾けた。

「いやぁ、あのときは本当に驚きましたね。いまでも信じられないぐらいですが、しかし友人と二人で見たんですから絶対に間違いありません」

その人は自信ありそうな顔付きで驚異的な目撃事件を語ってくれたのである。

山中湖畔の峠道を車で登る

この人は私の住んでいる同じ塩山市千野の住人で、武藤一生さんといい、年齢は四十九歳、芸名を藤一男という流しの歌手である。いただいた名刺にはボックスレコードより出したオリジナル曲『母川慕情』その他六曲が刷り込んである。人の好い正直そうな方で、善良な性質と見受けた。

武藤さんの話によると次のとおりだ。いまを去る八年前の昭和五十四年、六月のある日、近くの知り合いで釣り仲間の鈴木保親さん（当時六十七歳）と静岡県の沼津へ車で釣りに出かけた。二人は一緒にときどき沼津方面へ釣りに行くのだ。

この日は深夜一時頃に家を出発して山中湖のそばの籠坂峠にむかって走っていた。湖畔の道を通らずに山の中の近道の坂を登って行ったのだ。

この道路は国道一三八号線から南寄りに入った道で、静岡県の御殿場市に通じている。ここは幅員が狭く、六メートルぐらいで、しかも上に登るにつれて急なカーブが多くなっている。

不思議な車が左側を並んで走る

武藤さんたちがこの峠の道へさしかかったのは午前三時頃だった。つづら折りのこの峠道を登っていると、後ろから一台の車のヘッドライトが車内のバックミラーに映ってきた。そしてまもなくこの車は武藤さんのすぐ後ろへ追いついてきた。どうやら先を急いでいるようで、追い越しをしたいらしい。

しかし峠の狭いカーブの多い道なので、簡単に追い越しはできない山中だ。どこかの待避用空地が見つかるまでは我慢してもらおうと考えながら武藤さんは車を走らせていた。

ところがなんと、後続車は道路の左側を走っている武藤さんの車の、右側でなくて左側に入ってきたのだ。日本の交通法規では追い越しは右側にきまっているし、だいいち武藤さんの車は道路の左側の、山の斜面すれすれの位置にいるのだから、別な車が割り込むすきなどはない。

武藤さんはびっくり仰天した。その車はハンドル操作を誤って左側の山中に突っ込んでしまったのではないかと突差に思ったが、左方を見た武藤さんはアッと驚いた。その車は道のない山中の森林の空間を並んで走っている！その間十数秒。

二台の車のヘッドライトの反射光でその車を運転している人も見える。黒っぽい服を着た若い男だ。同乗者はいない。

呆然となった武藤さんは助手席にいる鈴木さんに声をかけた。

「そこに道路があるのかね？」

「道路のない所を別な車が走っているぞ！」

鈴木さんもうわずった声で叫んだ。車に詳しい武藤さんはその車の型式がニッサン五一〇セダンで、白っぽい塗装の車であることを確認した。

空間を上昇して行った自動車

左方を見た二人は叫んだ。

「ひゃーっ、あれは何だ!?」

奇怪な自動車は武藤さんの車から離れて左の山の斜面を登って行くではないか！道のない森林地帯の樹林の空間を、その車はライトをつけたまま走って行く。木の葉や枝の間から車体がチラチラ見え隠れしながら登っている。白っぽい排気ガスもはっきり見えている。

あっけにとられてこの光景を眺めている二人をあとにして、その車はまるで宇宙戦艦ヤマトのように加速しながら山の上の方へ上昇して消えてしまった。あとには白い排気ガスが明瞭に残っている――。

なんということだ。いま見た光景は夢ではないのか。信じられない。どうしてあんな所が走れたのだろう。

だが絶対に夢ではない。現実の出来事なのだ。自分たちはいま峠道で車に乗っているではないか。そして二人とも不思議な車を見たのだ。

これは一体何を意味するのだろう？二人は車を停めてしばらく論議したけれども皆目見当がつかない。結局、帰りに明るい場所でもう一度現地を調べてみようということになった。

強烈に輝くUFOが空中に出現

不思議な自動車を見たあと、武藤さんたちは籠坂峠に出て静岡県側へ下って行った。ところがまたここで不思議な物を目撃したのだ。

空中を飛んだ奇怪な自動車のことをしきりに考えながら須走を御殿場市内の方へむかって走っていると、突然富士山をバックにした空間に、オレンジ色に強烈に輝く光体が出現した。ちょうど富士山の六合目ぐらいの高さの位置だ。

相当に大きな発光体で、少しゆらいでいるようにも見える。これは到底大きな星というようなものではなく、見かけ上、直径が満月の四分の一ぐらいはあった。ときどき輝きを変化させて強くなったり弱くなったりする。

二人は車を走らせながら、この発光体をしばらく見ていた。何ともいいようのない不思議な感じの火の玉だ。といって気味の悪い人魂ではない。

夜なので車からの距離はよくわからない。先程の奇怪な自動車に続いて、今度はUFOの出現。今夜はなんと不思議な夜なのだろうと二人は語り合う。

この須走の道を下りながらずっとそのUFOは見えていたが、その先の自衛隊のある所で休憩をしながらもっとよく見ようと、車を停めて外に出た二人が空を見上げると、このUFOは突然消えていた。

この日、釣りを終えた武藤さんたちは、帰途も同じ籠坂峠の道を下ってきた。そして昨夜あの自動車に出会った所へ車を停めてしばらく観察したけれども、正規の道路以外に車の通れるような道は全くないことがわかった。

やはりあの自動車は道のない山の森林地帯の少し上の空間を上昇して行ったのだ。

真面目な性格の武藤さん

以上の話を聞き終わってから、私は武藤さんに聞いてみた。

「この事件のことをだれかに話しましたか」

「ええ、家へ帰ってから知り合いの何人かにこの話をしましたが、だれも信じてくれませんでした。目の錯覚ではなかったかとか、寝ぼけていたのだろうとか、全然とりあってもらえませんでしたね。

それで、それからは人に笑われたりするものですから、もうこの話はしないようにしてきました。

けれども鈴木さんと会うたびに、あのときの出来事を思い出しては話し合っていました。あのときは本当に不思議だったねと、いつも言っています」

武藤さんはその他にもUFOを二回目撃している。あの事件のあった日からはUFOに特に関心を持って、たびたび空を見るようにしているという。

「それにしても不思議なことは、きょうここで清水さんに出会って話を聞いてもらったことです。初めて私の話を真剣に聞いてもらって胸の支えがおりました」

武藤さんは大変満足そうに語る。

あの不思議な自動車がわざわざ武藤さんの車の左側に並んで走ってみせてくれたというのは、どう考えてもスペース・ピープルと関係のあることで、しかも武藤さんの深い宇宙的なカルマによるものだろうと思う。あるいは、これからも武藤さんは不思議な体験をするのではないかという気がする。

武藤さんに厚くお礼の言葉を述べてUFOコンタクティーのバックナンバーを数冊渡して別れた。

数日後、同乗者の鈴木さんに会って話をうかがったら、事件が真実であることを確証して次のように語った。

「あの籠坂峠の上りで武藤さんが、そっちを（左側を）車が走っているけど、そこに道があるのかと尋ねた。見るとやや前方の道のない所を白っぽい車が走っていた。

その車はそれから私たちの車から離れて左の山の斜面の方へ登って行った。なんとも不思議な出来事で、いまでもよく覚えている。

車を運転していた人も見えたし、排気ガスもはっきり見えた。

それから籠坂峠の下りでは大きな火の玉が長い時間空中に浮かんでいた」

最後に鈴木さんは言った。

「私は武藤さんと長くつきあっているけど、武藤さんは真面目な人で、ウソをつかない人ですよ」

この言葉は大変印象に残った。

スペース・ピープルの空陸両用車？

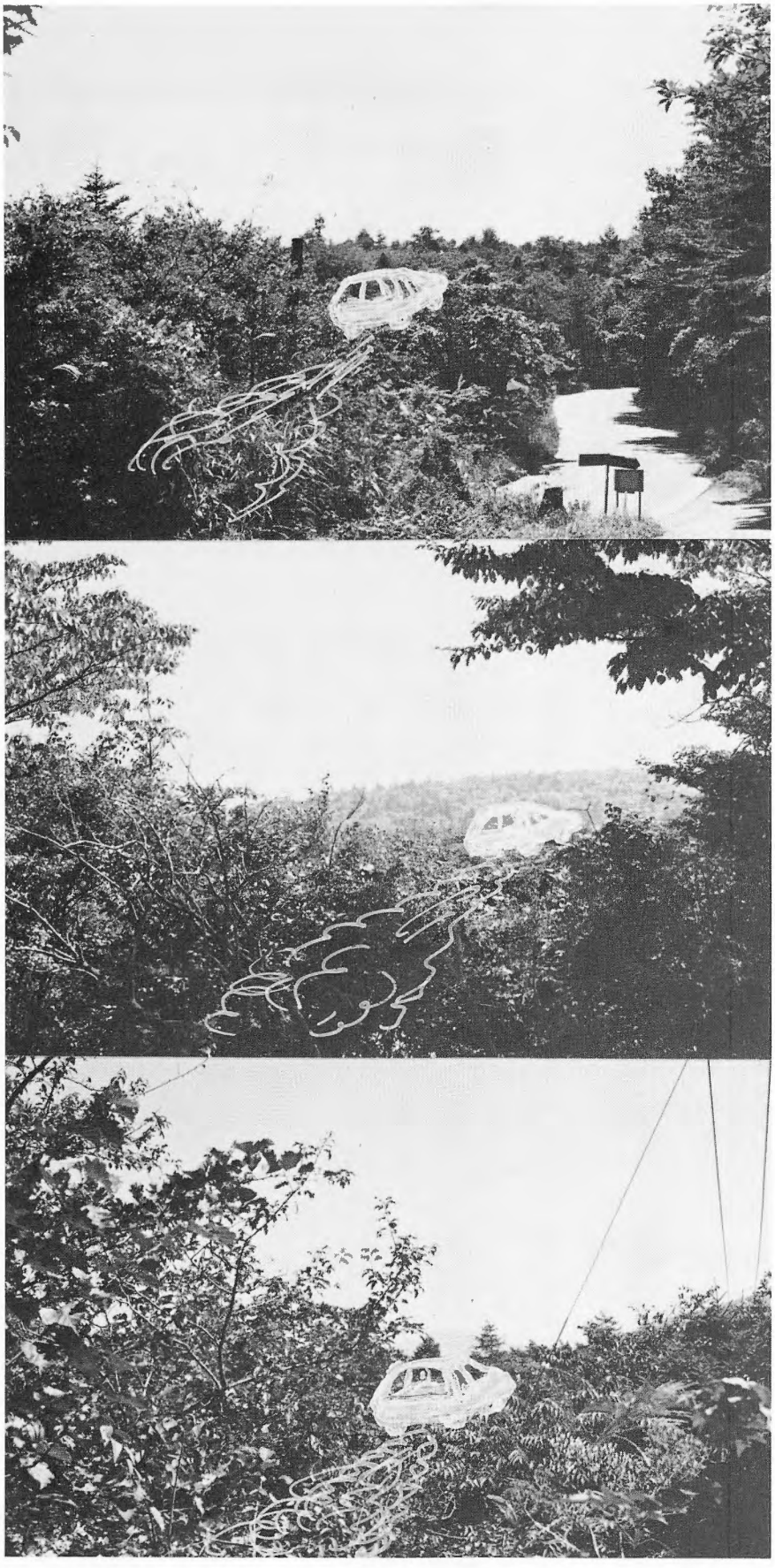
籠坂峠で森林地帯の真上を飛んだ奇怪な自動車の正体は何か？　これには理由が二つ考えられる。一つは上空の母船から特殊な放射線を送って、一種のホログラフィー効果により、立体像を見せた。他の一つは、スペースピープルが地球の自動車を改造して空陸両用車を所有していた。その場合、円盤と同じ原理のエンジンを積み込んで空中飛行を容易にしているのかもしれない。ホログラフィー効果にしては、山中に排気ガスが残ったという点が気になるところだ。しかし超絶した科学技術を持つ異星人なら排気ガスらしきものまで見せるのは茶飯事だろう。

これについて日本GAP会長の久保田先生は次のように話しておられた。

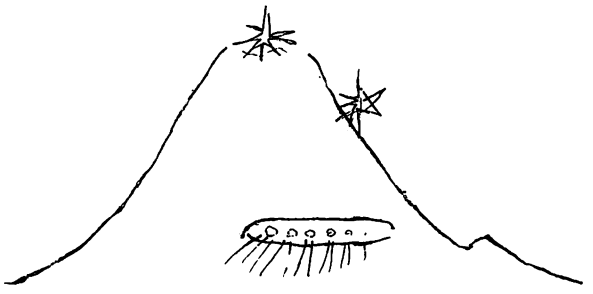
「名高いフランスのルールドの事件も、ベルナデットが見た聖母マリアの幻というのは、上空の母船から送られた放射線による一種のホログラフィー効果の線が濃厚だ。ポルトガルのファティマに出現した太陽円盤はまぎれもなく本物の宇宙船で、ジャシンタら三人の子供に出現した聖母マリアの姿も、やはり一種のホログラフィー効果であったと思う。メキシコのグァダルーペの聖ディエゴの事件もおそらくそうだろう。地球人の精神の浄化を目的としてこうした一連の対地球活動が特殊な操作によって行なわれたと考えられるが、すべてみなキリスト教の神秘、奇跡とされてしまった。だがキリスト教国の人たちにはその方法がよかったかもしれない。恐怖心を起こさせないでイエスの説いた愛の教えを浸透させる効果があったからだ。

しかし武藤さんのケースでは鈴木さんという人も一緒に目撃している。これは右の三つの例とは異なる特殊な実例だ。そうすると、やはり実体の自動車を使用した何らかの示唆またはメッセージを含む一種の実証行為だったのかもしれない。異星人はこうしたカム

フラージュ車を地球で使用していると春川氏も言っていた。氏によると、スペース・ピープルは地球上であまり自動車を使用しない。使用するとすればかなりの高級車だけ。これは自動車のエンジンから発する何らかの振動または波動が人体に良い影響を与えないからだと思われる。したがってスペース・ピープルは地球上の乗物としては電車、飛行機などをよく利用する」



◀山中湖に近い籠坂峠の道路現場を筆者が撮影し、森林上を飛んだ自動車を白インキで描き込んだもの。道路の左側を武藤さんの車と並行して走った後、この写真上のように樹林上を飛び始めて、写真中と下のように山の斜面を登って行った。



Numbers of UFOs Appear over Mt.Fuji

富士山にUFOが大挙出現

3機の母船と10数機の小型機が……

清水敏恵

〈イラストは筆者による〉

私は本年九月二十二日夜から二十三日早朝にかけて行なわれた春川正一氏主宰グループのUFO観測会に初めて参加させていただきました。場所は富士山の二合目付近で、かなり寒かったのですが多数の方が見えていました。時刻は二十三日の午前一時半頃から四時前ぐらいの間です。

現地に着いたときは、ほとんど曇りの状態で、星もポツンポツンとしか見えていなかったのですが、みんなで輪を作り、空中にむかって呼びかけを始めたら、不思議なことに、私たちの上空だけがポッカリ穴があいたように晴れて、きれいな星空が見えてきました。こういうことはよく起こる現象だと春川氏がおっしゃっていました。

リラックスしながら楽しく呼びかける

最初の呼びかけのときに、みんなが緊張した雰囲気を作っていることを春川氏が指摘され、「もっと遊び心を持った方がよい」という意味のことを言われたので、私は少々びっくりしました。いままでUFO観測についてこんな注意をされたのは初めてだったからです。生真面目で堅い態度でもうまくいかないし、単なる興味本位でも届きません。やっぱりバランスのとれた感覚が大切なようです。

そこでまず深呼吸をし、心と身体をリラックスさせて、次に頭の中に黄金色のイメージをできるだけ強くしっかりと描きます。そしてはっきりと声を出して呼びかけを行ないます。

ここで春川氏から大切なことを教えていただきました。それは次のとおりです。

「人間はだれもみな宇宙と切り離された存在ではないから、どんな人でも宇宙とのパイプラインをすでに持っている。それを実感すること。したがって空にむかって呼びかけるというよりもむしろ自分の内部にむかって呼びかけるようにするとよい」ということです。私にとってはとてもよい勉強になるお話でした。

それから、数分間呼びかけてはボーッと休むというのをくり返す方が、呼びっぱなしより効果があるのだそうです。心の緊張を防ぐということなのでしょう。

想念に応じて光体がしばしば出現

以上のことを念頭にいれて観測を行なっていますと、いきなり富士山の頂上がピカッピカッと二、三回強く光りました。これがこの夜の始まりです。

しばらくしてから輪を解いてみんなで自由に富士山をながめたり、また呼びかけをしていました。

すると、こちらの呼びかけに答えるかのように山頂で光り、その右下あたりで光り、こんなふうにして何回も点滅現象が起こり、その光が見えるたびにオレンジ、黄、ブルー、赤と違って見えるのです。そして下方から上方へ照らすサーチライトのような光も見え、私はそのサーチライト状の光の中に白くてタマゴ型の物体が浮かんでいるのが見えました。それが何であるかはわかりませんが、とにかくきれいでした。

その後、場所を変えて富士山の方向から視点を変えながら観測することになりました。そこでは春川氏が呼びかけて私たちが空を見ているという状態だったのですが、私の居た場所は木のかげで視界はあまり良くなくてはっきり見えませんでしたが、何人かの方が前方で光る現象を目撃されたようでした。その間、私自身は肉眼では確認できなかったのですが、不思議なことに自分の胸の中が〝光っている〟ような感じがしていました。

母船が出現！　すごいスペクタクル

それからまたそこを離れた私たちは各自バラバラになって元の場所へ移動しました。そのとき突然、前方を歩いていた人達の中で拍手と歓声が上がったので、何かなと思って見ると、また富士山がすごいことになったのです。

山頂と右下の山ぞい付近で二つの光がパッパッと信号みたいに交互に光り合ったりしているのです。そしてだれかが富士山に向かって「ハーイ！」と

元気よく声をかけると、それに合図をするかのようにパッと光るのです。私は思わずみんなと一緒になって手を振ったり歓声をあげたりしていました。

そうすると面白いことに、こちらが無邪気な子供のようになって手を振ったり声をかけると、それにしっかりと応えてくれるのです。

春川氏もおっしゃっていましたが、こちらの一喜一憂に反応していたようです。ちょっとでも邪気が入ると合図もこなくなり、ほんとに想念状態の観察のよい勉強をさせてもらって、これからの能力開発等によい参考になったと思います。

元の場所にもどって、みんなで富士山の方を見ていると、双眼鏡を持った人が「あそこに母船がいるみたい」と言われたので、「えっ！」と思って見ていたら、白い光の点が二つ並んでいたのが、だんだんつながって細長い棒状の物になってきました。

そのまま見続けていると、窓のような丸いものが一列に並んで、そこから光が洩れているのが見えました。くっきりとした全体像は私にはよく見えなかったのですが、母船が三機ほどいて、白い光を出しているようでした。

あとで聞いた話では、母船三機、スカウトシップ十数機が出てきたのだそうで、今更のように驚いています。どうやら以前に何度か起こった富士山の地震に関する調査をしているんじゃないかということでした。

その後はもう母船からのサーチライト、スカウトシップの点滅信号のオンパレードで、私なんかは十年分ぐらいの目撃を一夜で味わってしまいました。とにかくすごい夜でした。春川氏によると「私たちの前途を祝福して下さっているのでしょう」ということでした。しばし感謝感激。

時間も終わりになってきて終了のご挨拶を行ないましたが、その後も光はしばらく続いていたようで、何人かの方は残って観測されたことと思います。写真を撮っていた方も数名いたようです。何か撮れているとよいのですが――。

公平なスペース・ピープル

私は同乗させていただいたGAP会員の長沼氏の車で数名の方と帰路につきました。GAPからもかなりの会員の方が参加しておられたようです。

車内で少し睡眠をとりましたが、朝も明ける頃、車は都心にむかっていました。目をあけると新宿の超高層ビル街が見えましたけれども、とても違って見えました。まるで地球以外の別な惑星に行って帰ってきたみたいに――。

富士山はよくUFOが出る所だと言われていますが、そういう場所柄を考慮に入れても、あの夜の出来事はすごかったなあと実感しています。

それと、私にとって一番勉強になったのは、今まで想念コントロールの仕方がヘタだったということです。自我（エゴ）を抑制しようとするのあまり、知らず知らずに自分を戒（いまし）めていたようで、もっと素直にあるがままの自分を見つめていこうと思いました。

スペース・ピープルの方々はほんとうに地球人を分けへだてなく見ているなあと実感しました。オープンマインドで、明るく「ほんとに楽しい！」という感じで呼びかけると、きっとどんな人の前にでも現れる！　そんな気がしました。

今回の観測にあたって、車に乗せていただいた長沼氏、春川氏とそのグループの斉藤氏、そして参加されたみなさんに心から感謝したいと思います。

秋一夜、呼べばこたえる富士山は
ひと足早いクリスマスかな

※

原稿がなんとか仕上がりました。記憶の新しいうちにと思ってそのときの様子を頭に浮かべて書いたつもりです。

私が春川氏の主宰されるグループに参加するようになって何カ月かたちますが、私にとっては学ぶべきことが沢山あって、アダムスキー氏の本を読むにあたっても新たな感動が起こります。

こういう宇宙問題を扱っている人々はやっぱりどこかにつながりがあるんだということを感じます。単なる情報交換に終わってはいけないし、また孤立してもまずいし、広い気持で進まなければと思います。どんな人からでも何かを学ぼうとする謙虚な態度が大切なのだということを春川氏から教えてもらった感じです。

今回の目撃を原稿にしてほしいと久保田先生から依頼されたということを電話で春川氏に話しましたら、「それはいいことじゃないですか」と言われ、激励されちゃいました。そして「久保田先生によろしくお伝え下さい」と春川氏はおっしゃっていました。

（編者注＝筆者は日本GAP会員。前山形支部代表・清水正氏夫人。

文中の春川正一氏（仮名）は、本誌93号より98号まで連載した「私は別な惑星へ行ってきた！」と題する記事の主人公。現在能力開発団体を主宰。時折UFO観測会を主催して多大な成果をあげている。グループ名は自由精神開拓団といい、毎月講演会を開催して能力開発その他精神向上のための指導を行なっている。以上は個人活動。

職業としては今春公務員を辞して現在、東京新宿、SSI能力活性研究所内のボストンクラブに籍をおき、超能力専門誌『ボストンクラブ』（月刊）の発行人として活躍中。

〈毎日、読売、朝日各紙に掲載された六十二年六月以降の科学記事を抜粋紹介。各記事末尾の数字は掲載月日を、Mは毎日、Yは読売、Aは朝日を示す〉

大マゼラン星雲の超新星は小半径の青色超巨星爆発だった（7・23M）。

大マゼラン星雲で今年二月に発見された超新星が、これまでの超新星と違って不思議な明るさの変化を見せていたが、このナゾを東大教養学部宇宙地球科学教室の野本憲一助教授と大学院生の茂山俊和さんのグループが明らかにした。これまでの観測値とコンピューターシミュレーションを駆使した成果で、爆発したのが半径の小さい青色超巨星だったため、というのが結論。従来の超新星では観測できない星の内部の情報もわかってきたといい、英科学誌「ネーチャー」七月二十三日号に発表した（7・23M）。

ブラックホール確証つかんだ

米国の天文学者は二十六日、アンドロメダ星雲（M31）とその近くにある銀河（M32）の中心部に、それぞれ巨大なブラックホールが存在する証拠をつかんだと発表した。

発表者はカーネギー研究所のアラン・ドレスラー博士とミシガン大学のダグラス・リッチストン博士で、二人によるとアンドロメダ星雲の中心部には太陽質量の七千万倍の〝暗黒天体〟があり、周辺の物質に引力作用を及ぼしているのを確認した。二人の研究はパロマー天文台の口径五〇八センチ望遠鏡による観測に基づくもので、銀河中心部近くの星の運動を光の波長のズレから測定、さらに中心部からの距離を測って〝暗黒天体〟の引力作用（質量）を計算した（7・28M）。

超電導物質に発光作用

大阪大学基礎工学部電気工学科の小林猛・助教授、藤原康文・助手の研究グループは、液体窒素温度（氷点下一九六度C＝絶対温度七七K）で電気抵抗がゼロになる高温超電導物質が発光作用を併せ持つことを世界で初めて発見。開発競争に熱い視線が注がれる高温超電導物質が光コンピューターなどの光分野にも幅広く応用できる可能性を示す研究として注目される（8・19M）。

65度Cと58度Cで超電導――同系列物質で再現

工業技術院電子技術総合研究所の伊原英雄主任研究官らのグループは、新たに摂氏五八度で超電導とみられる現象を示す物質を開発した。同グループは六月に六五度Cという世界最高温で同様の現象を示す物質を発見しており、今回の物質はこれと同系列のもの。これは夢の常温超電導実現に道を開くものとして注目される（8・20M）。

初の三段ロケット成功H－I

六十年代前半の日本の宇宙開発を担う三段式H－Iロケットが八月二十七日午後六時二十分、鹿児島県熊毛郡南種子町の宇宙開発事業団種子島宇宙センターから打ち上げられた。初めて国産技術で開発した三段目の大型固体ロケットも順調に作動、搭載した技術試験衛星5型（ETS－V）を予定の軌道に投入した。これによりロケット技術で欧米と肩を並べる純国産の次期大型ロケットH－II開発に向け、技術基盤が確立したことを実証した（8・28M）。

上海でUFO騒ぎ、空軍機も出動

八月二十七日夜、中国上海市上空に未確認飛行物体（UFO）が出現、空軍機も出動して追跡する騒ぎとなった。ある目撃者は「UFOはテニスボールぐらい。光り輝くらせん形で、回転しながら東南上空に去った」と証言。また別の市民は「洗面器大でだ円形をしており、回転しながら飛び去った」と述べた（8・27M）。（編注＝別な新聞によると、米テキサス大学の宇宙学者が、日本が打ち上げたロケットが宇宙空間で切り離した燃料の燃焼によって引き起こされた現象と指摘。しかしUFO出現時にはどういうわけか一部地域で停電となり、人々の腕時計も大部分が停止したという）。

がんの新ターゲット療法、慶大チームが〝新薬〟合成

標的のがんに出会ったときだけ強い毒性を発揮して病巣をたたき、血液中を流れているときは無害というがん退治の有力新人が登場した。慶応大学医学部外科の小沢壮治助手、阿部令彦教授、同分子生物学教室の清水信義教授らがつくり出した抗体と毒素の結合体（イムノトキシン）だ。がんの中でも食道がん、口腔がんなどの扁平上皮がんを狙い撃ちするのが特徴で、その効果はがん細胞などを使った実験で確かめられており、新しいがんターゲット（標的）療法として期待される（9・6M）。

がん細胞正常化に成功

がん遺伝子に特別な遺伝子で〝フタ〟をして働きを止め、がん細胞を正常に戻すことに、理化学研究所ライフサイエンス筑波研究センター分子遺伝学研究室の横山一成研究員らのグループが成功した。がん遺伝子の働きをコントロールしてがん細胞を正常化に導くたんぱく質があることも明らかになり、将来は遺伝子治療などへの応用が期待できるという（9・7M）。

がん治療のミサイル療法、臨床応用で効果確認

ある種のがん細胞だけにくっつくモノクロナール抗体を作り、これに抗がん剤を運ばせる〝ミサイル療法〟が人体でも期待通りの効果を示すことが、京都府立医科大学第一外科の北村和也医局員、高橋俊雄教授らの臨床応用で初めて確認された。ミサイル療法は次世代のがん治療法として注目されているが、いまだ動物実験レベルがほとんどで、臨床応用の成果が学会で発表されるのは世界でも初めてという（9・8M）。

スフィンクスは三大ピラミッドより百年古い。早大隊ハイテク調査で裏付け

早稲田大学ピラミッド調査隊（隊長・吉村作治・人間科学部助教授）とエジプト考古庁は二十一日、カイロで、今年一月末から二月にかけて行なった調査報告を発表。この中で「スフィンクスはギザの三大ピラミッドより約百年前に造られた」とし、「カフラ王の守護神」とされたこれまでの常識をくつがえすスフィンクス起源説を提起した。

今年一月末から二月にかけての調査で同隊はスフィンクス前脚部と横腹（北側）地下の四カ所で新たな空洞を確認。調査結果を日本に持ち帰り、コンピューターで解析した結果、スフィンクス横腹部の地下二メートルの所にある十・五立方メートルの空洞から、ブロンズないし金とみられる金属反応があることがわかった。吉村助教授によるとスフィンクスは従来いわれてきたように単なる「カフラ王の守護神」といった付属的な建造物ではなく、独自の時代背景をもつ独立した建造

物らしいという（7・22Y）。

極小トランジスターを開発

米国最大の電算機メーカー、IBM社は八月十一日、超LSI（大規模集積回路）よりさらに一段階高密度の超超LSIに組み込む極小のシリコントランジスターを開発したと発表した。(1)回路の線幅を人間の毛髪の千分の一程度の細さである〇・一ミクロン（一ミクロンは千分の一ミリ）まで狭めるのに成功した。(2)このトランジスターを使った論理回路チップで、現在のチップより十倍も早い十ピコ秒（ピコは一兆分の一）でのスイッチ動作を測定したとしている。

この極小トランジスターを使った超超LSIが実用化できれば、現在大型はん用機を使っている気象予測や、連続的な会話（音声）認識などがパーソナルコンピューターで可能になるという（8・12Y）。

脳卒中障害、薬で防止

脳卒中などで脳への血液の流れが一時止まると、脳の記憶中枢細胞が三、四日後に壊死（えし）するが、この細胞壊死をストップさせる薬物療法が小暮久也・東北大学医学部神経内科教授らによって開発された。発作直後に細胞膜脂肪合成促進剤と呼ばれる薬剤を投与し、脳細胞に直接働きかける新しいタイプの療法で、動物実験に続いて臨床テストでも大きな効果が確認された。この療法は脳卒中による機能障害の防止だけでなく、軽い脳血栓も一因とみられている老人性痴呆症の防止にも道を開くものとして注目を集めそうだ（8・15Y）。

ソ連で新元素を生成。110番目

タス通信が八月十八日伝えたところによると、ソ連を中心とする原子核研究グループが百十番目の新元素を作り出すのに成功した。トリウム（九十番元素）の放射性同位元素にカルシウム（二十番同）を、ウラン（九十二番同）の同位元素にアルゴン（十八番同）のそれぞれ加速粒子を衝突させることによって新元素が生成したというもので、研究グループは、同じ手法で百十一番元素の生成にも着手している。この研究グループはソ連、フランス、西ドイツの学者を含む混成チーム（8・19Y）。

180万アンペア流せる超電導薄膜。世界最高

超電導物質の実用化には〝高温〟で電気抵抗がゼロになると同時に、大電流を流せることが不可欠だが、NTT茨城電気通信研究所（茨城県東海村）は世界最高の一平方センチ当たり百八十万アンペアの大電流を流せる単結晶薄膜の開発に成功。従来のセラミックス超電導物質よりも性能が劣化しにくいメリットもあり、超LSI用の新素子、生体微弱磁気センサー、夢の診断装置といわれる超電導MRI（磁気共鳴断層撮影装置）など幅広い応用が期待できそうだ（8・21Y）。

大マゼラン雲の超新星の近くのナゾの星が消えた?

大マゼラン雲の超新星のすぐ近くに現れたナゾの星が今年三、四月にははっきりと見えたのに、二カ月後の観測では姿を見極められなかった。ナゾの星は米ハーバード・スミソニアン天体物理学センターの天文学者グループが三月と四月、南米チリのセロ・トロロ・インタアメリカン天文台で観測したが、同じグループが五月末から六月初めに観測した時はこの星が検出できなかった。消えた原因についていろいろな説が出されているが、もともと星の実体ではなく、何かの加減で光る点が見えたのでは、という見方もある（8・31A）。

最も遠い天体を発見

米ピッツバーグ大学のシリル・ハザード教授ら天文学者グループは二十日、これまで見つかったものの中で最も遠方にあるクェーサー（準星）を発見したと発表した。

このクェーサーは地球から約百三十億光年のかなたを遠ざかっており、宇宙がビッグバンにより誕生してから十億年たらずの時代に放たれた光を送ってきているという。このため宇宙が現在の大きさのわずか二〇パーセント程度だった時代の姿を示すもので、宇宙の生成やその性質を研究する上で貴重な手掛りになるのではないかと期待されている（8・24A）。

子宮けいがんの真犯人をつきとめた?

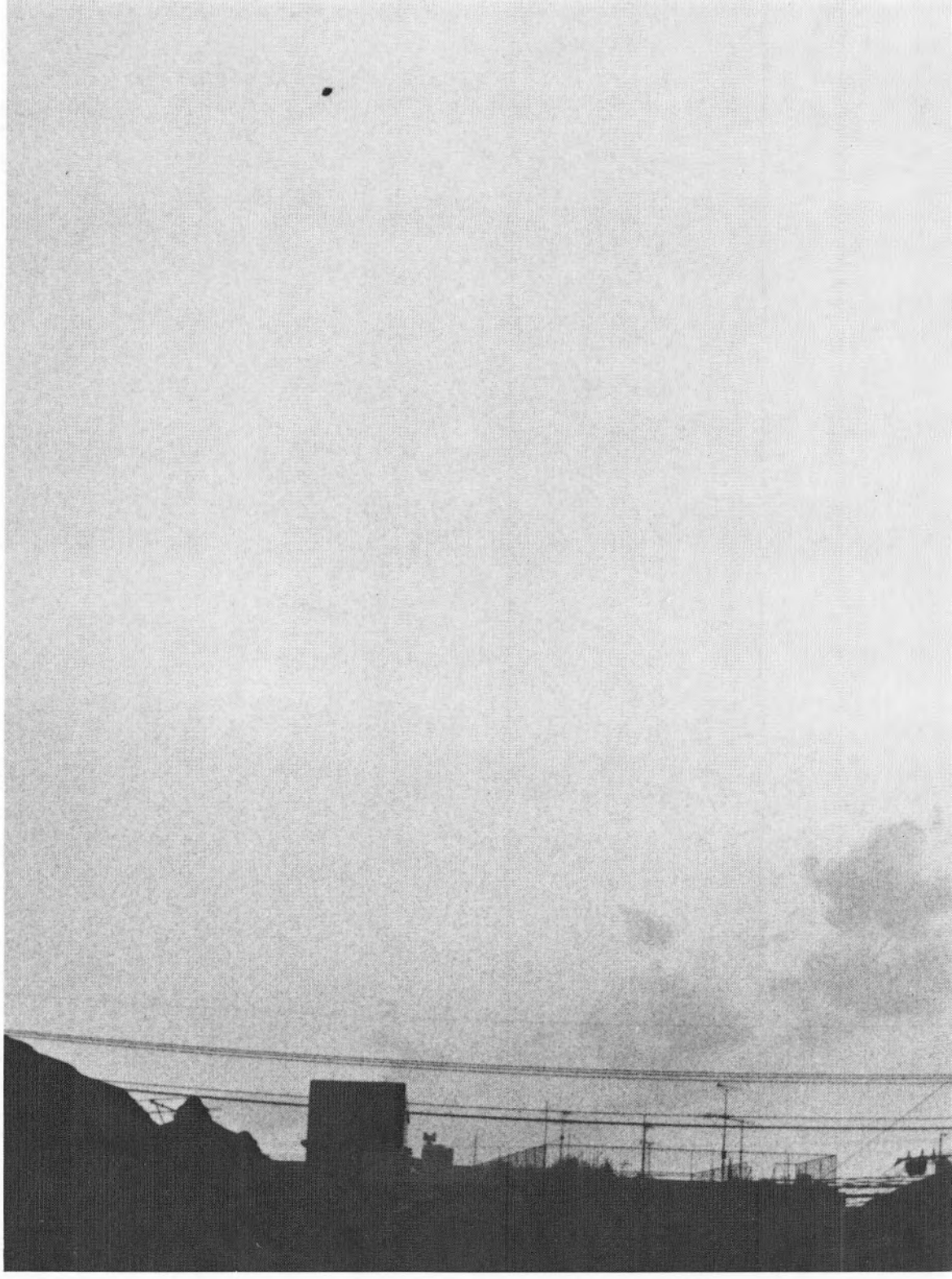
子宮がんの九割を占める子宮けいがんの犯人は、イボの原因であるヒト・パピローマウイルスの仲間である可能性が強まってきた。子宮けいがんは膣に突き出した子宮けい部に生じるがん。日本では女性のがん死の第六位だが、集団検診の普及で早期発見が可能になり、死亡率は大幅に低下している。この病気はセックスを始めた年齢が若く、性交渉の相手が多い女性ほどかかりやすいことがわかり、男性からセックスでうつされる発がん物質か微生物などの因子が関係している疑いが強くなった。新しい容疑者としてパピローマウイルスが注目されたのは一九八二年、西ドイツ。日本でも東大病院分院産婦人科の川名尚教授その他の学者が日本の患者の組織を調べたところ、やはり半数近くのがん組織にウイルス遺伝子が見つかった（8・10A）。

抗がん漢方薬を中国で開発

北京八月十三日発新華社電によると、漢方の薬草を原料とする抗がん薬がこのほど中国で開発された。この抗がん薬は高麗ニンジン、ジャコウ、キバナオウギなどの薬草を原料とする丸薬で、ブランド名は「天仙丸」。約二十の病院で消化器系統の病状の進んだがん患者二百八十七人を対象に臨床試験を行なったところ、有効率は八一パーセントに達し、うち一〇・六パーセントの患者の腫瘍が半分以上縮小した（8・17A）。

二日酔いにはアラニンが効く

酒の酔いや肝障害をアラニンというごくありふれたアミノ酸が防いでくれることが須田都三男・東京慈恵医大第三病院講師（内科）らの研究で明らかになった。体内での細かな仕組みの解明はこれからだが、事前にアミノ酸を食べさせておけば、普通なら二日酔いでぐったりして動かないほどアルコールをとったネズミも正常に動き出すなど、動物実験では効果ははっきり。「二日酔いをなくす薬」の夢も出てきた。ちなみにアラニンはほとんどのたんぱく質に含まれているが、身近な食品ではトウモロコシが際立って多いという。各種のアミノ酸を調べた結果、昨秋になってアラニンと、その十分の一のオルニチンを混ぜたものが酒害防止に最もよいことがわかった。この二つは酔いも早く覚ます。二時間半泥酔する量のアルコールをネズミに与えても、事前にアミノ酸を注射すると六時間ですべてが正常にもどったのに対し、与えない場合は六時間後も四割が二日酔いの状態のままだった（6・26A）。



●大分市上空のUFO——A UFO over Ohita

1986年8月1日，午後6時頃，大分市内在住の房前敬和君（18歳・国立大分工業高等専門学校機械科3年生）が上空を飛ぶUFOを撮影。〈オリンパスOM-10，ズイコー35〜70㎜ズーム，f22，1/500秒，フジカラーSR1600，報告は同校教官・高橋徹氏〉

GAP短信 GAP NEWS

■日本GAP企画第九回海外研修旅行「アメリカ・メキシコの旅」大成功裡に帰国

かねてから予告中の「アメリカ・メキシコの旅」は総勢三十五名で十二日間にわたる旅を終えて八月十六日に全員無事に帰国した。旅行中はダニエル・ロス氏、アリス・ポマロイ女史らと交流、UFOもしばしば目撃され、有意義な素晴らしい旅であった。詳細は本号掲載の記事「アダムスキーの大地とマヤの国へ」に報告されている。

■国際ヨガ協会より会長へ招待状

大阪市淀川区の国際ヨガ協会・松島義雄会長より八月三日付で、今年十月十七日、十八日に滋賀県近江八幡市において同協会主催の「第八回国際ヨガフェスティバル」でアダムスキー哲学に関する講演を行なうよう久保田会長に要請があったが、十月は本誌99号発行月で準備のため都合がつかず、辞退した。なお松島会長は本誌ユーコンの愛読者でもある。

■超能力専門誌「ボストンクラブ」掲載の会長の記事、大反響

今年四月に創刊された超能力専門誌「ボストンクラブ」創刊第1号に掲載された久保田会長執筆の「宇宙・人間・オープンマインド」と同誌第4号に掲載の「マインド空間から意識空間へ」が大反響を起こしていると同編集部よりたびたび連絡があり、読者からの問合せやGAP入会が相ついでいる。右の二論文はいずれもアダムスキー哲学の内、特に「生命の科学」の解説と奇跡発生の具体例を詳述したもの。両号共在庫あるとの由。注文は「ユーコンで見た」と記して左記へ。

〒160東京都新宿区西新宿6―6―3、新宿国際ビル新館9F、ボストンクラブ　一冊千円、送料二百五十円、二冊送料三百円。振替＝東京八―一五七三〇六

■本誌97号完売の書店続出

日本GAP長崎支部代表・元木和雄氏からの報告によると、氏がユーコン誌を卸している長崎市内の好文堂とメトロ書店の97号各十冊はいずれも完売したという。東京都内でも神田書泉グランデの四十冊、新宿紀伊国屋の三十冊、渋谷大盛堂の十冊はいずれも完売した。他にも地方で完売の店がある。

■六十三年度秋田・青森合同支部大会

来年度の秋田・青森合同支部大会は六十三年六月五日（日）に秋田市で開催に決定。詳細予告は本誌101号に掲載の予定。

■新潟支部主催UFO写真展、大盛況

今年八月六日より九日までの四日間、新潟市西堀通五番町八六六の三越デパートで開催した第二回UFO写真展は計約千三百名の入場者があり、盛況を呈した＝写真。アンケート結果も替辞を寄せた回答が圧倒的に多く、テレビ局二社が取材放映、新潟日報も大きく報道した。

■静岡支部UFO写真展も大成功

八月二十日から二十四日までの五日間、静岡県富士市駅前のパピーデパートで開催した支部主催UFO写真展も入場者計約千六百名あり、地方小都市としては大成功だった。富士市の土地柄同様会場は大変穏やかな雰囲気に満ちていた。期間中、読売、中日各紙が報道し、静岡放送の生放送による取材もあり、県内にPRされた＝写真。

■読売新聞、静岡支部を取材、報道

八月二十三日付読売の静岡版に日本GAP静岡支部・野口敏治代表にインタビューした記事が写真二点入りで大きく掲載されて反響を起こした。「UFOは存在します」というタイトルによる野口代表の談話の中に「飛行機に決まった航路があるようにUFOにもよく通る場所がある。県内では朝霧高原。数年前観測キャンプをしたときは、一晩で四十個以上目撃した」とショッキングな体験を語っている。

■大盛況の今年度日本GAP総会

かねてからの予告どおり今年度総会は去る九月二十日(日)東京有楽町の朝日ホールで盛大に挙行され、二百七十名の出席者を得て久保田会長、ダニエル・ロス氏のUFO関係講演がスライド映写とともに行なわれ感銘を深めた。夜は有楽町のレストラン四季で華麗な大夕食会を開催、会員によるプロ級演芸もあって興趣を添えた。詳細記事を四十頁に掲載。

■福岡支部大会も盛況裡に終了

十月四日には福岡市のチサンホテル博多二階ホールで久保田会長のスライド映写付き講演と質疑を主体に支部大会が開催され盛況裡に終了した。詳細報告は次号に掲載される。

■今年度最後の支部大会開催予定地

今年度最後の支部大会は十一月一日に山形県天童温泉で山形・仙台合同支部大会、十一月二十二日に長野市で長野支部大会が開かれる。いずれも名高い観光地なので多数の参加者が予想される。詳細は四十五頁を。

■ザ・ベスト誌が大阪支部を取材

KKベストセラー発行の月刊「ザ・ベスト」誌が大阪支部（代表・平塚和義氏）を取材し、十月十日発行の同誌臨時別冊号に写真入りで活動状況が掲載された。

An Exciting and Beautiful Journey to the U.S. and Mexico

日本GAP企画第九回海外研修「アメリカ東部西部・メキシコの旅」紀行

アダムスキーの大地とマヤの国へ

頻出するUFOと、「LOVE」の空中文字出現！

●久保田八郎〈日本GAP会長〉

今年も恒例の日本GAP企画海外研修を実施。今夏はアメリカ東部西部とメキシコへ総勢三十四名で十一日間にわたる大旅行を敢行。度重なるUFO目撃とアメリカのアダムスキー派UFO研究家二名との合流等、歓喜に満ちた日程を無事終了して帰国した。以下はその報告。

絶対に安全に帰れることを予告

うだるように暑い八月五日の午後一時、成田空港南ウィングのノースウェスト航空カウンター前に一同集合。結団式と全員記念写真撮影後、米ノースウェスト航空二便で四時に勇躍出発。ただし女性二名の内一人はすでにニューヨークへ行っており、あとからロサンゼルスで合流の予定。他の一人は遅れてメキシコで追いつく。日本女性も単身で海外をノシ歩く時代となった。

昨年八月のトルコ・ギリシャ・ローマ行きの旅からアッというまに一年が経過してしまった。今年わりと参加者が多いのは、なんといってもアメリカのアダムスキー関係遺跡見学を主体に、西部でダニエル・ロス氏と合流したあと、メキシコ・ユカタン半島の謎とロマンに満ちたマヤの遺跡を訪れたついでに新興リゾート、アクマル海岸でカリブ海の水を浴び、続いて再度アメリカへ入り、ニューヨーク、ワシントン市を歴訪し、しかもアダムスキーの高弟であったアリス・ポマロイ夫人と会見という豪華な日程がウケたらしい。

費用はなんとかなるが十二日間の休暇がどうしても取れなくて泪をのんだという気の毒な人が圧倒的に多かったところをみると、「休暇さえ取れれば」組を加えれば四十名は軽く越えたと思われる。円高ドル安で海外旅行が容易になり、今年度の日本民族大移動は六百五十万に達するというから大変なものだ。

「この旅行は絶対に安全に終了して全員無事に帰国できることがすでに私にわかっていますが、皆さん方も安全に帰国したイメージをしっかり描いて下さい」と訓示したあと、ジャンボ機で米西海岸まで九時間半の旅に出る。十数年間連続して海外へ出かけ、国内も年中飛びまわって旅鴉になっている私には、もう異国への長途の旅という感覚はなくなりそうなものだが、そうでもなくて、旅行団長としての重責を感じ、緊張する。

飛行機に乗り込んでもロサンゼルスへ着くまで全く眠れず、現地時間の朝十時十分に同空港へ着陸したが、これは日本時間で深夜の一時半すぎ頃だから、結局一晩徹夜したことになる。わが家にいればえらい事だが、そこは団体行動なのと「トンネルをくぐったら朝だった」式の急激な環境の変化で眠気が覚めるのだろう。

アメリカらしい手形、足形記念物

見なれたロサンゼルス空港の、例によって時間のかかるイミグレーションを通過した後、バスで早速市内見学に出発。空気は爽快で温度は摂氏二十一度という。東京よりかなり涼しい。前日まで猛暑だったそうだ。

まずマリナ・デル・レイという海岸

▶八月五日、成田空港に集合した旅行団。前列左より＝安藤澄雄、博子、汐南（東京）、今西正子（神戸）、矢田真理（埼玉）、菅原優子（岩手）、芳賀弘子（岩手）、藤村雅夫（東京）、青木雅孝（神奈川）、野本俊次（東京）、田中正（添乗・千葉）、中列左より＝久保田八郎（団長・東京）、大畑忠（千葉）、伊藤芳和（東京）、海老原真由美（大阪）、越崎裕子（東京）、土居マユミ（神奈川）、北原昌子（東京）、桜庭千秋子（秋田）、小渕信久（群馬）、山中正紀（横浜）、清水南（山梨）。後列左より＝樽谷杉雄（埼玉）、園崎澄夫（石川）、萩原昭彦（横浜）、坂本茂子（秋田）、田中法代（山梨）、中島和子（千葉）、渡辺文美（大分）、大場範子（東京）、小島岩男（東京）、梅沢明（静岡）、枝川文好（東京）。写真欠席＝浜村美里（千葉）、佐藤和枝（東京）。

町へ行く。ここは世界一という大規模なヨットハーバーのある所で、空港から近いのでまっ先に立ち寄ったのだ。バスを降りて海岸へ出ると、あるわ、あるわ、純白の数千艘のヨットがひしめいて壮観だ。経済大国といっても日本では見られない風景。レジャー感覚の大差を感じさせられる。

ここに十五分間いて、一時近くに日本人街のリトゥルトーキョーへ着く。市役所をバックに中心の通りで渡米第一号の全員記念撮影。この日本商店街はむかし、あまりにも不潔で貧弱だったため、日本の面汚しだというので、五年計画で再開発した。いまはホテルニューオータニその他の近代的な建築物が並んで面目一新というところ。昼食にチャイナタウンの「楓林酒家」へ行く。

人口三百万、周辺を加えて六百万を擁するアメリカ屈指の大都会なのに、しょっぱなから東洋人の居住地ばかりを歩くので、これがロサンゼルスかと初めて来た人にはピンとこないだろうと思い、ダウンタウンの銀座通りを歩くようにとガイドさんに頼む。この現地在住の日本人ガイドは古田さんという青年で、人なつこい謙虚な人だ。

時間の都合があるので、ひとまずハリウッドのチャイニーズ・シアターへ行く。中国の寺院を思わせる赤い東洋風の建築物だが、実は映画館。しかしここが有名なのは周囲のセメントの敷石に二百名以上の有名芸能人の手形や足形が押され、サインやメッセージなどが残してあるからだ。マリリン・モンローの上隣にはソフィア・ローレン、その左がチャールトン・ヘストンなど往年の大スターのサインや手形が見られる。日本人ではただ一人、戦前に米映画界で活躍した早川雪洲のそれがあるという。こうした記念物を残すところはいかにもアメリカらしい。

ダニエル・ロス氏に会う

四時に私たちの宿舎であるウィルシャー大通りのシェラトン・タウンハウス・ホテルへ入る。ここはダウンタウンで、デパートのロビンソンやブロックスなどに近いから、あとでガイドさんが希望者をつれて出たらしい。

私はどうも異国へきた感じがせず、東京のホテルにいるような気がする。このホテルの浴室にはヒーターがあり、これをつけると室内が温められて洗濯物が早く乾く仕掛けになっている。こんな便利なホテルへ泊まるのは初めてだ。ロビーへ出ると日本人がグループで沢山来ている。

六時にこのホテルへ来るようにと、かねてからダニエル・ロス氏に連絡しておいたので、もう来たろうと思い、田中さんに電話で聞くと、来ているという。田中さんはGAPの海外研修のすべてを取り扱う旅行会社の役員で、添乗員として同行したベテラン。日本GAP東京本部の役員でもある。

あらためてロス氏の部屋へ電話したら、今から行くという。待っていたら私の部屋へ来た。本誌に連載中の『UFO――宇宙からの完全な証拠』の筆者だ。海軍の軍人上がりだからキビキビした活発な男だろうと思っていたが、イメージははずれた。大男であることは的中したが、おそろしく物静かで、低い声の早口のため聞きづらい。彼とは約三十分間対座した。

ロス氏と話し合っていると、ほんの少し暗い影を感じるが、これは彼の不幸な生い立ちによるものだろう。あの迫力ある達意の文章がどこから出てくるのかと思うほどに意外な感じがする。

八時二十分よりホテル内のバンケットルームで歓迎夕食会があるので、そ

▲ロサンゼルスのリトゥル・トーキョーにて

れに行くためにつれだって部屋を出てから、彼の部屋へ立ち寄ったとき、奥さんのパメラさんが出てきた。彼女は旦那とは対照的に明るくて、微笑を浮かべながらハキハキと物を言う女性で、典型的な人の好いアメリカ婦人という印象を受ける。

八時三十分より夕食会が始まった。服装は指定どおりに男は背広ネクタイ、女性もそれに準じた服装で集まっている。田中さんが司会者。最初に私が英日両語で挨拶し、続いてロス氏に挨拶をうながし、それをガイドの古田さんが通訳する。そのあと全員が次々と自己紹介する。ロス氏は日本語がわからぬのに、一人一人をジッと見つめて、自己紹介が終わるごとに一同とともに拍手をする。その態度は大変生まじめで立派なものだった。

▲ロサンゼルスのホテルにおけるロス氏歓迎夕食会

十時に全員記念撮影を行なって夕食会は終了。そのあと地下のバーへ行き、二次会のつもりだったが、ギターの弾き語りの生演奏を聞く形になり、あまり話ができず、ロス氏夫妻は中座し、私たちも十二時近くに部屋へ引き返した。夕食会ではアメリカ留学の経験ある坂本茂子さん（秋田市）が達者な英語でロス氏夫妻と語り合っていたが、以後彼女はニューヨークまで皆さん方の通訳としてすぐれた役割を果たすことになる。

デザートセンターのコンタクト地点へ

翌六日は七時に起床。九時十五分にバスで出発。今日は一九五二年十一月二十日にアダムスキーが金星人とコンタクトしたデザートセンターへ行くのだ。バスはカリフォルニア州の内陸部、アリゾナ州の方向へ疾走する。海岸ぞいならば美しい町を通るのだが、ハイウェーだから家はあまり見えない。快適なドライブだが少々寒い。クーラーをきかせすぎているようだ。

▲挨拶するロス氏（撮影 伊東芳和）

十一時にカルトランズ・レストエァリアという休憩地で少憩する。掲示板を直訳して読んでみると、ここはサンゴルゴニオパースともいい、一八六二年から種々の休憩地として使用されたとある。すでに砂漠地帯へ入っているから、このあたりをむかし幌馬車が疾駆したのだろう。インディアンの換声が響いてくるかのようだ。

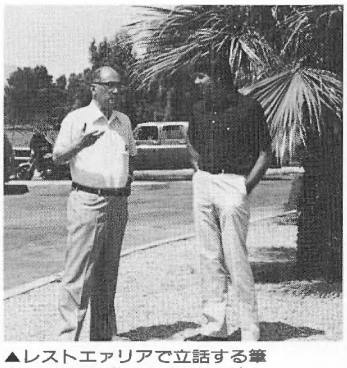
十五分後に出発。彼方の不毛の丘陵地帯に数千本の発電用風車が林立して異様な光景を呈している。以前にはなかったものだ。

十二時少々前に右手の青空に白い円盤が飛ぶのを数名が目撃して車内は騒然となる。このデザートセンター行きの往復の車内からはたびたびUFOが目撃された。私たちが上空から注目されていることは確かだ。

十二時すぎに別なレストエァリアで少憩して昼食の和食弁当を広げた。野外で食べる人もあったが、私は車内でとった。空腹なのでうまい。

一時に出発して広漠たる大地を走る。米西部一帯に広がる大モハーベ砂漠が展開する。砂漠といってもサハラのごとき砂の海ではなく、固い地盤に低い灌木が散在する不毛地帯だ。この果てしない大荒野を見ただけでアメリカの国土の雄大さを実感する。

一時半すぎにデザートセンターのガソリンスタンド前に到着した。



▲レストエァリアで立話する筆者とロス氏（撮影 今西正子）

以前は、違う場所へ行っていた

ここで明確にすべき問題がある。私たちは海外研修旅行で過去に四回ほどデザートセンターのコンタクト地点を訪れた経験があるが、これはいずれの場合もカリフォルニア州ビスタの或るグループのメンバーの案内によるものだった。

実をいうと、このコンタクト地点なるものは間違った場所だったのである。アダムスキー全集第一巻『宇宙からの訪問者』の記述によると、アダムスキー一行はデザートセンターからアリゾナ州パーカーに通じるハイウェーを約十一マイル（十七キロメートル強）行った所で車を停めて降りたとある。ところが今までに四回行った私の記憶によれば、その案内者は常にガソリンス

◀コンタクト地点へ向かう一行。車輪の跡のある場所を横切って矢印の方向へ行けばよい（撮影は上から伊東芳和、青木雅孝、今西正子）。

タンドから左折し、車道橋の下をくぐってまもなく道が二つに分かれるのだが、いつも左側の道を選んでいた。しかし私が所有するカリフォルニア州南部の大地図を見ると、左側の道はパーカーハイウェーではなく、イーグルマウンティンという小部落へ通じる道であることがわかる。そのためか、いつも逆戻りするような感じがしていた。この場合は右側の道がアリゾナ州パーカーダムに通じる道なので、これを行かねばならないのだ。

だから現地のコンタクト地点なる場所へ行っても、アダムスキーが五二年十一月二十日に撮影した、馬の鞍状に円盤が半分ほど見える写真（『宇宙からの訪問者』の口絵写真に掲載）と似て非なることに私は薄々気づくようになっていた。案内者は、この土地が約二メートル隆起したのだと言っていたが、いくらなんでもわずか三十年かそこらで固い地面が二メートルも高くなるはずはない。この誤りに気づいていた旅行参加者が他にもいる。

しかしその米人案内者を恨む気持はさらにない。むしろ彼は酷暑の中を何度もわざわざ案内してくれたのだから、その点は感謝したい。ただ彼は勘違いをしていたのだろう。しかし勘違いにしてもひどすぎると思うのだが――。

猛烈に暑いコンタクト地点

そこで今度こそは正確なコンタクト地点へ行こうと満を持して、事前に手紙でロス氏へ照会したら二度ほど行ったことがあるというので、よしそれなら大丈夫だと勇躍皆さんをつれ出したのである。

ただしガソリンスタンド周辺の道路は大幅に拡張整備され、様子がかなり変わっている。ロス氏はバスの運転手さんに「まっすぐ一〇・二マイルほど行きなさい」と命じた。バスは速度を落としてスタンドの前を進行する。これぞパーカーハイウェーだ。左側には峻険な岩山が展開する。以前に四回も行った大平野とは似ても似つかぬ光景だ。

運転手氏はロス氏から言われたとおりに十・二マイルほど行って車を停めた。一同も降りて彼の説明を聞く。彼は私が渡した英文原書のコピーを見ながら、「このあたり一帯がアダムスキーの書いている〝浅い川床〟の跡だ」という。これは今もハイウェーを横切り、その部分が低くなっているが、最近アスファルトで舗装し直したらしく、きれいな道路になっている。

このすぐ近くの尾根の上空に巨大な母船が出現したのをアダムスキー一行はここで目撃したのである。なるほどここなら記述とぴったり合う。以前の間違った場所の付近には、こんな高い岩山の尾根などはなかった。

ここからアダムスキーは車で急いで道路を半マイル（八百メートル）引き返し、さらに右折してハイウェーから半マイルの奥地へ進行した。そこでその跡へ行こうということになり、一同はまたバスで引き返したのだが、バスを停めるのが早すぎたために、私たちは砂漠地帯をかなり長く歩くことになった。

ものすごく暑い。摂氏五十度あるという。安藤澄雄君夫妻（東京）は三歳になる一人娘の汐南ちゃんをつれて来ていたが、これがまいってしまわねばよいがと気になったけれども、先にへたばったのは私だった。六十三歳という年齢を感じる。

車輪の跡がついた地点を通過して深い川の跡のそばへ登ってきたときは、暑さと疲労で立っておられず、石の上に腰をおろすと尻がヤケドするほど熱い。アチチとあわてて立ち上がり、タオルを取り出して折りたたんで石の上に敷き、やっと腰をおろした。そばに置いたカメラも手がつけられぬほど熱くなっている。

一息ついてから上方を見ると、ロス氏が「あの鞍状の部分がそうだ」と言う山のくぼみを見るのに、どうも違うような気がする。むしろ川の右側の砂地へ行って、もう少し奥まで行った地点から左側を見ると、アダムスキーの撮った写真と同じ風景が展開するのではないかと思ったが、もうそこまで行く気力はない。見ると萩原昭彦君（横浜）と今西正子さん（神戸）の二人が大体にその地点で写真を撮影し合っている。あそこのもう少し上方がコンタクト地点だという強い印象が起こったけれども、もはや体が動かない。他の人たちはあちこち動きまわっている。清水南氏（山梨県）がそのあたりまで

▲コンタクト地点に最も近いと思われる場所からビデオカメラで撮影した画面（撮影　清水南）。

▲コンタクト地点に最も近いと思われる場所に立った今西正子さん（神戸市）。（撮影　萩原昭彦）

行ってビデオで撮影したテープを後日見ると、まず間違いのない地点だった。伊藤芳和君（東京）もその地点でよい写真を撮った。

その正しいコンタクト地点で全員記念写真を撮りたかったのだが、すでに皆さんは広く散ってしまい、なかにはバスの方へ引き返した人もあるので、私も腰を上げて歩き始めた。

マーカー（目印）があった！

道路からこの辺一帯にかけてなだらかな傾斜になっているので、それを下ることになる。しばらく行くと数名が何かを囲んで立っており、萩原君が「これがマーカー（目印）だ」と言っている。見ると、古い石を約一メートルほど積み重ねた記念碑が作ってある。ロス氏から教えられたらしい。

これはやはり本物の場所だ。むかし故アリス・ウェルズ夫人から、現地にマーカーを作っておいたと聞かされたことがある。これがそれなのだろう。萩原君によると、ずっと右手の方向にもマーカーがもう一個あったのをロス氏と同君の二人だけで見たという。

これは春川氏の予言が的中したことにもなる。旅行出発前に私は春川氏に会い、六年前、最後にデザートセンターへ行ったときの現地の写真を見せたら、「これは本当のコンタクトの場所ではありません。本物の波動が出てきません。真実のコンタクト地点はこの写真の場所からはるか左手の方向です」と言い、持参した大地図を透視しながら、「ここに光る部分が見えます」と言って地図の二箇所に○印と×印をつけてくれた。これはパーカーハイウェーの左側であり、尾根のふもとをはさんだ上方の○印はアダムスキーが最初に母船を発見した位置で、下方の×印はこのマーカーの位置である！

▲手前が石を積み重ねたマーカー（目印）。彼方の2人はロス氏夫妻（撮影　萩原昭彦）。

本誌先号で完結した連載記事『私は別な惑星へ行ってきた！』の主人公・春川正一氏（仮名）の稀代の超能力はここでも発揮されたのだ。

UFOが出現して大騒ぎ

道路ばたのバスへたどり着いたときは疲労困憊の極に達していた。田中氏が私の重いバッグをかついで下さったし、安藤君が日傘を貸してくれたので助かったが、これがなかったらぶっ倒れていたかもしれない。日頃の極端な運動不足のツケがまわってきたようで、バスの中で転げ込むように座席にへたり込んだ。

すぐ安藤君が冷たいコーラを飲ませてくれたので息を吹き返し、坂本さんがたびたび氷を食べさせてくれて、やっと元気を取り戻した。人の親切がこのときほど身にしみたことはない。

帰途は愉快だった。現地をよく覚えたので、この次からは案内人なしに正確なコンタクト地点を見学できるだろう。

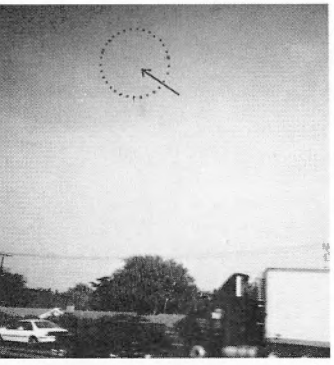
デザートセンターからの帰途、また円盤が出たといって騒ぎが発生した。あとで聞くと、芳賀弘子さん（岩手県）や他の人たちが黒っぽいドームとフランジの区別のつくUFOを見たという。このデザートセンターへの往復でUFOが出現するということは春川氏も予言していた。

青木雅孝君（神奈川県）からの報告によると、バスがポモナ市中のフリーウェー十号線を走っていた六時半頃ギャレー大通りとの交差点をすぎた地点で、民家の建ち並ぶ上空約百メートル、仰角二十度位の空間に、民家の大きさからみると直径十メートルはあったと思われる銀色の円形機体を見たという。見た目にはかなり巨大に見え、三十五

ミリカメラの画面に五ミリぐらい写るほどに見えたので撮影したが、現像後は小さな点で写っていた。円盤が擬似映像を見せていたのではないかという。ファインダーで確認しながらシャッターを切ったら何も写っていなかったという例はよくあることだ。目撃した人たちの手記を本稿のあとで掲載するので読まれたい。

七時にホテルへ帰った頃はすっかり元気をとり戻した。八時にタクシーに分乗して日本料理店『浜よし』へ行く。白人は日本の刺身を食べないというが、たしかにロス氏も生魚が食べづらいらしい。悪戦苦闘しているのを見て、「敵を征服せよ。あなたは勇敢なアメリカ海軍の一員だったではないか」と激励すると、パメラ夫人がうつむいてクスクス笑う。私のジョークと、目を白黒させて食っているロス氏の格好がおかしくてたまらぬらしい。ここでは久方ぶりに日本酒を少し飲んで愉快だった。ふだん自宅ではほとんど飲まないが、会合や旅行などで私が素面でいると座がシラケるので少しは飲むことにしている。

ホテルへ帰ってから自室へロス氏を招き、二時間ほど懇談した。



◀青木君が目撃して連続撮影した三枚のUFO写真のうち二枚目。矢印の先に小さな黒点が写っているが、実際は点線の大きさに見えた。

パロマー山へ登る。「LOVE」の文字が空中に！

七日。今日はパロマー山へ登る日だ。薄曇りの天候下を十時十分にバスで出発。ロス夫妻は自家用車で先発し、オーシャンサイドのレストランで合流することになっている。

巨大なハイウェーを南下するうちに快晴となる。

十一時十五分頃、坂本茂子さんと伊東芳和君が左手の空中に白く浮かび上がった「LOVE」という文字を見たと報告にきた。円盤が描いたものかもしれない。

十二時頃オーシャンサイドの町に入り、日本料理店「カブキ」で昼食。ロ夫妻がすでに到着して待っていた。

一時半にバスで出発。空は晴れて絶好の登山日和となった。ロ夫妻は自家用車で先発し、パロマー・ガーデンズで会うという。

一時二十五分にまた左側にUFOが出現したといって坂本さんが叫ぶ。車の渋滞でバスは容易に進まない。

二時四十分頃、やっと五合目のパロマー・ガーデンズ跡へ着いた。現在はキャンプ地になっているが、ここはむかしアダムスキーが一族とともに暮らした所で、アリス・ウェルズ夫人が経営していたレストランの跡がコンクリートで固めてあり、樫の大木も昔のままに残っている。

ロス夫妻が来ないので、私は皆さんに由来を説明したあと、全員記念写真を撮影した。一九五二年代アダムスキーがコンタクトを開始し、多くの円盤や母船の写真を撮り、書物を書いたのはここに居住していた頃である。

私自身ここへ来るのは六年ぶり六度目だが、いつ来ても高次元な雰囲気を感じる。標高九百メートルのこの台地は、清澄な空気と小島のさえずりに包まれて、すがすがしい。アダムスキーが愛したという樫の大木数本が、主人の帰りを待つかのように鬱蒼と茂っている。

この小屋の入口のセメントにアダムスキーが彫り込んだ円盤の絵は、周囲から切り取られて近くの地面に埋め込んであった。

このようにしてアダムスキーの遺跡を永久に記念しようと努力しているのはサンディエゴに住むインディアンの婦人で、彼女はア氏を心から尊敬し、ア氏が金に困ってこのガーデンズと名付けた台地を売りに出したときに買い取って、ア氏亡きあとも記念物を残した。

この婦人は白人と結婚していたが、もとはインディアンの王家の血をつぐ王女で、超能力者であり、アダムスキーに透視用の大きな水晶玉を贈った。十二年前、アダムスキーの住んでいた家でこの水晶玉を手に取って見たことがある。現在この婦人が健在かどうかはわからない。あるいは彼女の遺志をついでだれかが遺跡保存運動をやっているのかもしれない。

ガーデンズの見学を終えた一行は続いて山頂のパロマー天文台へ行った。閉門時間が四時半だというので急いで入り込む。かつては世界一を誇った二百インチの大望遠鏡を見るのも私としてはやはり六度目で、見なれたせいか巨大さにはもう驚かない。〝慣れ〟

◀一九五〇年代にアダムスキーが住んだパロマー山のレストラン跡にて。

というのはおそろしいものだ。

ここのガラス張り展望室で見学しているとロス夫妻がやってきた。エンジンがオーバーヒートして動かなくなり、遅れたという。

以前はこの展望室の奥に売店があったのだが、いまは閉鎖され、かわりに近くの博物館の中に売店が移されて、ここで天文写真などを売っている。

四時半に天文台を出て再度パロマー・ガーデンズに立ち寄り、写真などを撮影した後、ロス夫妻に別れを告げて山を下った。

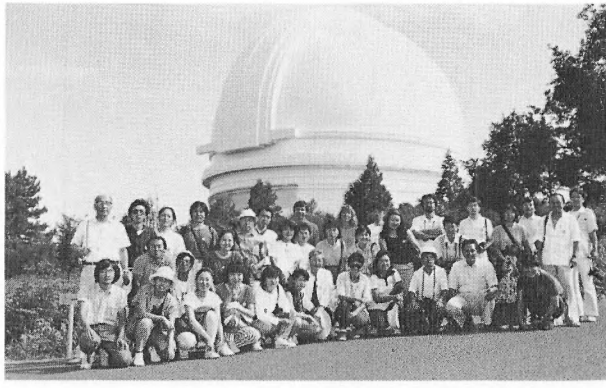
あとで聞いたのだが、パロマー山へバスで登る途中、一時半頃に進行方向にむかって左側の空中に銀色に輝く金属製の楕円形の物体が雲の下へ出たり入ったりするのを枝川文好君（東京）が双眼鏡で見たといい、帰りも左側に六時五十五分頃、月が地平線上に出る前に、同じ形の物体が大きく見えたという。金属製の物で、決して飛行機ではなく、一回目はかなり長く見えたと言っていた。

メキシコ・テオティワカンの遺跡へ

八日からメキシコへ移動。七日夜はホテルへ帰らずに空港へ直行し、夜一時近くに離陸。朝五時すぎにメキシコ市のベニト・ファレス空港へ着く。現地時間で朝の四時半だ。機内で一睡もしなかったので、またも一晩徹夜したことになる。

したがってこの日のメキシコ市内見学ではかなりこたえた。私自身、メキシコはおそろしく好きな国で今度は四度目の訪問。それでも目を皿のようにして歩きたいところだが、この日チャプルテペック公園をバスで回り、人類学博物館へ入った頃はダウンしてしまった。皆さんが館内を歩いている間、私は休憩用のベンチに座って休んでいた。

十二時すぎにバスでテオティワカンの遺跡へむかって出発。まず一時にレストラン『グランテ・テオカリ』で昼食。メキシコ料理のバイキングだがフルーツが豊富で、すごく美味だ。これで元気を盛り返した。



▶パロマー天文台をバックに。

一時半に出て、すぐ近くのテオティワカンの大遺跡『太陽のピラミッド』をバックに全員記念写真を撮る。ここで35㎜カメラが故障したので、6×9判カメラでリバーサルフィルムを使って撮影を続けた。

メキシコ市北方五十キロのテオティワカンは、紀元前後に謎の種族によって栄えた大宗教都市であったが、八世紀なかばに突然滅亡した。そして十三世紀末にこの地へ来たアステカ族がこの壮大な廃墟に驚嘆し、テオティワカン（神々の都）と呼んだのである。

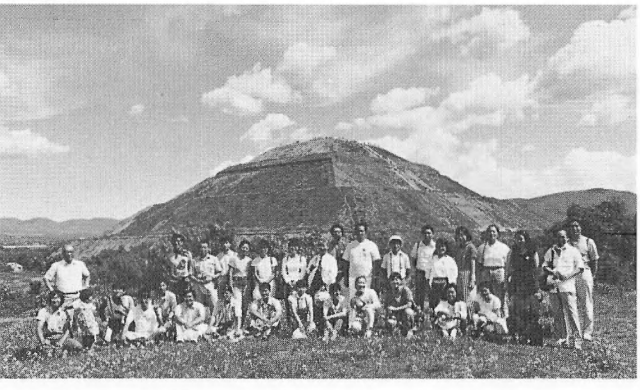
この古代の大都市の中央に『死者の大通り』という広い道路があり、その中心部の東側に『太陽のピラミッド』が屹立している。大通りの北側には少し低い『月のピラミッド』があり、この二つが目玉となっている。

『太陽』は一辺二百三十メートル、高さ六十五メートルという巨大なもので、内部は泥の日乾し煉瓦で築いてある。GAPの海外旅行でここへ何度も来ているから、この大ピラミッドを見た人は多いが、実はこれは原物ではない。

一九一〇年にメキシコ独立百年祭記念として復元するため、考古学者レオポルド・バトレスが工事を監督したのだが、熱中のあまり原型をすっかり変えてしまったという。元は四層だったのを五層にしたのだ。こういう調子でユカタン半島のマヤの遺跡類も復元されたもののうち、ゆがめられた部分がかなりあるらしい。ただしあとで訪れるパレンケの遺跡、ウシュマルの遺跡などは大体にオリジナルの形を保っているとみてよさそうだ。

四時すぎにテオティワカンを出たが、まもなく坂本さんが右手前方の青空に光る物体を見たというので私も見上げたが確認できなかった。いったいにこの人はUFOをよく目撃するようだが、これは過去世からのカルマによるのだと帰国後春川氏が言っていた。

グァダルーペの奇跡



◀テオティワカンの『太陽のピラミッド』

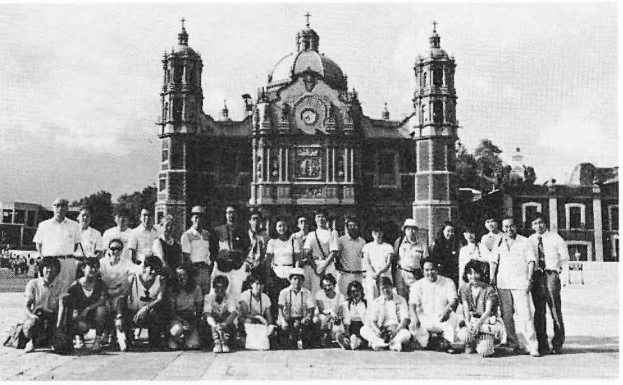
このあと市の北のはずれのグァダルーペ寺院に寄って全員記念撮影をした。ここはフランスのルールド、ポルトガルのファティマとともに奇跡が発生する世界カトリック三大聖地の一つである。

一五三一年十二月の初め、土曜日の朝、貧しいインディオのホァン・ディエゴという男が丘の上に出現した聖母マリアと会見した。そしてこの地に教会を建てよというお告げを聞いた。このマリアはルールドのそれのごとき白人ではなく、褐色の皮膚の女性だった。そしてディエゴの着ていた白いマントに神の手によって描かれたという聖母の絵が十二月十二日に出現して、この奇跡的事件は一躍メキシコ中の脚光をあびるに至った。

現在、一七〇六年に建立された旧本堂の左手に吊り天井式の巨大な新本堂がある。これはメキシコの名高い建築家ペドロ・ラミーレスの設計になるもので二万人を収容するという。内部には柱が全くないので大理石の祭壇がどこからでも見える。この祭壇の上に神が描いたという聖母の絵が掲げてある。私たちは撮影後、ミサが行なわれているこの大本堂の左奥を通って外に出た。

"思い出の館"の夜はふけて

夜は八時より、二度訪れたことのあるレストラン『思い出の館』へ行く。



◀メキシコ市のグァダルーペ寺院

ここはメキシコ的な陽気さとエキゾティシズム（異国情緒）の充満する所だ。中へ入ってみると以前とは造作が変わり、小室はなくなって内部全体が見通せるような広い部屋に改装されている。

超満員で喧騒をきわめるが、それは三組ほど入っているハロッチョという流しの楽団の演奏のためだ。メキシコではバイオリン、トランペット、ギターなどの器楽による民族音楽の楽団をマリアッチといい、男五、六人がギターやインディアンハープなどを弾きながら合唱するのはハロッチョという。いずれもメキシコ独特の旋律による陽気な明るい民謡を奏でるのだが、これがこたえられない。地酒のテキーラをレモンジュースで割ったマルガリータを飲みながら陶然として聴いているうちに、名高いメキシコ民謡『ランチョ・グランデ』と『ラ・クカラチャ』をリクエストしたら見事な演奏を聴かせてくれた。一同大喝采。

この明るいエキゾティックな歌を聴くと、本当の意味での〝時間のない国メキシコ〟の人々の精神に触れるような気がする。土俗性と白人文化との混交によって醸成された彼らの旋律に東洋的な陰湿なものは全くない。カリブ海のきらめきや碧空のように美しくカラッとしているのだ。

こうした中南米音楽は〝ラテン〟と呼ばれて戦後国内で流行したけれども、爆発的なロックの台頭によって影をひそめてしまった。したがってメキシコ民族音楽を聴くにはメキシコまで行かねば仕方がないだろう。

昔、スペインの影響による〝混血的〟なインディオ文化を凝縮させた、メキシコ的異国情緒の権化ともいうべき映画があった。戦後二十四年に公開されたエミリオ・フェルナンデス監督のメキシコ映画『真珠』である。ジョン・スタインベック原作の短篇小説を映画化した白黒スタンダード作品だが、私の記憶では空前絶後の名画だったと思う。このフィルムを探し出して東京のGAP総会で上映しようと計画し、八方手を尽くして調べたけれども、貸し出し用フィルムは見つからなかった。後に三船敏郎が主演したメキシコ映画『価値ある男』はメキシコ国内で絶賛を博し、親日感を煽る一原因となったとガイド氏が話していたが、前述の哲学的な『真珠』とは異質な作品である。

だが、これら昔のメキシコ名画でつちかわれた古いメキシコのイメージはもう通用しなくなったようだ。あらゆる面で近代化されてきたからである。

神秘のパレンケ遺跡へ

翌九日は早朝四時十五分に起床、五時三十分にバスで出発。六時五十分に空港からB727で離陸。今日はパレンケの遺跡を見学するのだ。こうしたハードスケジュールは二日間続いたが、なんとか乗り越えた。同行の皆さん方も全く不平を言わず黙々として整然たる行動をとるので、さすがはGAP会員だと感歎する。

八時前にビリャエルモサ空港着。ここからバスで緑に満ちた原始的なタバスコ州の大平野を突っ走る。メキシコのインディオがカカオの実で作った世界最初の液体チョコレートを飲んだのだとガイドさんが説明する。だからタバスコ州はチョコレートと辛いトウガラシで有名だ。

ユカタンのバス道路は数十キロも直線でつらぬいているので、かなりスピードが出せる。絵のように美しい牧場、

粗末な農家などが点在する。だが農家も車を持つようになったらしく、若い女性の服装も十年前に初めてこちらで見たときとは近代化されている。エキゾティシズムが失われるのは残念だが、彼女らにすればいつまでも外国人の目を楽しませているわけにはゆかず、先進国並みの生活レベルに達したいのだろう。オアハカの女性たちの原始的なスタイルは影をひそめたかもしれない。

九時二十分にチアパス州へ入り、十時三十分にパレンケの遺跡に到着。

ここへ来るのは三度目だが、いつ来ても故郷へ帰ったような懐かしさと安らぎを感じる。十年前に『碑銘の神殿ピラミッド』を見たときは感動で全身が震えたが、今もそのフィーリングは変わらない。ここにはマヤの遺跡のなかでも最高の美を誇る遺構が散在する。

謎と神秘に包まれたマヤ文明は西歴三〇〇年から九〇〇年までの六百年間が学芸と芸術の黄金期とされる古典期で、さらにそれを二分して各三百年間が前期と後期に分けられている。

このパレンケの建築物は古典期後期の初期に属するもので、広場の正面に高さ二十メートルの『碑銘の神殿』ピラミッドが堂々とそびえ、左側の丘陵地帯には『太陽の神殿』『十字架の神殿』『葉の十字架の神殿』の三つが点在し、広場の左側には『宮殿』がある。これらは六〇〇年代なかばに建立された。

『碑銘の神殿』と呼ばれるのは、上部の神殿の壁面に六百二十個の神聖文字が彫られているからで、その一部は解読されているが、大部分は謎の絵文字である。六年ぶりに登ってみると、石板の神聖文字がかなり摩滅してきたような気がする。あるいは光線のせいかもしれない。

しかしこの『碑銘の神殿』が一躍有名になったのは一九五二年六月にメキシコの考古学者アルベルト・ルースが、このピラミッドの地下に納骨室を発見し、その部屋に王の遺体を納めた大石棺を見つけたからだ。この石棺のフタにしてある長さ三・八メートルに及ぶ巨大な方形の石板には美しい絵が彫られていた。

「この絵は古代のロケットを操縦している図」という説を発表したのはスイスのエーリッヒ・フォン・デニケンで、彼の著書によりパレンケはますます有名になった。だが七世紀のジャングルの奥地に噴射推進式のロケットが存在するはずはない。私が十年前に現地で入手した資料によれば、これは上部の鳥が精神または天を、下方の人間の体が地を意味し、あいだの十字架を通じて天と地をつないでいる図で、いわば宇宙の創造神が天と地を支配しているという意味をあらわすという。一種の宇宙哲学的な思想を示唆したものだ。

棺の中の王の遺体の顔には見事な翡翠のモザイク仮面がかぶせてあった。これはメキシコ市の人類学博物館に展示されていたが、先般盗まれたと新聞に出ていた。

▶パレンケの『碑銘の神殿ピラミッド』

しかしこれによりマヤの無数の神殿ピラミッドは墳墓ではないという説がくつがえされて、マヤ考古学に大きな影響を与えたのである。

マヤ族は宇宙的なものと関連があった?

古代民族のマヤというのはメキシコ・ユカタン半島を中心として紀元前一五〇〇年頃から栄えた種族で、西歴一五〇年から三〇〇年までは原古典期としてマヤ文明の先駆をなし、前述のとおり三〇〇年から九〇〇年までの六百年間を最盛期の古典期とするが、十世紀の終わり頃に謎の大変動が発生して中部地域の大部分から人々は姿を消してしまう。この理由はまだ解明されていない。

しかしそれよりも夢とロマンを誘うのはマヤ族が残したぼう大な数のピラミッド形式の石造建築物だ。パレンケ、ウシュマル、チチェン・イツァ等、発掘復元されたのはまだ少数で、三万余にのぼる未発掘のピラミッドがメキシコのジャングルに眠っているという。しかもパレンケの『太陽の神殿』のごとく、現代の科学で調査しても信じられないほどの完璧な計算法でもって設計されているのもある。こうした壮麗な石造の神殿は大昔のジャングルの〝土人〟にふさわしくない何かの要素を含んでいると思われるが、現在出ているマヤ関係のいかなる専門書や解説書を読んでも正確な解答を与えてはくれない。

マヤとはいかなる種族だったのか。なにゆえにあれだけの見事な石造建築物を築いたのか? こうした疑問が解けないからこそ興味が尽きないのだが、それはともかくとして、むかしアダムスキーは大がかりなユカタン半島探険隊を組織する計画をたてたことがある。この報に接した私は家土地を売り飛ばしてでも旅費を作り、参加したかったのだが、なぜか計画は中止された。

▶パレンケの『碑名の神殿』ピラミッド地下の石棺のフタに彫られた絵。これは昭和五十六年八月に筆者がパレンケを訪れたとき、現地在住の米人マヤ文明研究家マーリー・ロバートソン女史よりゆずられたカラー大画面写真の複写。

アダムスキーがユカタンの地中に何か宇宙的なもの――古代に別な惑星から〝人間〟が何かの目的で来ていたことを立証する物、たとえば南米のペドラ・ピンターダでオム教授が発見した紋様のようなものがあることを知っていたのではないかとも思うのだが、確証は得られない。十二年前、カリフォルニアで故アリス・ウェルズ夫人に会って長時間話し合ったときも、この件だけは聞き忘れた。

日本人を尊敬するメキシコ人

太陽の神殿を撮影し終えて木陰で6×9判カメラにフィルムをつめ替えていると、そばでメキシコ人の若い男女四名が物珍しそうに見ている。私のカメラバッグに記入してあるJapanの文字を見て日本人(ハポネス)だと女性がささやいている。

立ち上がって「さようなら(アディオス)」とスペイン語で言うと、急に四名は威儀を正して、あたかも貴人を見送るかのような姿勢となり、「気をつけて(テイク・ケア)」と若い男が英語で言った。「有難う(グラシアス)」とスペイン語で返礼を残して私は立ち去った。

四度にわたるメキシコ旅行で、メキシコ人が日本人を非常に尊敬していることを私は腹の底から感じたのである。この理由としては戦後経済大国になった日本がメキシコにかなりの経済援助をしていることもあるが、メキシコの土着民族の祖先は大昔東洋から来たので日本人とは兄弟だという観念があることにもよるらしい。

考古学上では太古にベーリング海峡を渡って来たアジア人が北、中、南アメリカに東洋系のインディオとして分布したということになっているけれども、私としてはムー大陸から分散したというジェームズ・チャーチワードの説にひかれる。

だがガイド氏は意外な話をした。一八四六年から四八年にかけて行なわれた米墨(べいぼく)戦争（アメリカとメキシコの戦争）でメキシコは大敗を喫し、国土の半分をアメリカに取られることになる。その憎いアメリカ人を太平洋戦争の緒戦で日本軍が撃破したので、以来メキシコ人は日本人を英雄視し、尊敬するようになったというのだ。そうだとすれば広範囲に複雑な波紋を投げかけた大戦争の影響を、このパレンケでも体験したことになる。

一時二十分に付近のジャングル中のレストラン『エル・パライソ(楽園)』で昼食。トウモロコシの粉を練って焼いたセンベイ状のトルティーリャに、チョコレートに香辛料を混ぜたドロドロのモーレというタレをつけて食べる。うまい。これは日本人の米飯に相当するメキシコ人の常食だ。

陽気なメキシコ人と素晴らしい音楽

三時にバスで出発し、再度快晴下の広漠たる大平野を疾走。車内の冷房はよくきいて快適だ。

四時四十分にビリャエルモサの空港に到着。

空港ビル内のロビーにいると、突然音楽が響いてきた。見るとロビーの隅にマリンバを主体とする七人組の楽団が演奏をやっている。インディオの初老のメキシコ人の男たちで、大型マリンバを四名が叩き、ドラム一、テナーサックス一、打楽器一の構成だ。主旋律はサックスが受け持ち、アマチュアらしいが技量は見事なもので、メキシコの民族音楽を高らかに奏(かな)でる。マリンバに垂らした幕には『エスメラルダ(エメラルド)・マリンバ楽団』と記してある。日曜日なので演奏に来たのだろう。

マリンバの奏者たちは体をくねらせながら踊るような調子で叩き、見るからに愉快そうな身振りを続ける。見ているこちらも踊りたくなってくる。

例によって『ランチョ・グランデ』をリクエストすると、よしきたとばかり喜んで演奏を始めた。名演！　わがグループが一斉に拍手すると、楽団も嬉しそうに答礼する。続いて『ラ・クカラチャ』。これも見事なアレンジで

演奏。

空港ロビーの一角で旅行客の迷惑などおかまいなしに（われわれには迷惑どころか最高の贈り物だったが）大音響でもって長時間延々と演奏を続けるメキシコ人の底抜けの明るさ、陽気さを、ここでも見せられたような気がする。「これぞメキシコだ！」と叫びたくなるような楽しい一刻だった。

この夜メキシコ市に帰ったあと、国立芸術院で九時から始まる民族舞踊と音楽の夕に行ったが、これは素晴らしい演しものだった。スペイン系混血の美女たちによる絢爛豪華なショーで、近代化されてはいるものの伝統的な要素は保たれている。

もちろん音楽や舞踊に関心と知識がなければこうしたメキシコの文化や芸術の理解はむつかしいだろう。しかし、だれしもあらゆる分野にわたって知識や興味をもつわけにはゆかないので、旅行者は自分なりに見聞した事柄だけを率直に楽しんで記憶に残せばよいだろう。十二日間の旅行で芸術がどうの経済がどうのとむつかしく考える必要はないが、ガイド氏が経済面で奇怪な話をしたので伝えておきたい。

メキシコの銀行の利子はなんと九〇パーセント以上もつく。したがって日本円で一千万円を預金すれば、税金を引かれても毎月六十万円は利子だけで入ってくる。これは日本よりもはるかに物価の安いメキシコで数百万円の価値がある。そこで金持ちは使いきれないから、女中さんを沢山雇って仕事をせずに豪勢な暮らしをし、こうして貧富の差が激しくなるという。信じられないようなウマイ話だが、バスの中の簡単な説明だから詳細はわからない。そんなに高金利なら銀行はつぶれはしないかと聞いたら、メキシコの銀行は国立だからつぶれはしないという回答だった。この種明かしは日本からの膨大な借金にあるという。しかも元利返済など眼中にないらしい。なんともメキシコ的だ。しかしもっと複雑なカラクリがあるらしい。

アリス・ポマロイ女史と合流

紙数が尽きそうなので先を急ぐと、このあと十日にはメリダ経由でユカタン州ウシュマルの壮麗な遺跡を見学。これもマヤ古典期後期を代表する九―十一世紀の大宗教センター跡だ。

夜はユカタン半島北端の新興リゾート、アクマルに宿泊。翌日は終日カリブ海で海水浴に打ち興じたり浜辺に寝転んだりしてリラックスする。エメラルドグリーンの海とヤシと白砂の夢のような世界だ。来ているのはアメリカ人、イタリア人、われわれ日本人のグループだけで、イタリア人のなかにトップレスの女性が数人いた。

十二日はカンクン空港からコンチネンタル航空機でまた米国入りし、ヒューストン経由で、ニューヨーク市へ向かう。夜十時前にラグァーディア空港着。十二年ぶりに上空から見るニューヨーク市の夜景にまたも驚嘆する。

七番街のペンタホテルのロビーにはマサチューセッツ州ノースボロから出てきたアリス・ポマロイ女史が待っていた。一同に紹介。十二年前よりは年が寄ったが元気そうだ。

翌十三日は市内見学。日本人はニューヨークを恐れて観光に来ないのかと思っていたら、とんでもないことで、ホテル内も街路も日本人だらけ。型通りにエンパイアステートビルの展望台に昇り、ハドソン川を遊覧船で下る。船客の半数は日本人。午後は国連ビル前で記念撮影。欲をいうと市内滞在をもう一日ふやして一日自由行動にするとよかったのだが、そうもゆかぬ。ポマロイ女史も一同とともに市内を見学。

十四日、ホテルのすぐ前のペン駅から特急列車でワシントン市へ向かう。車内はゆったりして座り心地がよい。途中、ポマロイ女史と長く語り合う。このときアダムスキーに関する秘話をたっぷりと聞いた。日本語を勉強しているといって日本語の参考書を見せてくれる。

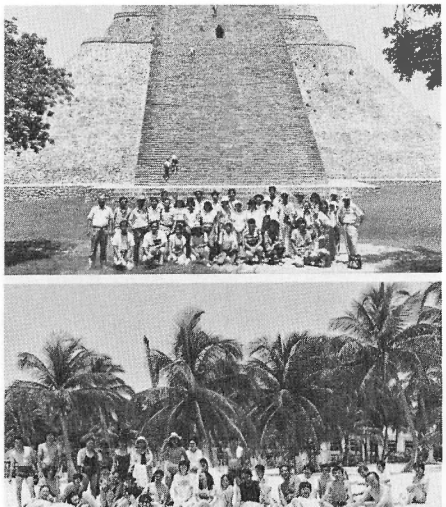
十二時にワシントン市のユニオン駅着。巨大なペンタゴンを右に見てクリスタルプラザのレストランで昼食。

二時に広大なアーリントン墓地へ到着。ポマロイ女史の先導でアダムスキーの墓を参拝。意外に小さくて高さは五、六十センチ。全員記念撮影。続いてケネディー大統領の墓へ行く。簡素なのに驚く。

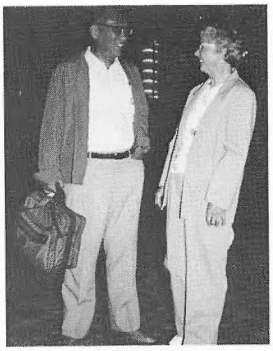
官庁街を遊覧。白亜の各省官庁がほどよい距離を保って碧空に映えている。全市これ公園といってよいほど緑豊かな美しい都市に感嘆。高さ百六十九メートルの白いオベリスク状のワシントン記念碑をバックに西ポトマック公園で全員記念撮影。リンカン記念堂の壮大さに瞠目。これら建築物の直截簡明さと白壁が多いのがいかにもアメリカ的だ。ヨーロッパとは異質なものを感じる。

デュポンホテルへ入り、夜は日本料理店『さくら』でサヨナラパーティー。ポマロイ女史が挨拶し、「愛」の法則を説く。

こうして翌十五日、ワシントン空港よりデトロイト経由で帰国の途につき、



▶上―ウシュマル遺跡。下―アクマル海岸。



▲12年ぶりの再会を喜ぶ筆者とポマロイ女史（撮影　枝川文好）。

日本時間で十六日の午後四時に成田空港へ全員無事に帰国した。参加者各位と田中氏に厚く感謝する次第である。

付記

今回の旅行で痛感した問題が三つある。(1)テレパシー(2)融和の法則(3)外国語の習得法だ。

(1)は最重要な問題で、極力この力を発揮しようと意気込んで出かけたが、暑さと疲労でテレパシー感覚はひどく低下してしまった。また写真をやる関係からファインダーをのぞく目が外界の〝結果の世界（現象）〟にとらわれがちだった。一度カメラを持たない海外旅行をやってみたいものだ。

◀ニューヨーク、国連ビル前。

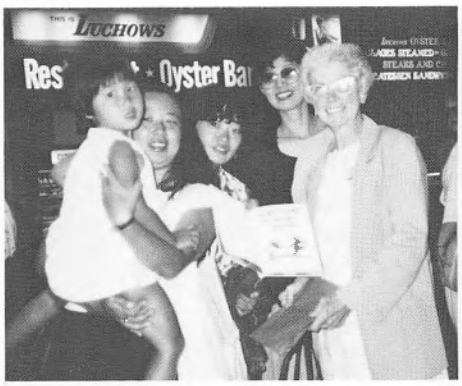
(2)も重要である。私の態度如何で団体の雰囲気が一変するので、メンバー全員に対して融和した公平な態度で接するように心がけたつもりだが、不徳の至すところで、ケムたいジジイだと思った人があるかもしれない。もっと自分の愛の精神を強化し、常に温顔に微笑を浮かべ、万人の中に溶け込むような宇宙的フィーリングを高める必要を痛感した。宇宙哲学が机上の理論や観念の空回りにならぬよう、外観や態度にあらわれるように努力したいと思う。その意味で今回の旅行は絶大なレッスンになった。

▲アーリントン墓地のアダムスキーの墓を囲んで。

(3)今年九州の九歳になる小学三年生の女児が英検二級に合格し、さらに準一級に挑戦の準備中と新聞に出ていた。この少女が示した教訓は「同じ事を長く繰り返して学ぶ方法」が最良ということである。この件は宇宙哲学の学習や超能力開発にもあてはまるので月例会その他の会合で論じたい。

今回の旅行はアメリカ英語とイギリス英語の大差を今更のように感じさせられた旅だった。同じアメリカでも西部と東部の相違、ゆっくりしたきれいな言葉、早口の不明析な発音等、方言差や個人差などもあるが、外国生活のできない人がこれらを聴きとる力を持つための最良の学習法は、英米両語のテープを暇さえあれば聴きまくることにある。それも前述の少女がやったように同じテープを長く反覆して聴くほどよい。そうすると馴化作用によって耳が慣れてくる。これ以外に方法はない。しかも努力すればだれでもマスターできる方法だ。外国語習得に知能はさほど関係ない。

◀アダムスキーの墓。花は藤村雅夫君（東京）が買ってきて供えた。



◀写真右はアクマル海岸にて（撮影　梅沢明）。左は安藤汐南ちゃんに絵本を贈ったアリス・ポマロイ女史（撮影　安藤博子）。

A Letter from Massachusetts

訪米旅行団と日本GAPの皆様へ

米マサチューセッツ州
アリス・ポマロイ

皆様方と一緒に行きましたニューヨークとワシントンへの旅はまだ全く夢のようです！　私がこうまで尊敬されるとは信じがたいほどです。私はこれほどにご配慮を頂く価値はない者ですが、皆様方のご親切、寛大さ、皆様方と一緒にいて持った純粋な喜びなどにいつまでも感謝します。私の心は、こうした集まりから常に得られる〝より大きな理解力〟を持つことができて感謝の気持でいっぱいです。

私はニューヨークやワシントンですごした懐かしい記憶をいつまでも失いません。バスに一緒に乗ったこと。田中氏が皆さんのお名前を呼んで何度も名簿をチェックしたこと。これはあらゆる細かい事をのがさない有効な方法です。そして久保田氏の賢明な助言と指示。皆様の楽しそうな顔に浮かぶ大きな微笑を見るのは素敵でした。同行した〝最も小さな天使〟（訳注＝安藤汐南ちゃんを意味する）、ジョージ・アダムスキーの墓への訪問、私の兄弟姉妹たちと一緒にテーブルを囲んでおいしい食事をとるときの楽しさ。

私の知る限りでは、日本GAPはアダムスキーの哲学を教え、学び、実践することにおいては、アダムスキーがタッチした他のいかなる国よりも多くの事をやっています。きっとアダムスキーもスペース・ブラザーズも皆様方の努力を喜んでいると思います。

私は皆様方の一人一人と個人的に相対して、皆様方をもっとよく知る時間があればよかったと思っています。たぶんこの次にはできるでしょう。なぜなら私は日本でまた皆様にお会いすることを心から待ち望んでいるからです。それで私は日本語を勉強するつもりです。

GAというのはジョージ・アダムスキーを世界中のさまざまの国の人々が呼ぶのに用いた愛称です。彼は私たちの高次元な尊敬にあたいする指導者としてよりも、むしろ一友人、一兄弟であることを心から望んでいましたので、この愛称は彼を普通人のレベルに置くことになりました。

私は心の底から皆様方にたいして感謝し、一人一人に愛をこめてご多幸をお祈りし、日本におけるアダムスキーの業績が広がることをお祈りします。

（日本語で）サヨナラ

（久保田訳）

Impressions of the U.S.A. and Mexico

「アメリカ東部西部・メキシコの旅」に参加して

〈到着順〉

内容の濃い素晴らしい旅

大阪市　海老原まゆ美

久保田先生、WSTの田中様、大変素晴らしい旅行を企画下さいまして有難うございました。私にとって初めてのGAP海外研修旅行に参加させて頂きました。他の旅行社の企画と違って内容的に濃くて、自身を進歩へと導くためのレッスンと思われます。また今回の旅行は何かしら一つの区切りのような気がしました。

今回の旅行のメーンと思われるのはダニエル・ロス氏ご夫妻とアリス・ポマロイ女史にお会い出来たこと。御三方とも非常に温和な高い波動を強く感じました。私自身英会話が出来ないため何ともがゆい思いをしましたが、深く静かな愛が印象として心に焼きついております。ロス氏がデザートセンターで摂氏五十度と伝えられた暑さにもかかわらず、懸命にアダムスキー氏とオーソンが会見した場所を探して確認されたこと。そして氏が小高い山の上から降りてこられる姿を奥様が優しく迎えられた時はとても感動しました。

またアリス・ポマロイ女史のお土産の桃。自然の味と香り。桃の本当の味は酸味があるのが特徴なのです。ずいぶん重かったことでしょう。またその夜のミーティングは非常に素晴らしく、この機会を与えて下さった先生、田中様、通訳をして下さった坂本さんに感謝いたします。

場所として特に強く波動を感じたのはウシュマル遺跡、メキシコの緑豊かな大平原に牛の姿、最後の素晴らしい都市ワシントン市。ここはロサンゼルスやニューヨークでは味わえない雰囲気とたたずまいがあり、黒人の人達が明るく生き生きとしているのが強く印象に残っています。本当に素晴らしかった特別に意味のあるレッスンでした。最後にアリス・ポマロイ女史の愛と祝福のお言葉を忘れずに頑張ります。皆様有難うございました。

デザートセンターの帰途UFOを見る

岩手県　芳賀弘子

とても楽しく素晴らしいアメリカ・メキシコの旅に参加させて頂き、有難うございました。私の念願であった久保田先生にお会いし、またデザートセンター、パロマーガーデンズにパロマー天文台。アダムスキーが住んでいた大地に行けてとても幸せでした。

デザートセンターの帰りにはっきりとUFOを見ました。風船という声もありましたが、私はUFOだと信じております。パッと見た瞬間「あ、UFOだ！　こっち見てる！」という印象が強く伝わってきて、それに物体が生きているように見えました。物体はフランジの部分、ドームの部分と区別がつき、全体は黒く、ドームの部分は少し青味がかってきれいでしたが、光ってはいませんでした。そして目の高さよりやや下方向に浮かんで静止していて、バスが通り過ぎると横になりながらスーッとバスの後ろ方向へ飛んで行きました。一瞬の出来事でしたが忘れられません。

パレンケの遺跡を見学して空港に帰る

間に素晴らしい虹色の雲が何回も現れました。UFOは現れませんでしたが、あきらめきれずにいると、中心が円盤の形に見え、エメラルドグリーン色で、そのまわりが紫色の非常にきれいな雲が出現したではありませんか。すごくうれしくて感動しました。

テオティワカンでは太陽のピラミッドの頂上に登ったとき、ふと「前にここに来たことがある」という印象がわき起こってきました。すると近くにいた樽谷さんが以前に私の写真をこの場所で撮影したことがあると言うのでびっくりしました。

ダニエル・ロス氏夫妻、アリス・ポマロイ女史にもお会いでき、特にアリス・ポマロイ女史には貴重なお話をお聞きすることができまして本当に感謝しております。超豪華な旅行でしたので胸がいっぱいです。企画して下さいました田中さん、久保田先生、本当に有難うございました。先生の愛情溢れるフィーリングを生涯忘れることはないでしょう。

区切りのついた素晴らしい旅行

山梨県　清水　南

私にとって初めての海外旅行はいろいろな意味で素晴らしい旅となりました。

広大なモハービ砂漠で黄土色に焼けた平原や山々を見ていると、日頃日本で見慣れた緑の木々が大変懐かしく、樹木が私達と深いかかわりを持っていることを強く感じました。

メキシコに入ってからは機内食が大変うまかったこと、またパパイヤ、メロン、スイカ等のフルーツはメキシコではいつも出ましたが、この味は忘れられません。マヤの遺跡等大きな遺跡を三カ所回りましたが、各遺跡からは数千年前の人々が直接語りかけてくるような感じを受けました。

人類学博物館は見応えがありましたが、睡眠不足のためリタイヤ、今回の旅行中最も残念なことでした。しかし夜は『思い出の館』でビールをくみかわしながら民族音楽のハロッチョを聞いたときには旅の疲れも吹き飛んで、まさにこの旅行のハイライト。翌日の民族バレエ見学は二時間たっぷり異国情緒を満喫しました。

カリブ海のリゾート地アクマルに着いたとき、その美しさには心を完全に奪われました。ココヤシの茂る白い砂浜、また満月の浜辺で長椅子にもたれて深夜一時すぎまで月や星々をながめ、静かな波音を聞いていると、時のたつのも忘れるほどのこのひとときは今回の旅行中最も素晴らしい思い出となりました。そしてここではプールでの久保田先生の上手なクロールを拝見してビデオカメラに収めました。

ニューヨークを経てワシントン市でアリス・ポマロイ夫人の案内によりアダムスキー氏の墓参が出来た時は大変感激し、何か一つの区切りがついたということで心が落ち着きました。ポマロイ夫人には三日間私達のために親しくおつきあい下さり、大変感謝しております。この夫人の信念と優しさや寛容などを学ばせていただきました。

最後に旅行中同室でお世話になった伊東さん、この素晴らしい旅行を企画実施していただいた久保田先生と田中さんに心よりお礼を申し上げます。

アリス・ポマロイ女史と会見して感激

東京　藤村雅夫

ロサンゼルス着後、到着ロビーで背丈二メートル程の大男が私にインドネシア救済の寄付を流ちょうな日本語で話しかけた。百ドル寄付しようと思った時、目の前を金髪の美人が通った。結局寄付を忘れるのである。

デザートセンターへ行く途中、目の前を小さな円い光体が上空の進行方向、東の方へ消えた。コンタクト地点は岩の連なる裾野の斜面に高さ一メートル程の四角い木の柱が石積みで立ててあり、そこから上へ数百メートル見上げた所がそうであると言っていた。アダムスキーがオーソンと会見した大地デザートセンターへ来た私の喜びはあなた方にも判るであろう。素晴らしい見渡しの出来る場所であった。ロスへの帰路の途中、青木氏が風船型UFOを発見。バス前方左から数秒間、バスの中の全員が見える高さで、数秒後に消えた。風船型UFOは伊東氏の命名である。

すべての日程において移動時間が長いのであるが、移動中は全員が空を観察し、寝る人はほとんどいなかった。アダムスキー哲学をよく実践しているのだなと思った。

パロマーガーデンズ、パロマー天文台を見学後、旅はメキシコの遺跡めぐり、ニューヨーク、ワシントン市と続くのであるが、この旅、どこをとっても全体として大いに感激したのであるが、ニューヨークでのアリス・ポマロイ女史との全員での会見が最も素晴らしい出来事であった。女史は夜の十二時頃、私たちがホテルへ着くのを待っていた。本当に有難く嬉しいことである。

翌日は市内見学後、ポマロイ女史と全員が坂本さんの通訳により質疑応答を行ない、魂の浄化高揚を感じる思いだった。ニューヨークからワシントン市のアーリントン墓地へアダムスキーの墓参に行く。ぐっと込み上げるものがあったが、そこは男子我慢の子である。皆さん有難う。久保田先生、田中氏、ダニエル・ロス夫妻、アリス・ポマロイ女史、有難うございます。私はこれからも旅に出かけます。

陽気なメキシコ人

東京　野本俊次

今回の旅は大変にハードで忙しいものであった。しかし今はもう懐かしい想い出である。生まれて初めてのアメリカ、ブロークン英語が通じるかどうか、ちょっぴりドキドキ。ロスはなんと道の広いことか。そして車の汚さ。こわれたままの車。車検はないそうだ。雨が降るのは年三日ぐらい。したがってコロラド川から六百キロの距離を直径十メートルの水道管で供給とのこと。

デザートセンターでは三分の一世紀前の写真を頼りにロス夫妻の案内でコンタクト地点へようやく到着することができ、感激のひとときをすごした。翌日はパロマーガーデンズでしんみり。

メキシコのガイド氏のレクチャーで、メキシコの年利息はなんと九十パーセントだそうだ。一千万円を預金すると利子だけで毎日仕事をせずにテニスやゴルフ三昧の生活ができ、それでも余るそうだ。ウラヤマシイ。移住しようかなと考え込む。物価は日本の十分の一ぐらい。公共費は信じられぬほど安い。その秘密は日本からの膨大な借金にある。元金返済はおろか利子の支払いも動ずることのない陽気なメキシカン。なんと日本人のお人

良しぶりよ！

テオティワカンの遺跡でも感心することしきり。土産物店で円とドルとペソの換算に四苦八苦。びっくりしたのはメキシコ市の夜の無灯火の車の多いことだ。日本では考えられない。緯度でフィリピンあたりのパレンケの遺跡では太陽の神殿が最高だ。ウシュマルの遺跡で大場範子さんが突然「キャーッ」。何事かと見ると一メートルものトカゲにびっくり。しかも二匹もいる。小生がおどかすとガレキの中に姿を消した。

アクマルではトップレスの白人女性たちが目前を闊歩し、皆さんソワソワ。小島岩男氏、大場さんらと本気で遠くへ泳ぎに出る。

ニューヨークからワシントン市へ行き、ペンタゴンの大きさにびっくり。夕食はアリス・ポマロイさんのお別れパーティー。考えさせられる旅だった。先生や田中さん、全国から参加された皆さん、有難うございました。

UFOを見た最高の旅

山梨県　田中法代

今回の旅は期待していた以上に最高の旅でした。その一つはデザートセンターへの行き帰りのバスの中からハッキリと金属性のUFOであるとわかった物体を二回見たことです。特に一回目の時はバスからそう離れていない空中に丸い形をした銀色に輝く物体が浮かんでいました。そのときはあいにく眠っている人が多くて、見た人は五、六人ぐらいだったでしょうか。

旅行はわりとハードスケジュールだったのですが、不思議と体が疲れず、最後まで体調を崩すこともありませんでした。また参加された会員の皆様が素晴らしい方達ばかりで、色々と親切にしていただき、まるで兄弟のように接することが出来、本当に楽しい旅行でした。これも久保田先生をはじめ添乗員の田中様や皆様のおかげと思っています。本当に有難うございました。

「LOVE」の空中文字を見る

東京　伊東芳和

ゴツゴツした岩肌、小さな灌木、砂漠とは名ばかりの荒涼とした岩石の続く一角に目指すデザートセンターがありました。ムッとする熱気に思わず立ちすくんだほどです。ロス氏はすでに二度この場所に来たとのことですが、コンタクト地点が確定しずらく、かなり精力的に動き回っていました。しかし安藤氏が持参したデザートセンターの写真の載ったユーコン98号のおかげでコンタクト地点がわかり、さらにア氏のグループが積み重ねたというケルンのマークも見つけました。ここは間違いなくコンタクトの現場でした。ここでは円盤は目撃できませんでしたが、遠くから見守られている印象がやけに強く残りました。ここへ来て大きな希望が達成され、それだけで今回の旅行の目的を果たしました。

翌日パロマー山へ登りましたが、海岸沿いをバスが走っていた時、左側のやや真上の方向にアルファベット型の雲が現れたのです。その雲の中にUの字が四つほど見られ、写真を撮ろうとレンズを向けたら、そのうち「LOVE」に似ているとの声が上がり、バスの後方は興奮に包まれたのです。これ以外の線状の雲は他に見あたらず、何か意識的な気がします。

ロス夫妻とはパロマーガーデンズで握手して別れましたが、誠実で実直な人柄はGAPのような宇宙哲学を実践するグループには得がたい存在のような気がしました。この御夫妻と久保田先生に導かれてやって来たわれわれは、ここで心の融合を見た思いがしました。

その後メキシコのウシュマルの遺跡の『金星の館』ではなぜか懐かしさを感じました。チャーチワードも『秘儀の神殿』と名付けてムー大陸とのかかわりを書いています。

アリス・ポマロイさんはア氏関係の知っている限りの知識を自分一人の中に閉じこめておくのは勿体ないという感じで、われわれ全員に知らせてあげたいと人なつこさと上品さを示していました。思い出多く楽しい旅行を計画して下さった久保田先生と田中さん、同行の皆さんに感謝の気持で一杯です。

コンタクト地点へ行った喜び

神戸市　今西正子

以前からアダムスキー氏とオーソン氏が初めて出会ったデザートセンターへ絶対に行きたいと思っていましたが、今度の旅行でその願いが実現したのですから、私の喜びは何物にもかえられないものになりました。

デザートセンターの標識が見えた時はもうはやる気持で一杯でした。一生の思い出になります。しかしデザートセンターは暑かった！　気温摂氏五十度だそうで、顔に吹きつける風は熱風です。足元は焼けたごろごろ石で歩きにくいし、喉も渇いてからからでした。でも心は充実しており、早くコンタクト地点にたどり着きたい一心でした。

ダニエル・ロスさんを先頭にいろいろ捜しまわった末、古いマーカー（目印）が見つかりました。そこからは萩原さんと二人でどんどん上に登って行きました。ふり返って見ると他の人達が小さく見えました。コンタクト地点まであと数十メートルと思われる所で交互に写真を撮りあいました。本当はもう少し上の方まで行きたかったのですが、その時、ほとんどの人がバスの方に向かっていたので、時間的に無理だと思いあきらめました。後で思い返してみて、やはりもう少し上の方まで行っておくべきだったと残念に思います。

メキシコの遺跡めぐり、ニューヨーク、ワシントンの素晴らしい旅ができ、旅することの重要さを知らされました。今回は特に内容の豊富な旅行であったと思います。当然のことですが旅の始めから終わりまでグループ内にとてもよいフィーリングが満ちていました。

この旅行に参加できたのも偶然ではなく意味があり、一つのステップになるようにしなければならないと考えています。アリス・ポマロイさんの話の一つに、この旅行が終わって二、三週間たって、はっと気づくことがある。それからどうするかが……という内容のことがありました。とても心に残っています。久保田先生、田中さん、素晴らしい企画を有難うございました。参加された皆様、大変お世話になりました。

UFOを目撃し続けた日々

秋田　坂本茂子

この旅が楽しいものになることは前からわかっていましたが、こんなにも素晴らしいとは思いませんでした。そしてこ

の旅の間にずいぶん沢山のUFOを目撃することができました。

デザートセンターからロサンゼルスへ帰るバスの中では暑さにまいってさすがにみんなぐったりしていましたが、町並みが見え始めた頃、すぐうしろにいた青木君が「あっ！」と言って椅子の背を叩くので、外を見るとそこには深いエメラルドグリーンに輝く大きな美しい球体が浮かんでいました。家と比べると十メートルくらいの大きさと思われます。まん中が少しへこんだきれいな楕円形でした。

次の日パロマー山へ登る途中、空中に「LOVE」の文字を伊東さんが見つけて教えてくれました。お昼少し前、小さな光点を見つけ、枝川さんに金属性の球体であることを確認してもらいました。それはかなり長い間見えていて左右上下に動き回っていました。同じ日の帰り道でもまた少し大きな光点を見つけたので、また双眼鏡でのぞいてもらったところ、さっきのと同じ物体らしいということでした。私は左右の視力が極端に違うので眼鏡をかけていますが、遠くの小さな物が良く見えるようになり、びっくりしています。

このあとアナハイムで夕食をとるためバスを降りた場所で、通りをへだてた二本のパームツリーのまん中を動いていた白い球体を十人ぐらいで目撃しました。次の日、大畑君と芳賀さんが私と一緒にバスの窓に張りついて今度は光らない白い球体を見つけました。それはまもなく動きだして消えてしまいました。

ニューヨークの市内でも不思議な動きをする白い丸い物体を見ましたし、雲の中から黒い小さい物体がバラバラと降ってくるように現れたのは一人で何度も見ましたが、いつも共通しているのは無理なく見える場所に現れるということです。ニューヨークで皆さんと別れて二十三日にワシントン州シアトルから乗った飛行機からアダムスキー型のスカウトシップを目撃しました。久保田先生、田中さん、皆様に心から感謝致します。

メキシコは私の国

東京　越崎裕子

今度の旅は本当に心に残る旅行となりましたし、私のメキシコに対する想いがいっそう強くなった旅行でもあります。いずれにしてもGAPの方々と一緒に十二日間も旅行できたことは思い出深いものとなります。

ロサンゼルス到着の日からロス夫妻と夕食を一緒にでき、翌日のデザートセンター行きはUFO出現という嬉しい出来事と共に、あの異常な暑さを忘れることはないでしょう。摂氏五十度あったとか。コンタクト地点という感動もつかの間、私の心臓は救難信号を出していました。今度は冬にでももう一度訪れてみたいと思います。

メキシコは私の国です！　ここへ来るのは二度目ですがユカタン半島は初めてです。はるか昔、テオティワカンの遺跡の広い空間の中に巨大な宇宙船が飛来していた様子が目に浮かぶようでした。またパレンケの遺跡はあたたかいフィーリングの起こる所で、ぜひもう一度ゆっくりと歩いてみたいです。ウシュマルも大きな遺跡でしたが、私としてはパレンケに親しみを覚えました。マヤの遺跡群は素晴らしいものです。

メキシコにはいろんなものがありました。多くの遺跡をのみ込んだような緑のジャングル。田舎でのぞいて見たインディオの人々の家にはまだ電気もなく、丸太で組んだ原始的な小屋の中にハンモックで寝るような生活がありました。アクマルの夜の浜辺の映画のような風景。沢山食べた新鮮なフルーツなど。夜になれば全くの闇になってしまうユカタンのジャングルは昼間でも緑の闇のようで、その中にまだ多くの秘密とマヤの人々の想いをのみ込んでいるようでした。とにかくもう私は完全にメキシコにとりつかれてしまい、再び訪れる日を夢見ています。

アメリカでのポマロイ夫人はとてもあたたかく人を包み、すべてを許し、常にアダムスキー哲学に生きているような素晴らしい方でした。今回の旅行は徹夜が二回、朝の四時半起床が二回を含む非常にハードなスケジュールでしたが、その分とても充実して素晴らしい旅行でした。久保田先生をはじめ田中さん、旅行参加者の皆さんに心から感謝します。

マヤ文明の遺大さを感じる

群馬県　小渕信久

今回『アメリカ・メキシコの旅』に参加させていただき、本当に感謝しています。私自身初めての海外旅行で出発前は不安でしたが、出発日に成田空港にて久保田先生が、今回の旅行は全員無事に成田空港にもどって来るから大丈夫だという一言に安心して機内に乗り込みました。九時間半の飛行の後、ロサンゼルスに到着し、その日は市内観光をしましたが、ガイドの古田さんがとてもきさくな人でリラックスできました。夜はダニエル・ロス夫妻を迎えての夕食会で、全員の自己紹介をかねてとても有意義な時間をすごすことができました。

翌日はアダムスキーが金星人と会見したデザートセンターを視察しました。とても暑かったのですが、ロスさんは暑さをものともせずに歩きまわり、アダムスキー問題に対する真剣さには習うべきものがあり、感心しました。デザートセンターからロサンゼルス市内へ帰るバスの中から白銀色のUFOを同席の青木さんが発見して私も目撃しました。ほんの数秒間でしたのでカメラに収めるまでにはゆきませんでした。

メキシコではマヤ文明の遺跡を見学。目の前に見るピラミッドは雄大でマヤ文明の偉大さを感じました。出発して七日目はアクマルに滞在し、終日自由行動で海水浴やテニスに興じて楽しい思いをしました。それまでのメキシコでのスケジュールがかなりハードだったため、アクマルでの一日は心身ともにゆっくり休めました。

最後にこの貴重な体験が出来た旅を企画して下さった久保田先生はじめ田中さん、お世話になった同室の梅沢さん、同行の皆様に感謝します。有難うございました。

メキシコへ移住したい

東京　枝川文好

私は去年の後半から、今年のGAPの旅行には必ず参加出来る！という内部からの衝動を強く感じていました。私はフリーの仕事をしていますが、旅行期間の前後に仕事が集中し、期間中はうまい具合に入らないというわけで、絶対に行くんだという強い意志の力があれば必ず実現することを実感しました。

アダムスキー氏が一九五二年十一月

二十日に金星人オーソン氏と劇的な会見をしたデザートセンターに立った時の感動。メキシコでのアステカ、マヤの遺跡群の壮大さ。特にマヤ古典期後期のウシュマルの遺跡群の中を歩いていると非常にゆったりとしてきました。アクマルでのさわやかな一日。

また私は何度かUFOを目撃しました。最初に目撃したのはデザートセンターに行く途中のバスの中からで、進行方向にむかって右斜め上前方に金属性の物体がキラッと輝くのを見ました。またデザートセンターに着いてアダムスキー一行が食事をしたという場所で、月のような感じのような物が一瞬にして消えるのを見ました。

次の日、パロマーガーデンズに行く途中の午後一時三十分頃、バスの中から左方向少し上に秋田市の坂本茂子さんが物体を見つけて私が双眼鏡で確認した所、形は楕円形で、それが静止したり斜め下に移動したり、雲の中に隠れたかと思うとまた出てきたりという運動を約一分位はやっていたと思います。またパロマーガーデンズからの帰りの六時五十五分、右と同型の物をこれも坂本さんが見つけて私が双眼鏡で確認しました。

また私は今回の旅行でメキシコに非常にひかれてしまいました。私は何年か先にメキシコに住もうと計画しております。その時が来ましたらぜひ遊びに来て下さい。心から歓迎します。「自分の描いたイメージは必ず実現する!」この精神で今後とも頑張ってゆくつもりです。今回の旅行はかなりハードスケジュールでしたが、この旅行を計画して下さった日本GAP会長久保田八郎先生、ワールドセブントラベル社の田中さんに心から感謝いたします。本当にどうも有難うございました。ムチャス・グラシアス。アディオース。

写真に写らなかった不思議なUFO

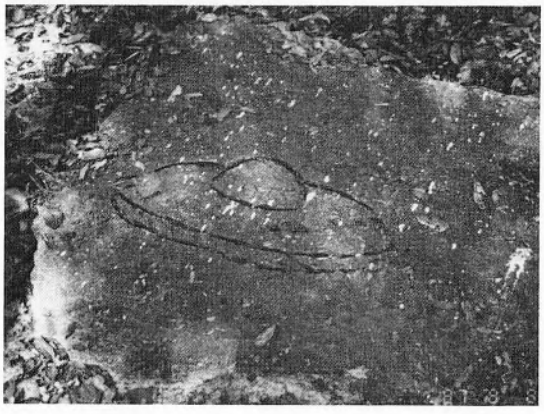
神奈川県　青木雅孝

今年の旅行にはぜひ行きたいと去年から考えていました。またなぜか行けるという確信がありました。いろいろと紆余曲折がありましたが、どうしたことか周囲に旅行に行けるように手伝ってくれる人が出てきたりし、休みのシフトで調整してもらったりして行けるようになりました。盛り沢山の企画も素晴らしかったし、ダニエル・ロス夫妻やアリス・ポマロイ夫人、同行した皆さん方と、なぜか初めて話をする人とは思えないほど楽しくすごすことができて大変感謝しています。

デザートセンターからの帰途、休憩したときになぜか地図がほしくなり、一ドルで買える自動販売機にコインを入れ、カリフォルニア全体とロサンゼルスの地図を買いました。バスに乗って十号ハイウェーの南側にあるオンタリオ空港を地図で確認し、民家の並ぶ地点にさしかかった時、なにげなく横を見ると待望のUFOが現れていました。その様子は銀色のボディーが風船のような形状で、まだらに青緑色に光っている所があります。民家の上空五十ないし百メートル位、距離にして百ないし二百メートル位で、民家と同じ位の大きさに見えましたから、直径は十メートル近くあったと思います。

私はとっさにアッと言ってポケットカメラを取り出してシャッターを三回押す間に消えてしまいました。あれならだれが見ても風船と感違いするだろうと思われますが、写真を見れば一目瞭然だろうと現像上がりを待っていたのですが、この目で見たUFOの姿は写真の中にはどこにもなく、はるか遠くに小さな点状にあるのみです。写真上には少なくとも五ミリ位の大きさで写っているはずです。その目撃地点はポモナ市内の十号フリーウェーのギャレー大通りと交差する付近で、時間は六時半頃です。写真に写らなかったということは、われわれだけに擬似影像（ホログラフィーを使った立体映像のようなもの）を見せていたのかもしれません（計算した数式と図は省略）。

今度の旅行はハードスケジュールながら色々な場所に行けて楽しくすごせました。アリス・ポマロイ夫人が来年には来日されるとのことで大いに期待しています。



◀写真上はパロマーガーデンズのレストラン跡で説明する久保田会長。下はアダムスキーがセメントに彫り込んだ円盤の絵。帽子のように見える（撮影　青木雅孝）。

音楽があなたを変える!?

日本でも最近、NHKで音楽療法の現場の模様が紹介される等、音楽の秘められた力についての関心が高まりつつあります。

単なる娯楽・芸術の一形態としかとらえられていなかった音楽の意外な側面、その不可思議な物理学的性質が、今、世界中の学者の注目を集め、医学・心理学・物理学の各方面から種々の実験・研究が行なわれています。そのいくつかをご紹介しましょう。

✣音楽の振動が砂の上にある一定の幾何学模様を作る✣

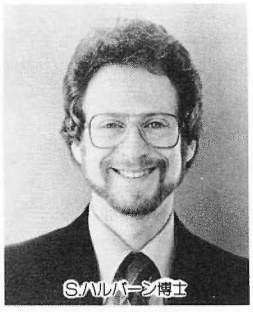
十九世紀のドイツの物理学者エルンスト・クラドニは、薄い銅でできた円盤の上に砂を撒き、バイオリンで色々なクラシック音楽を演奏して、円盤の上の砂が作る独特の模様のパターンを調べた。その実験で、クラシック音楽の中でも特にバロック音楽と呼ばれる、バッハ、ビバルディーなどの曲が、「ヒトデの形に見える五角形の星形」「蜂の巣のような六角形の集合体」「オウム貝のようなラセン状の渦巻き」等々の非常に美しい幾何学模様を砂の上に形作った。

スイスの物理学者ハンス・ジェニー博士は、このクラドニの実験を追証するため、円盤の上に振動により敏感に反応する液体・粉末などを撒いて、バイオリンの代わりに水晶振動を用いて実験を行なった。その結果、水晶振動の周波数が音楽の周波数レベルに達した時、クラドニの実験と同じような美しい幾何学模様が砂の上にあらわれた。その中であらわれた幾何学的な渦巻の形は、銀河系宇宙の形にそっくりであった。

✣音楽は人間から植物に至るまであらゆる生物に様々な作用を及ぼす✣

アメリカの生物学者ドロシー・リタラック博士は、植物に対して色々な音楽を流して、その反応を調べた。その実験で、ロック音楽、特にヘヴィ・メタルの音楽を流すと、植物は「顔をそむけるように」音楽が流れてくる方向と逆方向へ成長し始めた。インドの古典音楽やバロック音楽を流すと、逆にスピーカーの周りを包み込むように成長し始めた。

アメリカの著名な心理学者であり、又、スピリチュアル音楽と呼ばれる独特の音楽の作曲家でもあるスティーブン・ハルパーン博士は、キルリアン写真やエンセファログラフ等を使い音楽の人間に与える物理学的作用について実験を行なった。その実験によって、肉体の各部分は固有の周波数で振動しており、下にいくほど周波数が低くなることがわかった。そして、肉体の各部位の細胞は、その固有の振動数に近い音楽の振動にふれると、共鳴するような形で共振し、エネルギーが付加されて活性化することも判明した。又、$\frac{1}{f}$のゆらぎ（周波数とエネルギー量が逆比例する関係）を持つバロック音楽や博士の作曲になるスピリチュアル音楽の振動が人間の肉体にふれると、肉体各部の細胞も非常にゆったりとして調和のとれた$\frac{1}{f}$のゆらぎで振動するようになり、大脳の脳波も理想的な脳波と言われるアルファー波（このアルファー波自体$\frac{1}{f}$のゆらぎを持っている）優位の状態になり、これらの音楽が医療面、能力開発等の面で種々の効能を秘めていることも判明した。


Sハルパーン博士

✣音楽は人間の意識を高め、そして平和で調和に満ちた理想社会を築き上げるための強力なテクノロジーのひとつ✣

今ご紹介したように、音や音楽には現代物理学でもまだ解明されていない未知のエネルギー、メカニズムが秘められています。今ご紹介した以外にも音楽は非常に不思議な現象を引き起こします。そのひとつに音楽の〝オーラ現象〟があります。音楽とオーラなどと言うと奇妙な取り合わせに聞こえますが、アメリカではオーラ透視能力者による〝音楽オーラ〟の研究などというのも行なわれ、それに関する専門書も出版されています。

アメリカでの研究によれば、どんな音楽でも、その音楽の振動によって特定の色の組み合わせ・特定の形を持った固有のオーラが発生するということです。特に、バロック音楽やスピリチュアル音楽等の場合は、王冠の形・流れるような炎の形などをした、エメラルドグリーン、ブルー、ゴールド等のあざやかな色彩を放つ美しいオーラがあらわれるということです。（日本でもスピリチュアル音楽をステレオで聴いていたら、スピーカーからエメラルド・グリーンとゴールド色の美しいオーラが湧き出し、音の拡がりとともに、そのオーラが部屋全体に拡がってゆくのを見たという中学生がいます。）

日本のある研究家によると、音楽の持つ独特の振動がモノポール（単極磁気）の㊉と㊀に、ある作用を及ぼして固有の放電現象（例えば㊉のモノポールふたつから㊀のモノポールひとつへ放電が起きるとエメラルドグリーン色に見えるという感じで）を起こし、それが固有の色と形を持ったオーラとして見えるのだそうですが、正確なところは今後の科学者の研究に待たねばなりません。

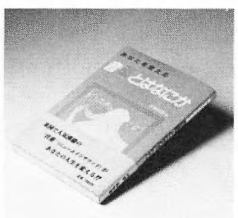
このように、音楽には驚くべき未知の力が秘められており、アメリカの音楽家や科学者の中には、「音楽を人間の意識を高め、ひいては平和で調和のとれた理想社会を築くためのひとつの強力な媒体として使えないだろうか？」という視点から作曲活動・研究を行なっている人々もいます。

日本でも最近、聖路加看護大学学長を会長とするバイオミュージック研究会が発足し、音楽の医療面への応用を研究する動きが活発になってきましたが、単に医療面にとどまらず、教育・心理・超心理学等にわたる幅広い観点から専門的研究が積極的に行なわれ、音楽の持つ未知の力を解明し、理想的社会を構築するための強力なテクノロジーとして利用しよう〟という動きが出てくることが望まれます。

試聴用テープを無料でプレゼント中

■ハルパーン博士の作曲・制作になる、心身をリラックスさせ大脳の働きを活性化する特殊音楽（サブリミナルテープと呼ばれる、音楽に〝耳に聴こえない周波数に変換された心理学的メッセージ〟を同調させたもの）の試聴用テープを先着50名の方に無料でプレゼントしています。ご希望の方は左記宛に『サンプルテープ①希望』とお ハガキ又は電話でお申込み下さい。

■音、音楽の知られざる側面にスポットライトを当て、21世紀には音楽が単なる娯楽としてだけではなく一種の『薬』として、さらには精神文明構築のための媒体として使われるようになると説く、話題の書「あなたを変える音楽とは何か」（水野和彦著 アポリア出版刊 定価一、二〇〇円 送料二五〇円）をご希望の方に頒布いたしております。ご希望の方は書名を明記の上、おハガキ、電話でお申込み下さい。（代金は本に同封される払込用紙にて一週間以内にお振込み下さい。）


「あなたを変える音楽とは何か」
水野和彦著
アポリア出版刊

申込先
〒107 東京都港区南青山1-26-4
アメリカンライブラリー社 UFO係
☎ 03（479）5864

'87 GAP-Japan General Assembly

昭和62年度総会、大盛況

●昭和六十二年九月二十日(日)
●東京有楽町朝日ホール
●出席者　二百七十名

穏やかな初秋の午後、昭和六十二年度日本GAP総会が開催された。今年は本誌連載中の「UFO—宇宙からの完全な証拠」の著者であり、アメリカで積極的な活動を展開しているUFO研究家ダニエル・ロス氏を、都内トップクラスの講演会場・有楽町朝日ホールにお招きしての豪華な総会となった。

正午の開場とともに大勢の方々が入場してくる。久々の外国からの招待講演であるということや、数日前の朝日新聞の「マリオン」欄でも紹介記事が掲載されたということもあってか、途絶えることなく入場者が続く。GAP会員以外の方もずいぶん見られる。また数年ぶりに来られたという方もあり、話題性の大きさ・来場者の期待度の大きさを改めて認識させられ、世話役の一人として身のひきしまる思いがした。

午後一時五分。東京本部役員・篠芳史氏の朗々たる司会によって幕が開く。

まず最初の講演者は日本GAP会長久保田八郎先生である。久保田先生は本日の来場者の中にはUFO問題に関して初心者の方が多数いらっしゃることを考慮されて、UFO目撃の歴史、有名な目撃例、UFOとは何かなど、UFO問題の基礎をわかりやすく解説された。更にアダムスキー哲学の基礎を紹介され、人間の運命は想念の持ち方次第であり、多数の人がプラスの想念を持てば世界は平和になると、地球改善のための根本的解決法を示された。

最後に久保田先生は世界各地で撮影されたUFO写真をスライド映写され、アダムスキータイプの円盤が各地で目撃されていることを指摘された。また、今夏のGAP海外旅行で撮影されたアダムスキー氏関係の写真（デザートセンター、パロマー・ガーデンズ等）も映写・解説されたが、旅行参加者の一人としてしばし素晴らしい体験を思い起こした。

二時十五分からはいよいよダニエル・ロス氏が登場。「ご紹介いただきましてありがとうございます」と日本語で挨拶され、会場は拍手の渦と化す。

ロス氏はまずアメリカのUFO事情を説明される。数多くのUFO目撃報告が出され、アダムスキー氏のような偉大なコンタクティー（別な惑星の人と接触した人）を生み出しているアメリカでありながら、近年は宇宙開発計画は縮小され、NASA（米航空宇宙局）も他の惑星の生命の存在を否定するなど、必ずしも楽観視できる状態ではないという。

また、先般出された著書の説明や、UFO問題の研究を始めたきっかけなども話されたが、詳しくは本誌連載記事を参照されたい。しかし、ロス氏がUFOを目撃された際、安らぎのフィーリングを感じ、私たちは一人ぼっちではないのだと感じたことや、更にロス氏が支持しているアダムスキー氏の主張と公的機関の発表する情報がなぜ食い違うのかを調べるのが自分の義務だと感じたというお話には、ロス氏の研究が単なる知識欲ではない、もっと深いカルミックなものがあることを感じさせられた。

お話はロス氏の専門分野・太陽系の惑星問題に及び、火星に運河が実在していることは本当はNASAも認めているのだが、写真はコンピューターで画像処理しているのだとか、月には大気が存在し、重力も地球の半分以上あるというような、一般情報しか知らなかった人には驚くべき内容が暴露され、それを後から実際にスライドで映像面からも指摘された。スライドは私たちが普段お目にかかれないものが多く、特に月の裏側の写真が美しかったのが印象的だった。

四時から約三十分間の質疑応答でもロス氏は精力的に回答され、花束贈呈、全員記念写真撮影と進行して、総会はスムーズに終了した。

レストラン「四季」における大夕食会ではガラリと雰囲気を変えて、ギター、民謡、日舞、楽団演奏を交え、飲食・歓談を満喫した。この席でロス氏は「本日は私の人生のハイライトとして決して忘れることはありません」と感謝の気持ちを述べておられた。また同行された奥様のパメラ夫人も、初めての訪日を心から楽しんでおられるようだった。

このあと約四十名の希望者で有楽フードセンター内の「チボリ苑」で二次会を開き、十一時過ぎまで談笑し、総会の大成功に祝杯を上げた。

この日の大夕食会には春川正一氏も出席されており、春川氏によれば総会会場ロビーで、複数のスペース・ピープルが見守っていて下さったらしい。

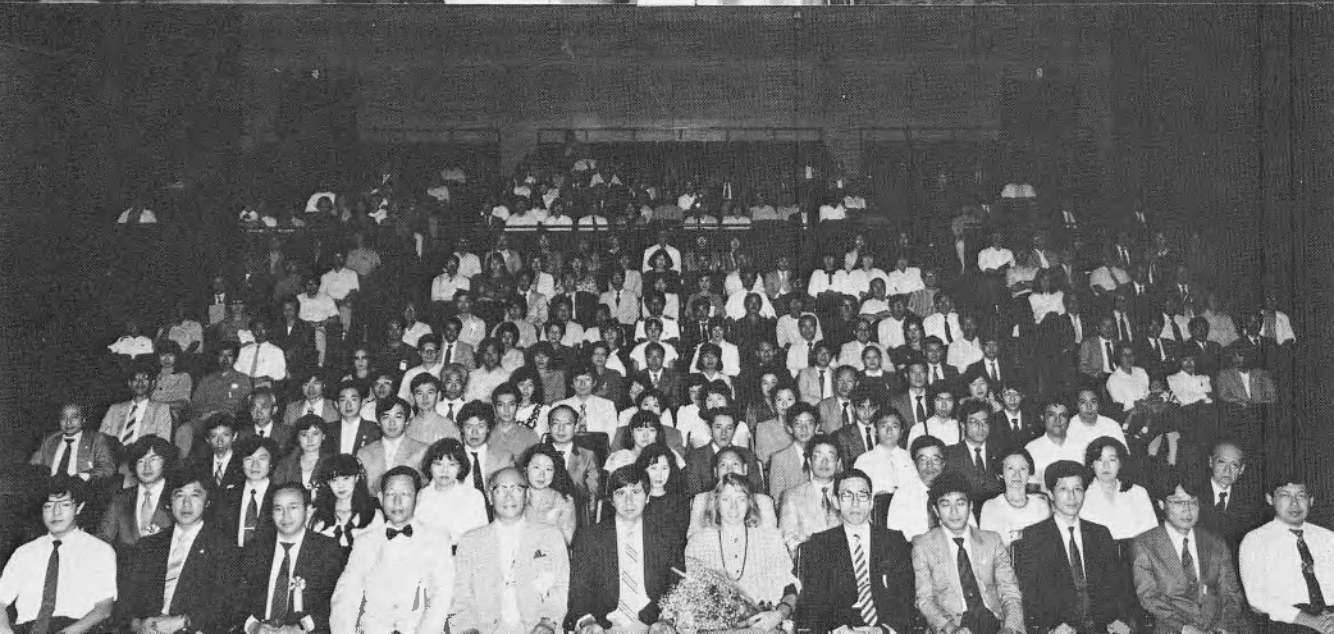
また、話は前後するが、ロス氏ご夫妻を成田空港まで出迎えに行った際、空港近くで白いUFOが五分間以上も雲に見え隠れしていたのを久保田先生と遠藤昭則氏（東京本部役員）が目撃しているが、これらを考え合わせても日本GAPは確実にスペース・ピープルに見守られており、ダニエル・ロス氏も彼らに注目されている人物であることが理解できる。

（安藤澄雄）

GAP-JAPAN

日本GAP総会
ダニエル・ロス氏招待講演
GAP-JAPAN

日本GAP総会
ダニエル・ロス氏招待講演



投稿欄 ユーコン広場

信念と忍耐力をもって前進しよう

千葉県　山口　緑

「アメリカ・メキシコの旅」ご苦労様でした。今回もきっと実り多い素晴らしい旅が実現したことでしょう。参加できない者としては本誌での旅行記を読ませて頂くことが何よりの楽しみです。

昨年のGAP総会での春川氏のご講演以来、何十回となく氏の講演テープを聴き返したり、先生の記事、「私は別な惑星へ行ってきた！」の連載を読ませていただいたりして、本当にすごいなあと思い続けてきました。それに最近の久保田先生の月例会における非常に納得のいくご講義を拝聴したりしながら、会員が本気で超能力を身につけようと頑張っている姿を肌で感じては、「私もボヤボヤしてはいられん」という心境になって毎日自己訓練に明け暮れています。しかしまだまだ納得のいく成果を得るに至らず、さらに根気強く忍耐のある訓練を続けなくてはならないと痛感しています。その点で坂本氏の記事（本誌97号掲載『驚異の書「生命の科学」と円盤大接近』）は大いなる刺激となっています。本当にたいしたものです。信念と忍耐力のかたまりのような方ですね。尊敬に値する方です。

ところで春川氏のGAP会員に対する影響は相当に大きいものがあったと思いますが私もその一人でした。最近になってようやく氏の本名を知り、氏の書物『超魂』を読みましたし、また「BOSTON CLUB」という雑誌を読む機会を得ました。これらを読みながら、氏の総会での予言通り、数年後には超能力ということが常識化するということがうなずける気がいたしました。書名を見ても能力開発の書物の多いことにいやでも気づかされます。それに守護霊だの精神面、霊界物の書物がいかに多いかに驚かされます。

「BOSTON CLUB」第1号と第4号では久保田先生の記事を拝読し、その流れるような文章に読者は最も引き込まれ、宇宙の法則のトリコになってしまうだろうと思いました。集められた記事の中で久保田先生のものが最も説得力があるように思いました。他の方々のはそれぞれ専門的ではありますが、ややとっつきにくさを感じました。それはどうでもいいことですが、久保田先生のアダムスキー哲学が他の雑誌やらに数多く出まわり、一般に広まっていくことを念願するばかりです。

先生の説かれる「マインド空間から意識空間へ」という理論は大変なことです。先の月例会でも先生が、「朝起きたときから夜寝るときまで、意識の中、神の中にいるというフィーリングを一日でも持ち続けてみなさい」というお話が今でも耳にあり、実践しますが、持続するというのはものすごい忍耐を要します。そのフィーリング、イメージというのも私にはむずかしいことです。しかし今やらねばならないことですね。私もいろいろと自己訓練をやっています。今後ともよろしくご指導下さい。

子供たちと一体になる勉強を

新潟県　岩嶋節子

こんにちは。今日美しい会員バッジが届きまして早速胸につけております。どうもありがとうございました。小学校での三年間の勤務を終えたあと、まわりからの勧めにより、突然、障害児教育への道を歩むことになりました。現在上越教育大学大学院に一年間内地留学しております。

ここでは実際に子どもと関わることにより、〝子どもと一体になる〟勉強をしています。またお母さんの立場に身をおいて一体になって考えるという勉強をさせていただいています。春川氏が「自分に関わったことはすべてカルマだ」と書かれていましたが、本当にその通りだと思います。子どもさん、お家の方、そしてその人たちに関わる私たちのそれぞれが各自の乗り越えるべき課題を持っており、ちょうど一緒になって取り組む場を与えられ、一生懸命頑張っているという気がします。

二億年かかってやっと一回りするというこの銀河系の中にある数多くの太陽系の中の一つの太陽系に属し、そのまた十二個の惑星の中の一つである地球という星に住み、しかも同じ時代に一緒に生きている――と考えると、もう他人なんていないんじゃないかと思えてきます。幸い二年前に卒業したあの素晴らしい宇宙的な子ども達が、今も真剣に世界の平和、地球の平和を考え、できる範囲内で頑張っているようです。あの子達と出会ったことに何か目に見えない大きな力を感じます。将来の同級会は一部「楽しくすごそう！」二部「宇宙についてディスカッション。テーマ＝日常生活における『生命の科学』の実践」三部「外に出てスピースピープルに呼びかける。そして地球の平和を強くイメージする」を予定しています。

現在私は徹底したプラス指向を心がけています。それから大それたことですが、オーソン氏の写真と毎日対話しています。

それでは久保田先生、お体に気をつけて素晴らしい実践を続けて下さい。私も先生のように頑張り続けたいと思います。さようなら。

ボストンクラブ誌に名前を発見

静岡県　高梨和明

先般、学会出張にて東京に出向いたついでに新宿紀伊国屋にて本を買い求めました。『ボストンクラブ』も購入しましたが、その前に立ち読みしました。久保田先生の「宇宙、人間、オープンマインド」という記事です。

強烈な内容に圧倒されながら読み進む内に、なんと小生が登場していることに気がつきました。小生の驚きようと喜びようは特別でした。学会出張の疲れが一気に吹き飛んだ次第です。圧巻の記事に小生が登場している！　小生を先生はお忘れではなかったと思うと、本当にありがたく、立ち読みの姿勢ではありますが、思わず感謝の念をお送りした次第です。失礼と知りつつ忘れた頃のご挨拶を申し上げることになりました。ありがとうございました。久保田先生は小生にとって将軍です。また地球屈指の偉大な久保田先生なくしては今の小生はありえません。今後も何卒、高梨和明、美幸をよろしくお願いいたします。

高貴な波動を放つ本誌98号

沖縄県　新里義雄

七月十二日に本部通信を受け取り、それより前にはこちらからの手紙の御返事をも頂いておりますが、ユーコンの発行で御多忙の事と考えているうちに今日に至っております。

ユーコン98号は七月の二十二日に届きました。ありがとうございました。毎号がそうですが、特に今号の高貴さには万感胸にせまると申しますか、高貴な魂の想いを感じざるを得ません。特に春川さんには深謝の礼状を差し上げたい心境です。このシリーズが今回で（98号で）終りというのも淋しい気持です（中略）。

岡山市　金政偉智郎

UFO contactee 98号書店委託分無事に届きました。この高貴な波動を放つ本が宇宙的カルマを持った人々の手に渡りますように、そして人々が進歩しますように、私はこのために協力を惜しみません。次回99号も素晴らしい記事をお願いします。

私たちは幸せ者

茨城県　菊池昌保

機関誌ユーコン98号をお届けいただきましてありがとうございます。前回同様、表紙（全デザイン）内容ともすばらしく、大変感謝しており

ます。私は春川氏との対談記事をいつも興味深く拝読いたしておりますが、98号で一応終了とのこと残念ですが、単行本が出るとのこと、楽しみです。

なお四月下旬に行なった坂本氏との対談記事は次号に載せていただけるよう切望いたします。ダニエル・ロス氏の記事もすばらしく、ぜひ単行本にして下さい。またアダムスキー全集第八巻も活字が大きく読み易くできており、楽しく読ませていただいております。本当に私たちは幸せ者と感謝いたしております。

手を見つめることによって本来人間が持っていた能力を開発する訓練は毎日やっておりますが、先生の方はいかがですか。毎日大変お忙しいことと拝察いたしますが、どうぞご自愛の程をお願い申し上げます。

頑張れよ

東京　塩谷　勉

UFO contactee 98号拝受。あなたの劇期的なお仕事も益々広く充実していかれてますこと、敬服の至り、且、お喜びに堪えません。蔭ながら更なる御発展をお祈りしています。特にお力にもなれませんが――。私も教師はもちろん数々の肩の荷はおろしつつありますが、数え年七十七歳という年には勝てず、研究所の理事長一つぐらいで心身をいたわりつつあります。暑さ、御自愛下さい。

(編注＝塩谷先生は九大名誉教授、農学博士。わが国における林政学の権威。編者が昭和三十六年に郷里島根県でGAP活動を開始したときからあたたかく支持して下さった方。今兄の塩谷信男医学博士からも御支援を頂いた)

毎日現れる小型UFO

沖縄県　比嘉ヒロ子

昨年から私は毎日夜空を眺めてスペースピープルに呼びかけていました。

去る七月五日のことです。その夜も雲のない澄みきった夜空に星がキラキラ輝いてとても良いフィーリングの夜でした。いつものように空を見上げていると、私の立っている所から少し東北寄りに、野球ボールぐらいの大きさのボーッと白っぽく輝く光体と、キラキラと星みたいに光っている二個の光体を見つけてびっくりし、ポカンと眺めていましたが、「あっ、UFOだ」と直感しました。

じっと眺めていると、二個の光体はくっついたり離れたりしながらジグザグに飛び、上昇して見えなくなりました。その間二、三分でした。

しばらくして嬉しさがこみあげてきて、「スペースピープルの皆さん、至らない私の所へ来て下さって有難うございます」と感謝の想念を送りました。あとで考えてみてもやはりUFOだと思いました。キラキラ光るほうは星に似ていましたが、フォースフィールドに包まれているように白っぽくボーッと輝いているほうはUFOに間違いないと思います。その夜は白っぽいほうの一個だけが二時間ぐらい後にまた現れました。それ以後は毎日同じ時刻に二個現れます。

それにしても私に見せるために現れて下さるのか、それとも偶然に私の所に出現しているのか分かりませんが、毎日現れることにはどんな意味があるのか気になります。これからも前向きの姿勢で良い想念を持つように心がけて頑張ってゆきたいと思います。

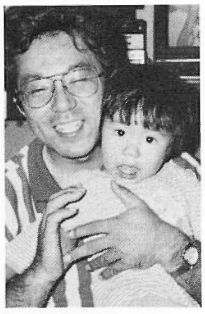
月例会のテープでファイトを燃やす

大阪　井原啓子

梅雨が近くなってから雨の日々が多くなりましたね。久保田先生はいかがおすごしですか。私達親子三人は元気にすごしています。

私の方、人間関係で宇宙的なフィーリングを忘れていましたが、昨日(七月十九日)の大阪支部月例会で先生の講義テープのお言葉で反省と共にファイトが出てきました!

「この人はいずれ宇宙哲学を理解するんだ」という大きな心と、人を裁かないで、その人の後ろにある長所を見るように努めたいと思います。これからも良きアドバイスをよろしくお願いいたします。同封しました写真は一歳三カ月になった直之と主人の写真です。邪魔になるかと思いますがアルバムの隅に貼って下さいませ。直之もお話をたくさんするようになり、自我もはっきりと現すようになって、ついつい叱ってしまうことも。でも私達を楽しませてくれることが多いのです。今年は東京の総会に参加しますのでよろしくお願いいたします。



素晴らしかった本誌98号

東京　関　高明

毎月東京での御講義を拝聴させていただきましてありがとうございます。昨日(八月一日)の東京月例会では体調をくずし、先生がせっかく一生懸命に講義されてもまじめに聞くことができませんでした。先生には大変失礼なことをしてしまいまして申し訳ありません。

先日送っていただいたユーコン98号は一段とすばらしい出来栄でした。私が以前から疑問に思っていたことが「私は別な惑星へ行ってきた!」の春川氏の対談(本誌98号で連載完結)の内容から解答を得ることができ、大変嬉しく思っています。どうもありがとうございました。今日書店へユーコン98号を持って行きましたら、わざわざ注文して読んでおられる読者の方もいるようでした。また書店の男の方一人も興味を示してくれまして、大変丁重な挨拶を頂きました。こういうことがあったため、今日は大変気を良くしています。今後もすばらしいユーコンをお待ちしています。

沖縄県でGAP活動を推進

沖縄県　知念八代子

先日の那覇市におけるアダムスキー全集読者感想発表会ではすばらしいご講演をどうもありがとうございました。先生へお礼の手紙を書かなくてはと思っていたところへ写真を送っていただき、大変恐縮しています。お礼の手紙が遅れて申し訳ありません。

先生の講演を拝聴しましてから私の身のまわりが変わったように感じます。私はこれまでスペースプログラムにのっかって活動できたらいいなと願っていたのですが、なんとなくできそうな気持になりましたが、それにともなって自分自身の想念に以前に比べてよく気付くようになり、気持が高ぶったり落ち込んだり、とても不安定な毎日です。でも私なりにあせり過ぎないようにがんばってゆきたいと思っています。

それから最近になって私はこの活動を沖縄で行なうんだという印象がさらに強くなりました。先生もよく御存知のとおりに沖縄は心霊的伝統(ユタ、おがみ等)が根強く、その影響が大きいところで、アダムスキー哲学を広めるには大変だと思いますが、沖縄の人の心霊的なものへの理解を正しく把握すればどうにかできそうな気がするのです。それにはまず私がアダムスキー哲学をしっかりと研究し、スペースプログラムに参加できるようにしなければなりません。今生どこまでやれるかわかりませんが、琉球舞踊を通じて沖縄の地にてがんばってみたいと思いますので御指導の程よろしくお願いします。

机上の哲学にならぬように

秋田県　伊藤正治

いつも御無沙汰いたしております。筆不精をひらにお許し下さい。

秋田は数日間の真夏日で、もう秋の気配が感じられます。集中豪雨もあり、自然が何かに対して怒っているかのようです。先生におかれましては海外研修旅行で大変御苦労様でした。大きな成果をあげて(45頁へ)

日本GAP海外研修旅行10周年記念
——企画第10回——

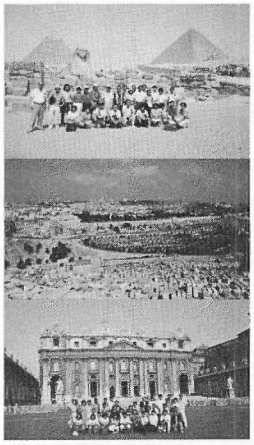
エジプト・イスラエル・イタリアの旅

——地上最大の謎の遺跡と,イエスその他の偉大な先覚者の足跡を訪ねて——

■旅行期間　昭和63年8月3日より15日まで13日間
■参加費用　**¥598,000**（24回分割払い可。変動があるかもしれませんのでお含みおき下さい）
■定　　員　30名

日本GAPは，昭和54年8月に第1回海外研修旅行を実施して以来，世界各地の謎に包まれた古代の遺跡を主体に異国の風物を視察してきましたが，これは宇宙的視野を拡大するにはまず私たちのホーム惑星地球の再発見が必要であるという見地にもとづくもので，すでにエジプトをはじめ中近東，ヨーロッパ各国，インド，北米，中南米各国にわたる壮大なスケールの旅行を毎年敢行し，多大の成果をあげてまいりました。参加人員は延べ500名に達していますが，毎年の旅行で全くトラブルが発生することなく全員無事に帰国しています。63年度は海外研修10周年記念として，下記のようなスケジュールで豪華な旅を企画しました。見学地はすでに何度も現地を訪れたベテランの田中正（ワールドセブントラベル社役員・日本GAP東京本部役員）と久保田八郎（日本GAP会長・毎年旅行団長）の2人が練りに練って立案した最高の手作りのコースです。未経験の方，すでに見学済の方も，家族的雰囲気に満ちた素晴らしいGAPの海外旅行を満喫して下さい。非会員の方も参加できます。

	年月日	曜日	場所	時間	交通機関	摘要
1	1988 8月3日	水	成田発	午後	航空機	一路ローマへ （機内泊）
2	8月4日	木	ローマ着 発 テルアビブ着 発 エルサレム着	午前 午後 夕方 夕方 夜	航空機 専用バス	エルサレム着後ホテルへ （エルサレム泊）
3	8月5日	金	エルサレム滞在	終日	専用バス	エルサレムを終日見学。オリーブ山よりエルサレムの夢のような市街を展望，昇天教会，イエスが祈り続けたゲッセマネ庭園，古代城壁として名高い歎きの壁，イエスが十字架をかついで歩いたビアドロローサ，ゴルゴタの丘跡に建てられた聖墳墓教会その他を見る。 （エルサレム泊）
4	8月6日	土	エルサレム滞在	終日	専用バス	ペテロが泣いた鶏鳴教会，イエスが歩いた石段，最後の晩さんの跡地の二階座敷，イスラエル博物館その他を見学。（エルサレム泊）
5	8月7日	日	エルサレム発 〜 ティベリア着	午前 夕方	専用バス	960名のユダヤ人がローマ軍と戦って全員壮烈な最後をとげたマッツァダの遺跡。死海で海水浴。死海文書が発見されたクムラン洞窟，1万年昔の都市エリコの遺跡その他を見学後，ティベリアへ。（ティベリア泊）
6	8月8日	月	ティベリア発 〜 テルアビブ カイロ着	午前 夕方 夕方	専用バス 航空機	イエスと弟子たちにゆかりの深い風光明媚なガリラヤ湖を船で周遊後，カペナウム，カイザリアの遺跡を見学。夕方はテルアビブからエジプトのカイロへ。（カイロ泊）
7	8月9日	火	カイロ滞在	終日	専用バス	千古の謎を秘めるギザの3大ピラミッド，スフィンクスを見学後，カイロ市内を観光。 （カイロ泊）
8	8月10日	水	カイロ発 アブシンベル ルクソール着	午前 夕方	航空機	アブシンベルの大神殿と小神殿を見学し，空路アスワンへ。着後アスワンハイダム，古代の石切り場などを見学。（ルクソール泊）
9	8月11日	木	ルクソール発 カイロ着	夜 夜	航空機	メムノンの巨像，ハトシェプスト女王葬祭殿，王家の谷，カルナック神殿，ルクソール神殿などを見学。（カイロ泊）
10	8月12日	金	カイロ発 テルアビブ ローマ アッシジ着	午前 午前 午後 午後	航空機 航空機 専用バス	イタリアのアッシジ着後，小鳥とテレパシーで語り合った聖フランチェスコをまつる大寺院その他を見学。 （アッシジ泊）
11	8月13日	土	アッシジ発 ローマ着	午前 夕方	専用バス	ローマ着後，雄大なサン・ピエトロ大寺院，スペイン広場，トレビの泉，コロセウム，フォロ・ロマーノ，その他の遺跡を見学。 （ローマ泊）
12	8月14日	日	ローマ発	午後	航空機	一路帰国の途に。（機内泊）
13	8月15日	月	成田着	午後		着後解散。



写真は上からギザのスフィンクスとピラミッド，エルサレム市街，サンピエトロ大寺院。

■今回は3カ国を回る旅行になります。イタリアのアリタリア航空ジャンボ機でローマ経由，まずイスラエルへ入り，次にエジプト，最後はイタリアという順序になります。特にイタリアはローマ以外に聖フランチェスコのゆかりの美しい町アッシジを訪れます。いずれの国も現地在住の日本人ガイドつき。
■毎日3食付き。24回払いのローンでも行けます（毎月約¥27,000払い）。非GAP会員でも参加可。
■詳細については下記へハガキで案内書をお申し込み下さい。

〒150 東京都渋谷区東3-24-9
サンイーストビル2F
ワールドセブントラベル株式会社　田中正(宛)
☎(03)499-2461
日・祝・夜間は（0474)77-4728（田中自宅）へ。

企画：日本GAP／主催：株式会社日本旅行（運輸大臣登録一般旅行業第2号）／販売：旅行代理店 ワールドセブントラベル株式会社（運輸大臣登録旅行業代理店業1957号）

★EGYPT, ISRAEL & ITALY★

宇宙の魂の子達よ，集合！

〈予告〉62年度地方支部大会〈その4〉

	第8回 山形・仙台合同支部大会	第2回 長野支部大会
日時	11月1日（日） 午後1:00→5:00	11月22日（日） 午後1:00→5:00
会場と交通	「滝の湯ホテル」２Ｆ端鶴の間 ☎0236-54-2211 山形県天童市山元1441 ●山形空港より車で15分 ●奥羽本線天童駅下車（特急にて山形駅の次）、天童駅より車で２分。 ●天童駅より山交バスで温泉西バス停下車。	「長野ステーションホテル」２Ｆ ☎0262-26-1295 長野市末広町1359 長野駅より駅前からアーチになっている善光寺表参道の通りを行き，駅から徒歩１～２分の所。右側。
会費	¥2000（希望者のみ全員記念写真代¥800を別納。グランドキャビネ判。送料共）	左に同じ。
プログラム	司会　柴田文子 1:00　支部代表挨拶　柴田光明 笠原弘可 1:15　講演「世界のＵＦＯ問題の意義」日本ＧＡＰ会長・久保田八郎先生 2:30　全員記念撮影・休憩 3:00　全員自己紹介，意見発表，質疑応答 5:00　閉会 ※今回は山形・仙台両支部設立満10年を記念して山形県の名高いリゾート天童温泉で開催することにしました。豪華な大ホテルの会場で天童の湯の香りと久保田先生の真理の言葉を満喫して下さい。人情味豊かな東北人一同心からお待ちしています。	司会　中村公一 1:00　支部代表挨拶　博田文喜 1:05　会員による体験講演 清水　南 1:50　休憩 2:00　講演「アダムスキーとＵＦＯ問題の重要性について」日本ＧＡＰ会長・久保田八郎先生 3:30　全員記念撮影・休憩 4:00　全員自己紹介，意見発表，質疑応答 5:00　閉会 ※昨年の松本市における第１回大会に続き，今回は長野市に会場を変えて気分一新を図ります。有名な善光寺のひざもとで先生の雄大な宇宙問題のお話を聞くのも忘れ得ぬ思い出になるでしょう。気軽においで下さい。
夕食会	大会終了後6:00より希望者による夕食会を同じホテルの隣の間「祥鶴」で開催します。 会費¥5000	大会終了後6:00より同じホテルの同会場にて希望者による夕食会を開催します。 会費¥4500
宿舎	「紀の川ホテル」をお世話します。 シングル¥4200（税サ込）25室予約済 ツイン¥8000（〃）2室〃 ※このホテルは大会会場のすぐ裏手。	「長野ステーションホテル」（大会会場と同じホテル）をお世話します。 シングル¥5500（税サ込）20室予約済 ツイン¥8800（〃）5室〃
申込	大会，夕食会，宿舎，観光の申込はハガキにいずれかを記して10月30日までに下記へお申込下さい（電話でも可）。 〒999-51山形県新庄市大字萩野82 柴田光明 ☎0233-25-3261	大会，夕食会，宿舎，観光の申込はハガキにいずれかを記して11月20日までに下記へお申込下さい（電話でも可）。 〒399-07長野県塩尻市広丘吉田948-4 博田文喜 ☎0263-58-8510
観光	大会翌日は希望者で舞鶴山公園に行き，天童高原でイモ煮会を楽しむ予定です。朝10時にホテル出発。天童駅で4:00頃解散。 参加費¥3000（昼食代共）	大会翌日は希望者で名所旧跡を見学の予定です。朝9:00ホテルを出発，市内を周遊しながら善光寺を見学。戸隠神社へ参拝，昼食後時間があればリンゴ狩り，野尻湖のナウマン象博物館を県学。長野駅で4:00頃解散。 参加費¥3000（昼食代共）
備考	山形支部のみ11月の月例会は大会のため中止。 仙台支部は平常通り開催。	11月の月例会は大会のため中止。

（43頁より）の御帰国と心からお喜び申し上げます。ユーコンでの記事を今から楽しみにしております。

青森・秋田合同支部大会では大変お世話になり、ありがとうございました。二日間にわたり先生と身近に接することができ、心身共に宇宙的で高次元になれて、現在でも支部大会での高揚感を全身で受けております。特に先生のお話の中で「ときには荒業も必要である」の言葉には強い感銘を受けました。他人に迷惑をかけない限り他人の目を気にすることなく、強い信念を持って進んで行かなければ何事も成就するものではないと強く思った次第です。机上の哲学であってはならない、実践を通して自分を高め、まわりの方々にも精神的進化を促し、地球全体の進化に努める必要があると思います。全体と調和しながらも一生懸命頑張りたいと思っておりますので、どうかよろしく御指導下さい。

ところで来年の支部大会（秋田・青森合同支部大会）は秋田で開催するわけですが、先日の月例会で皆さんと相談した結果、六十三年六月五日（日）に実施したいということになりました。この大会には及ばずながら全力を傾けたいと思っております。会員の皆さんには体験発表のできるような質の高い実践をやるようにお願いしてありますので、どうか御期待下さい。私自身も今から高次元な波動に包まれた明るい会場をイメージしております。どうかよろしくお願い申し上げます。

定価七〇〇円では安すぎる

静岡県　赤池澄夫

いつも宇宙哲学の解説、御指導をして下さり、心から感謝しております。日常宇宙的に向上し進歩してゆけるのも久保田先生のおかげです。またユーコンの方も97号、98号共、美しい表紙になり、内容も大変有益な記事をのせて下さり、非常におどろいております。深遠で高度な内容を考えれば定価七〇〇円では安すぎるほどです。坂本氏の体験記事にもおどろきましたが、ショッキングな春川氏の記事には興味深く、おどろきの連続でした。第二弾が登場するのが楽しみです。

海外旅行の写真の御礼、あとになりましたが、久保田先生のやさしいお気持はいつまでも忘れません。写真からはアダムスキーの高貴な波動と氏の笑顔が浮かんでくるようです。なぜかお墓の写真を見たらホッとしました。ありがとうございました。それでは久保田先生、健康に注意されまして御活躍のほどをお祈り申し上げます。

不思議に良い事ばかりが起こる

秋田県　佐藤春雄

本日は大変寛大な御返事に心より感謝致します。みずから先頭に立ってアダムスキー哲学を実践されている先生に頭が下がりますと共に、ＧＡＰにめぐりあえて本当に良かったと更めて感じております。本当にありがとうございました。

最近は次から次へとすばらしい事が発生しています。今までは絶対に考えられなかった変化が起こっています。その原因を考えますれば、どうも気がだいぶ長くなったからのようです。ついこの間も六万五千円のある機械を買おうと思い、注文してからすぐ買わなければよかったとしきりに後悔していました。ところが半年もかかったのですが、ある事からその金がそっくり返ってきました。その後、今度は音楽テープを注文してから買わなければよかったと思っていたのが、これもそっくりお金が返ってきました。またある成功のための法則のテープを注文したら全く約束と違うので、今までの私でしたらどなりちらしてうやむやにしてしまうところですが、最近先方の会社から新品と丁寧な詫び状と図書券が送ってきました（後略）。

ジョージ・アダムスキー全集

久保田八郎訳　全8巻　B6判・本文上質紙・厚手表紙箱入豪華本

偉大な進化をとげた惑星の人々とコンタクトしたアダムスキーの驚くべき体験と、深遠な宇宙的思想を伝えたこの全集は、人類に宇宙的覚醒と真の生き方を示す最高の指針。UFOと宇宙哲学の研究者必読の名著です。

1 宇宙からの訪問者

三三八頁　一五〇〇円

ジョージ・アダムスキーのあまりにも有名な体験記。一九五二年十一月二十日に米カリフォルニア州の砂漠で金星人と会見した体験「空飛ぶ円盤は着陸した」を本書の第Ⅰ部とし、円盤や母船に乗り、多数の異星人と会見した実録を第Ⅱ部とした驚異的な書物。本全集の中心をなす最重要なもの。

2 UFO問題の真相

二六二頁　一五〇〇円

第1巻の補遺的なUFOと異星人問題の真相を詳述。特に円盤の推進理論や、聖書とUFOとの関係を述べた箇所は重要である。第Ⅱ部はアダムスキーの世界講演旅行記。各国のGAPグループの活動と反応や、サイレンス・グループの妨害が克明に描写されている。

3 UFOとアダムスキー

三五〇頁　一五〇〇円

アダムスキーが実際に体験した母船による宇宙旅行を詳細に述べた「金星旅行記」と「土星旅行記」から成る本書第Ⅰ部「死と空間を超えて」が圧巻。またアダムスキーが存命中に日本GAP会長・久保田八郎に送り続けたぼう大な情報と書簡類を収録して第Ⅱ部とした。

4 宇宙哲学

一四八頁　一三〇〇円

人間のセンス・マインド(肉体の心)と宇宙の意識との一体化を中心思想として、人間を進化させる方法を明快に理路整然と説く。この哲学は、人間の意識と物質との関係の解明と応用とをめざす21世紀の科学の最先端をゆくもので、アダムスキーの哲学関係三著作の中心となるもの。

5 テレパシー開発法

一九〇頁　一八〇〇円

人間に内在する宇宙的な能力のうち、テレパシー能力の開発法を説明したもの。特に目・耳・鼻・口の四官をコントロールして、内部の意識から来るテレパシックな印象を感受する方法を詳しく解説し、他人と無言の会話を行う技術を述べた、類書の全く存在しないガイドブック。

6 生命の科学

二〇五頁　一八〇〇円

アダムスキーが他界する数年前に出した Science of Life と題する十二分冊の講座を和訳して一書にまとめたもの。アダムスキーの宇宙的哲学の総まとめ的な一大金字塔で、真実のテレパシーと心霊的な霊界通信の相違を明確にし、心霊現象への接近を警告する画期的な書。

7 アダムスキー論説集

三七〇頁　二五〇〇円

日本GAP機関誌に掲載されたのみで、単行本化されていなかったアダムスキーの論説や講演録等を網羅編さんしたもの。特に死去する直前の最後の講演が圧巻。第Ⅱ部にはアダムスキー研究家として名高い久保田八郎が数度渡米してアダムスキーの高弟たちとインタビューした記事を収録。アダムスキーの偉大な面が描写されている。

8 質疑応答集

二一六頁　二〇〇〇円

アダムスキーは一九五八年に質疑応答集を自費出版で頒布した。五分冊から成る小冊子で、全部で百問の質問と回答が収録してある。内容は現在の混迷した世界のUFO研究界に的確な解答と示唆を与えるものとして驚くほど新鮮である。これで本全集はア氏の重要な文献すべてを網羅した。

発行所宛直接注文の場合に限り、左記のように定価・送料をサービスいたします。（郵便振替または現金書留でご注文下さい）

☆一冊注文――送料無料。書籍代のみご送金下さい。
☆第一巻より第四巻まで一括注文(正価八八〇〇円)
☆第一巻より第八巻まで一括注文(正価八一〇〇〇円)特別セット価格八〇〇〇円(送料共)
☆第一巻より第八巻まで一括注文(正価一六九〇〇〇円)特別セット価格七三〇〇円(送料共)
全巻セット価格一四七〇〇〇円(送料共)

文久書林　〒113 東京都文京区西片1-19-10　西片ハウス2F　☎(03)813-9561　振替/東京4-2521

英文版「UFO contactee」No.3刊行中

■60年7月に刊行したNo.1は世界のUFO研究界で絶賛を博しつつあり、長い伝統を誇るイギリスのUFO専門誌Flying Saucer Review誌、イギリスGAP機関誌ニューズレター32号、デンマークGAP機関誌ufo contactその他が記事を転載して激賞している。また多数の欧米UFO研究グループと機関誌や情報交換のルートを確立、日本GAPは名実共に東洋最大のUFOと宇宙哲学研究グループとして一躍脚光を浴びるに至った。

■第3号も久保田日本GAP会長が執筆した格調高い英文記事により、本誌93号に掲載した春川正一氏の「私は別な惑星へ行ってきた!」の連載第1回分を掲載。早くも海外UFO研究界で注目をあびている。会長みずからプロ用大型電子英文タイプライターを駆使して版下を作成。デザイン、レイアウトから1字1句に至るまで会長が熱意をこめて作ったこの国際的文献をぜひお読み下さい。英語学習用にも好適。

B5判　12頁　上質紙使用　￥300(送料￥170、3冊まで￥240、10冊まで￥350)注文は郵便振替で下記へ。切手代用も歓迎。

日本GAP　振替　東京4-35912

GAP-JAPAN NEWSLETTER International Edition

UFO contactee

UFOs & Cosmic Philosophy Services　No.3 JANUARY 1987

A Young Japanese Man Visits Other Planets [PART 1]　by Hachiro Kubota

No one will dispute the fact that there is no life on other planets in our solar system but Earth. In order to prove this, some space probes have played important roles in the research of planets Venus, Saturn, Jupiter, et cetra.

However, there have been a number of contactees in many countries claiming to have gone aboard space ships from other worlds belonging to our solar system. If these artificial flying machines really come from the planets in outer space, we must recognize that highly advanced civilizations exist on some of them. Do the U.S. and U.S.S.R. cover up the astounding facts for fear that the world will be stricken by a serious panic?

George Adamski, an American contactee, claimed in his famous books that he contacted space people from other planets in our solar system. In addition to the controversial contact stories, he described his visits to planets Venus and Saturn, and was surprised to see greatly advanced societies there. Ridiculous? No. Strange as it may seem, there have been a large number of sightings of Adamski-type flying saucers as well as cigar-shaped mother ships all over the world. Recently, a young girl (member of GAP-Japan) witnessed with her mother an Adamski-type saucer having three balls at the bottom hovering over a mountain for about an hour. This happened in Asahikawa, Hokkaido in the summer of 1986. It can be said that there is sufficient evidence to conclude there sightings as an implication that Adamski's stories were absolutely true!

In addition, we have an amazing story of a Japanese contactee named Shuichi Harukawa (pseudonym), 20, who also claims to have gone aboard a flying saucer and the mother ship many times. He was supposedly taken to Venus, Mercury and an unknown planet in another solar system in the direction of the constellation of Cassiopeia.

He now lives in a small city in the Tokai district of Japan and works as a government official. If it is of any concern his father is in a high position at the prefectural office. Besides being very sincere and honest, he is an excellent telepathist showing wonderful abilities of clairvoyance and perception of man's 'aura' as well.

Now, this is his own story of which he personally told this writer on several occasions. We have had it patiently through GAP-Japan Newsletter in a serial form thus creating a sensation in the field of UFO in Japan. So, we have decided to print his wonderful story in our English bulletin. The questioner is Hachiro Kubota, a writer and representative of GAP-Japan.

Sending Out His Thoughts to the Starry Sky

K: What prompted you to contact the space people?

H: I was a second year student at a junior high school when I awakened to the wonders of space. At first I lived in a large city, and then moved to the country surrounded by mountains. At school my classmates often teased me because I moved from the city. I had no friends then, and was very sad and lonely in my state of affairs. One day I read about 'space' and strongly felt like making an appeal to someone in space for response. I did not know anything about George Adamski at the time. Each night for a month, I sent out my in-

═昭和62年度═

日本GAP全国月例研究会案内

支部名	日　　時	会　　場	会費	携行品・行事
東京本部	毎月第２土曜日　午後1:00→6:00	上野公園内「東京文化会館」４階会議室。 ☎03-828-2111。ＪＲ「上野駅」の「公園口」下車。改札口の真向かいスグ。 連絡先＝日本GAP　☎03-651-0958	会場費 ¥500 セミナー 受講料 ¥1000 計¥1500	1:30→2:30 会員による体験講演。 2:30→4:00 久保田会長の「テレパシー開発法」講義と近況報告、テレパシー練習、休憩。 4:00→6:00 自己紹介、意見発表、質疑応答。
大阪支部	毎月第３日曜日　午後1:00→5:00	大阪府吹田市出口町４丁目「吹田市民会館」 ☎388-7351。ＪＲまたは阪急電車「吹田駅」下車。 連絡先＝平塚和義　☎06-436-3478	¥300	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。
新潟支部	毎月第３日曜日　午後1:00→5:00	長岡市今朝白１丁目「けさじろ荘」 ☎0258-33-7400。長岡駅東口より徒歩５分。無料駐車場あり。 連絡先＝星 富治夫　☎02579-2-5562	¥500	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
福岡支部	毎月第３日曜日　午後1:00→5:00	福岡市天神町５丁目1-23「福岡市民会館」３Ｆ国際会議控室 連絡先＝喜多正宣　☎092-863-5438	¥500	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習。
名古屋支部	毎月第２日曜日　午後1:00→4:30 ※10・11月は第１日曜日に変更。	名古屋市中区金山１丁目５番１号「名古屋市民会館」特別会議室。☎052-331-2141代。 ＪＲ東海・名鉄・地下鉄の金山橋より徒歩５分。 連絡先＝林　国宜　☎0586-45-6468	¥300	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。研究発表・テレパシー練習・座談会。
仙台支部	毎月第４日曜日　午後1:10→4:20	仙台市1番町4丁目「141(イチヨンイチ)ビル内5Fエル・パーク仙台セミナー室」 ☎022-268-8300。仙台駅よりバスで県庁市役所前下車、三越デパート隣。 連絡先＝笠原弘可　☎022-295-0725	¥300	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習。座談会。
山形支部	毎月第１日曜日　午後1:00→5:00 ※11月は大会のため月例会は中止。	山形市小白川町「社会福祉センター」 ☎0236-42-5181。山形駅よりバスで貯金局前下車・徒歩３分。 連絡先＝柴田光明　☎0233-25-3261	¥200	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。
札幌支部	毎月第１日曜日　午後1:00→4:30	中央区北一条西13丁目「札幌市教育文化会館」会議室。 ☎011-271-5821 連絡先＝高野省志　☎011-822-8260	¥500	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
静岡支部	毎月第１日曜日 午前10:30→5:00 ※午前中は「生命の科学」の研究会。テキスト持参。	静岡市黒金町「静岡労政会館」５階会議室。 ☎0542-21-6280。静岡駅北口より徒歩５分。 連絡先＝野口敏治　☎0542-86-7729	¥200	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表。
旭川支部	毎月第４日曜日　午後1:00→5:00	旭川市６条通４丁目「勤労者福祉会館」２Ｆ小会議室。 ☎0166-26-1304。 連絡先＝川上三秀　☎0166-61-0044	¥500	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。研究発表・質疑応答・テレパシー練習。
松山支部	毎月第４日曜日　午後1:00→5:00	奇数月：広島市広島駅ビル内「ステーションホテル」５Ｆ会議室。 偶数月：「松山市民会館」会議室。 連絡先＝伊藤達夫　☎0898-22-3060	¥200	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長と講義録音テープを公開。質疑応答・座談会。
群馬支部	毎月第２日曜日　午後1:00→5:00	群馬県太田市「社会教育総合センター」３Ｆ。 連絡先＝久保寺信一　店：☎0276-25-5958 自宅：☎0276-45-3544	¥200	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。座談会。
青森支部	毎月第３日曜日　午後1:00→5:00	青森市松原「青森市民文化センター」教養室。 ☎0177-34-0163。 連絡先＝田村嘉彦　☎0177-38-0416	¥300	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表等。
沖縄支部	毎月第３日曜日　午後1:00→6:00	那覇市寄宮1-2-1「那覇市民会館」１Ｆ　Ａ会議室。 ☎0988-55-5081。与儀公園の隣。 連絡先＝新里義雄　☎0988-54-1623	¥500	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。質疑応答・想念観察とテレパシーの研究報告・自己紹介・座談会等。
秋田支部	毎月第２日曜日　午後1:00→5:00	秋田市八橋運動公園1-2「中央公民館」趣味の間。 ☎0188-24-5377。 連絡先＝伊藤正治　☎0188-62-2831	¥200	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
神奈川支部	毎月第３日曜日　午後1:00→5:00	川崎市川崎区富士見2-5-2「川崎市立労働会館」４階４号室。☎044-222-4416。ＪＲ京浜急行「川崎駅」下車。市バス・ふ頭線・労働会館前。 連絡先＝大崎孝典　☎0492-65-0389	¥500	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。研究発表・座談会等。
茨城支部	毎月第４日曜日　午後1:00→5:00 ※10月24日(土)・25日(日)は移動月例会。詳細は右の連絡先へ。	水戸市梅香1-2「水戸市中央公民館」４Ｆ小集会室。 ☎0292-24-6600。水戸駅北口より徒歩10分。 連絡先＝清水勝一　☎0292-73-1903	¥300	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。
長野支部	毎月第４日曜日　午後1:00→4:30 ※11月は大会のため月例会は中止。 ※来年１月より会場を塩尻総合文化センターのみとする。12月の月例会のみ第４日曜とし、会場は塩尻とする。	寄数月：塩尻市大門７番町「塩尻総合文化センター」第１会議室。☎0263-54-1253。 偶数月：松本市県「あがたの森文化会館」２Ｆ。☎0263-32-1812。 連絡先＝博多文喜　☎0263-58-8510	¥500	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。
紀南会	毎月第３日曜日　午後1:00→5:00	和歌山県新宮市新宮6682-1「新宮市福祉センター」１Ｆ相談室。☎0735-21-2760。ＪＲ西日本新宮駅下車、徒歩５分。 連絡先＝松口幸之助　☎0735-34-0605(呼・田中)	¥300	テキストとして「テレパシー開発法」と「宇宙からの訪問者」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。
栃木支部	毎月第３日曜日　午後1:00→5:00	鹿沼市(市役所裏)「御殿山会館」１Ｆ小会議室。 ☎0289-64-4334。JR鹿沼駅から西へ1.5km。東武新鹿沼駅から北へ1.5km,市内行きのバスに乗り天神町下車,徒歩５分。 連絡先＝渡辺克明　☎0289-62-3319	¥500	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。
長崎支部	毎月第３日曜日　午後1:00→5:00	長崎市魚の町５番１号「長崎市民会館」 ☎0958-25-1400。公会堂電停前。 連絡先＝元木和雄　☎0958-22-5521	¥200	テキストとして「テレパシー開発法」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。

★本誌バックナンバー（旧号）★

わが国でアダムスキー問題を正しく伝える唯一の文献である本誌は後世に残る貴重な資料となるものです。ぜひおそろえ下さい。下記以外の旧号も残っています。お問合せ下さい。

No.95 主要記事「茨城県千代田村のUFO」日本GAP茨城支部/「アダムスキー問題に対する考察」内田格男/「私のUFO目撃と不思議な体験」中嶋順子/「ジャンボジェットに並行して飛んだ円盤」久保田八郎/「私の別惑星訪問体験とアダムスキーの真実性」春川正一

No.96 主要記事「私のオーラ透視とテレパシー現象」清水南/「京都市上空にUFO5回出現」久保田八郎/「想念放射、透視、UFO目撃」遠藤昭則/「UFOと心霊は無関係」G.アダムスキー/「私は別な惑星へ行ってきた！」（連載第3回）春川正一

No.97 主要記事「驚異の『生命の科学』と円盤大接近」伊藤達夫/「八王子市でUFOを撮影」降旗和彦/「別な惑星の偉大な人類と文明」G.アダムスキー/「私は別な惑星へ行ってきた！」（連載第4回）春川正一

No.98 主要記事「木星の衛星イオに古代都市跡を発見！」「UFO-宇宙からの完全な証拠」(1)ダニエル・ロス/「静岡市上空にUFO頻繁に出現」遠藤昭則/「太陽系惑星にまだ仲間がいる?」「連夜のテレパシー送信に応じて出現した円盤」片岡豊/「万物の実体と想念の重要性」知念清邦/「私は別な惑星へ行ってきた！」（最終回）春川正一

各¥700　バックナンバーに限り送料は不要

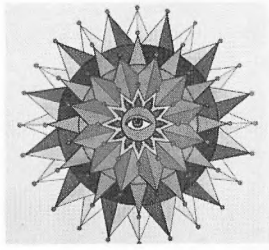
「テレパシー開発法」と「アダムスキー論説集」解説講義録音テープ

昭和62年2月より12月まで東京月例研究会で日本GAP会長・久保田八郎先生が新鮮雄大な構想のもとにアダムスキーの名著を解説する録音テープ。テレパシーを主体に人間を救う能力開発法を説いた名講義。GAP会員必聴の重要資料。月例会における近況報告も録音。

テープ1本（120分）　¥1300　送料¥200

※このテープは日本GAPでは取扱いませんので、××月分と記して必ず下記へご注文下さい（2月分より在庫）。

〒430 静岡県浜松市三島町577-1　小島国弘
☎0534-42-3507　振替＝名古屋7-51065



①オーソン肖像写真　②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第二部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウエルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた名画の写真。（キャビネ判・カラー写真）上半身写真もあり。定価¥600

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は“すべてを見透す眼”で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド（心）の発達状態をあらわしている。（サービス判・カラー写真）

上記2点共、重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

①¥600 送料¥120 ②¥300 送料¥60 一括注文の場合送料¥120

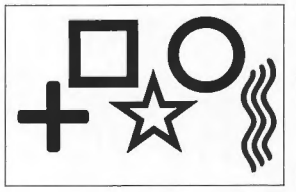
③ゼナーカード

テレパシー練習用

アメリカで開発されて世界的に広まったテレパシー練習用カード。5種1組のカードを1箱に5組、計25枚収納。美麗箱入り。

¥600 送料¥120

①+②+③の場合送料¥170



会員募集

日本GAPはUFO研究界の大先駆者・久保田八郎が故アダムスキー氏と提携して1961年に創立したわが国最大のUFOと宇宙哲学の研究大集団！多数の会員と共に宇宙的人間を目指そう！
入会案内書をハガキで日本GAPへ申し込もう！

——日本GAP——

日本GAP特別維持会員制のお知らせ

62年7月、会員有志の発案により日本GAPの健全な運営と会長久保田八郎先生のより良きご活動を願って特別維持会員制度を設けており、すでに多数の方のご賛同を頂いております。近年高騰する物価のため普通会費の徴収のみでは会の運営が困難であり、この活動に専念される先生も経済的に無理が生じやすいため、この制度によってGAPと先生を援助しようと有志が結束しました。趣旨をご理解の上多数ご参加下されば幸いに存じます。参加希望の方はハガキで日本GAP内 松村芳之宛お申込下さい。趣意書と振替用紙をお送りします。

発起人＝篠芳史、松村芳之、東京本部役員一同

新作 会員バッジ

実物大

ジョージ・アダムスキーが金星人から与えられた唯一のバッジと形、色共全く同様に複製した径18㎜の丸い優美なバッジです。薄青色地に金色のシンボルマークが浮彫りされており、縁も金色です。表面には透明樹脂がかけてありますからキズがつかず、光を反射してキラキラ輝きます。男性用は裏側が心棒ネジどめ式、女性用は裏側が安全ピン式です。ぜひお求め下さい。ご注文のさいは男性用・女性用の別を明記して郵便振替で日本GAPへご送金下さい。（無断複製を禁じます）

1個 ¥2000　送料4個まで ¥120

編集後記

◑「UFO—宇宙からの完全な証拠」は佳境に入ってきました。この筆者ダニエル・ロス氏を迎えて去る九月二十日、東京有楽町朝日ホールで総会を開催し大盛況でした。詳細は本誌40頁に出ています。来年度総会にはアダムスキーの高弟のうち現存する唯一の人、アリス・ポマロイ女史を招待して講演をお願いする予定です。ご期待下さい。

◑「山中湖畔で空中を飛んだ自動車！」と「富士山にUFOが大挙出現」はいずれも実に興味深い記事で、国内におけるスペース・ピープルの身近な存在を感じさせます。

◑「アダムスキーの大地とマヤの国へ」は少々長くなりましたが、ア氏問題とUFOに関する重要な事件を含みますので単なる旅行記の領域を超えた記事にしました。

◑先号より本誌は8頁ふやして総頁を48頁としましたが今後もこれを続けます。次号は100号記念として特大号にします。運営は決して楽ではありませんが、充実と発展を目指して頑張りますので、特別維持会員制に多数ご参加の上、ご支援をたまわれば幸いです。

◑UFO目撃、超能力開発、宇宙哲学実践等の原稿を募集します。ふるってお寄せ下さい。採用分に薄謝を呈します。また右に関する新聞雑誌の切抜記事、その他の資料も歓迎します。

◑本誌は約百名のボランティアにより全国主要書店に卸されています。この奉仕活動に参加を希望される方はハガキでお申込下さい。説明書をお送りします。

◑情報過多の昨今、本誌は興味本位にとどまらず、真実を追求するパイオニアとして驀進します。末長くご愛読下さい。（K）

日本GAP機関誌・季刊　冬季号
UFO contactee　99号
編集発行人　久保田八郎
発行所　日本GAP
〒133 東京都江戸川区本一色1-12-1-511
☎03-651-0958
振替 東京4-35912
昭和六十二年十月二十五日発行
定価七〇〇円・送料二〇〇円
※本誌掲載の全記事・写真共、他の印刷物への無断転載を禁じます。

潜在脳力を開発し、願望実現を早める奇跡の音楽

●●アメリカで話題騒然の●●

●●●スピリチュアル音楽ライブラリーついに日本でも独占販売開始●●●

願望この音楽を聴き実現だしてから……が次々に実現し始めた

アメリカで各界から熱狂的注目を浴びる常識を超えた奇跡の音楽

「スピリチュアル・ミュージック」、「ニューエイジ・ミュージック」と呼ばれる不思議な音楽が遂に日本へも上陸しました。このスピリチュアル音楽に関しては、日本でもニューサイエンス関係の書籍や一般の雑誌・新聞でしばしば紹介されているので既にご存知の方も多いことでしょう。今から十数年前にウェストコースト（米国西海岸）で湧き起こった、意識と物質を同一の次元でとらえようとするニューサイエンス運動、エコロジー思想等のニューエイジ革命の嵐の中から生まれ出たスピリチュアル音楽——。

この音楽の特徴をまとめると、

●作曲家、演奏者達が皆、30代前半から半ばと若く、瞑想愛好家の上、幽体離脱や超常現象を日常的に経験するなど、きわめて霊的意識が高い。

●今までの音楽のように単に曲を聴いて楽めるという点だけではなく（もちろん音楽的に非常に魅力に富んだ曲が多く充分に楽しめるが）意識を高め、潜在意識を刺激するという、「意識・無意識への作用」という事に重点をおいて曲がつくられている。

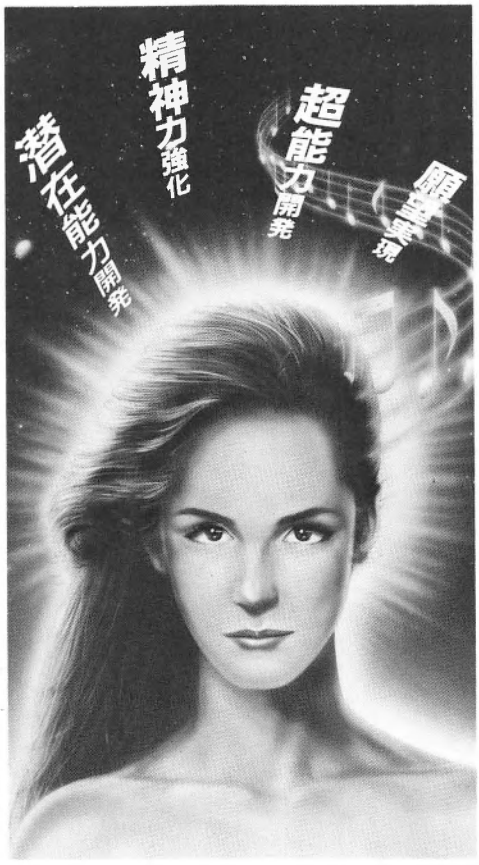
●記憶力・集中力・創造力などの潜在能力が曲を聴くことにより自然に開発される。

●一～二年の長期にわたって、これらの曲を愛好していると、超能力者・ヒーラー（心霊治療家）の典型的脳波であるアルファー波とシーター波の同時高レベル波形とよく似た脳波があらわれるようになり、その結果、鋭い直観力——これがさらに高まると未来予知や読心力などの超能力の持主になる。

●夜、寝る前に聴くと熟睡でき、疲れが翌日にあまり残らず、朝の目ざめがとてもさわやかになる。又、小さな事にクヨクヨしなくなる、包容力がつく、他人に寛容になり対人関係がスムーズにゆくようになる等々の人格向上効果が見られる。

●潜在意識が活性化されることにより、円滑現象（願望がスムーズに実現される、自分の思い通りの方向へ物事が進んでゆく等の現象）が起きるようになる。

これだけでは、まだとても説明しきれないくらいの驚くべき効能を持ったスピリチュアル音楽は、その多様な効能が、早くからアメリカの教育会・医学会・宗教界・実業界などと各界から熱い注目を浴び、数々の実験、科学的基礎研究が今日まで行なわれています。



アメリカでは能力開発に、願望実現にと幅広く活用されている

アメリカでは、これらのスピリチュアル音楽の科学的研究、神秘主義的側面からの経験データに基づいて、応用面での研究・実験もさかんに行なわれています。現在のところ最も利用が進んでいるのは教育の分野で、サジェストペディア（超高速学習法）のバックミュージックとしてさかんにこのスピリチュアル音楽が利用されています。又、能力開発、霊性開発を目的とした瞑想教室では、スピリチュアル音楽はもう空気同然の必需品で、大脳の潜在脳力をめざめさせるのに著しい効果のあることが何千人の生徒達を使った実験でも実証されています。

又、成功を夢みるビジネス界のエリートの間でもスピリチュアル音楽はたいへんな人気で、脳力開発に、ストレスコントロールに、又、願望の早期実現のためにと、いろいろな使い方をされています。

アメリカンライブラリー社では今アメリカで最も人気の高いスピリチュアル音楽のヒット曲、48曲（テープ24巻）の独占販売権を獲得し、「スピリチュアル・ヒットUSA」として日本の皆様に頒布会方式で通信販売いたしております。

「スピリチュアル・ヒットUSA」の頒布システムを説明しますと、初回から12ケ月にわたって、毎月カセットテープ2巻が届けられ、支払いは毎月五、六〇〇円の送料二〇〇円。初回二回目以降を問わず、商品到着後5日間の無料試聴期間がありますから、万一一曲が気に入らなければ自由に返品できます。（一巻のうち一巻のみの購入の考合は代金は半額の二、八〇〇円プラス送料）又、途中で購入をストップしたい場合は、所定のハガキ又は電話で通知すれば、その時点で購入を止められます。この「スピリチュアル・ヒットUSA」各巻には、瞑想ガイダンス、願望実現マニュアル、脳力開発マニュアルがついていますので、それぞれの目的に応じてこれらのマニュアルをご利用下さい。第一回目の試聴のお申込みは、

〒107 東京都港区南青山一—26—4
アメリカンライブラリー社UFO⑩係
電話 東京03(479)5864 まで
ハガキか電話で住所・氏名・年齢・職業・電話番号を明記の上、「スピリチュアル・ヒットUSA」試聴希望とお申込み下さい。

◇「スピリチュアル・ヒットUSA」◇ライブラリーの中の1曲ご紹介

曲　名：TEMPLE IN THE FOREST
作曲演奏：DAVID NAEGELE
曲の内容：アコースティックピアノ、シンセサイザー、エレクトリックピアノ、自然音で潜在意識の波動をあらわす森のリズムが形づくられる中を、〝オーム〟の神聖なマントラのバイブレーションが限りなく広がってゆく様をみごとに表現している。
瞑想用に、又直視力・創造力開発に最適の曲の一つ。

お急ぎの方はお電話で
東京 03(479)5864
受付時間 AM8～PM10(日・祭日も受付中)

想像以上の効果にびっくり!!

はじめのころは「何かおもしろい音楽だナ」っていう感じで、でも聞いていると心が落ちついてくるし、まあBGMとしちゃあ静かでいい曲——くらいの印象しかなかったのですが、しばらくして色んな異常に気づきはじめました。低血圧で朝は一ガ手だったのが、すごく寝ざめがよくなって午前中の仕事の判断が正確になり前みたくドジをやらなくなったとか。それにいちばんの異常は、女の女特に美人）と話をするとどうも変なところで緊張してしまって話が上すべりしたりして、どうも恋下手だったんですが、それが最近じゃ前みたく変な気負いがなくなり、ほんとに気楽にストレートに話ができるようになったことです。おかげで、会社の女の子がみんなボクナ恋人に見えちゃうほど。何か会社へ行くのが楽しくなりました。ほんと。もちろん例の音楽は毎日かさず聞いてます。次のテープが楽しみです。埼玉県 山口若和

最近、人とのつきあいが信じられないくらいうまくゆきます。

広島県 船越照政

こうなったらいいなあと思っていたことがもう立続けに二度も現実のものになってしまいました。

東京都 高見隆幸

UFO contactee 99号
昭和62年10月25日発行
発行所 日本GAP
〒133東京都江戸川区本一色1-12-1-511 振替 東京4-35912
定価七〇〇円・送料二〇〇円

★ちょっと異次元体験してみませんか?★

あなたを「宇宙人」にする宇宙波動音楽

宇宙波動を生み出す音の魔術師IASOSがあなたを大宇宙へご招待します!

今、アメリカで最も注目されている新時代音楽のクリエーターのひとりIASOS。——彼の〝異次元宇宙音楽〟の宇宙波動が、悩みや不幸の誘因である地球の低い波動の呪縛から、あなたを解放します。「ヤソス」の宇宙波動に乗って、あなたも「意識の宇宙遊泳」「宇宙人気分」を楽しんでみませんか?

あなたを変える宇宙波動音楽

聴いているだけで、思わず「宇宙船で月面旅行しているような」「UFOに乗せてもらっているような」気分になってしまう、とても不思議でファンタスティックな音楽が、アメリカからやってきました。〝ギリシャ生まれの宇宙人〟こと、アクエリアスサウンド界の異才「ヤソス」の作曲になる宇宙波動音楽がそれ。

人間の意識の波動を高め、ひいては、この地球自体の波動をも高めてしまおうという遠大な意図をもって作られた宇宙波動音楽。非常に宇宙的な響きを持っていると同時に、光速を超えた世界(すなわち異次元世界)の波動を聴く人の意識の中で起こさせるこの音楽は、まるでUFOから発射された光線のような神秘的な力を持っています。

アメリカでも、瞑想愛好家、アクエリアンエイジの若者を始め、〝本物〟を理解できる多くの人々に親しまれています。一般の人々はもとより、NASA(アメリカ航空宇宙局)の教育センター、百科事典でおなじみのブリタニカ社、そして先駆的医療を先取りする全米の医療機関などでも、この音楽の持つ不思議な力が評価され公式採用されています。

あなたの部屋が宇宙波動で満たされる

アポロ宇宙船に乗り込み大気圏外・月面を遊泳した宇宙飛行士が何人もロケに「神を見た」「本当の自分と出会った」と言い残して、退役後に牧師になったり、平和活動家になってしまった

この話は余りにも有名です。宇宙飛行士達が地球の大気圏を離れたとたん(つまり地磁気の波動の影響下から離れた時)〝神を見た〟と感じるような高い波動を感じたということは、今の地球大気圏内の波動レベルがいかに低いものであるかを、はからずも証明したということに外なりません。

実は、あなた自身、この地球のきわめて低い波動の影響下にあり、この低い波動に共振する意識の部分しか目醒めていないため、種々の不自由さ・悩み・不幸をかかえてしまっているのです。この地球の低い波動レベルの影響から意識を解放するため、古来からヨガを始めとする色々な行法そして瞑想法が開発されてきました。

ヤソスの宇宙波動音楽も同じように、この地球の低い波動から意識を解放し、「悩み・不安」などとは無縁の、人間本来の自由自在な至福に満ちた意識レベルを実現するために作られたものです。

うっとりとして音楽に心を合わせる、瞑想導入音楽として聴く、夜空をながめながら〝宇宙人気分〟で聴く、自分に合った方法でこの音楽に心を合わせることにより、あなたの部屋は宇宙波動で満たされ、あなたの意識は徐々に今までの束縛から解放され、自由と喜びに満たされたものになってゆきます。

▼ヤソス宇宙波動音楽ライブラリー

①WAVE I
②WAVE#2 ELIXIR
③ANGELIC MUSIC
アルバム名 ④JEWELD SPACE

★IASOS(ヤソス)のプロフィール★

1947年ギリシャ生まれ。4才の時に両親とアメリカに渡る。コーネル大学で文化人類学を専攻するが、大学在学中におけるTM(超越瞑想)体験および各種の神秘体験を経て宇宙意識にめざめ、宇宙意識の波動を持った音楽の創造をライフワークとすることを決意。現在も親交を温めているS.ハルバーンらの知己を得、宇宙波動を想起させる音楽的にも最高度に完成された"INTER-DIMENSIONAL MUSIC"(次元を超えた音楽)を創作し発表。一躍、全米で有名となる

宇宙波動音楽アルバム(テープ4巻)を特別頒布中!!

今アメリカで話題のヤソス作曲の〝宇宙波動音楽ライブラリー〟のカセットテープアルバム(テープ4巻)を頒布会方式で特別頒布いたしております。

お申込み後、初回から4ケ月にわたって毎月カセットテープ一巻が届けられ、お支払いは毎月テープ到着後に、3,500円の送料300円。

初回、二回目以降を問わず、テープ到着後5日間の無料試聴期間を設けていますので、万一、曲が気に入らなければその時点で返品できます。又、途中でご購入を止めるのも自由です。

■一括購入もできます。

テープ4巻を一度に購入したいという場合は「一括購入希望」と明記の上お申込み下さい。テープ4巻をまとめてお届けし、お支払いは13,500円の送料500円(5日間無料試聴できます。一括購入申込みの場合は、4巻まとめてご購入あるいはご返品願います。)

お申込みは今すぐハガキ・電話で!!

お電話のお申込みは
03(479)6576
受付時間AM10〜PM20

●「宇宙波動音楽ライブラリー」試聴申込
●頒布会・一括の別
●住所
●氏名
●電話番号
●年令
●職業

郵便はがき
〒107
東京都港区赤坂9-6-27
日本ニューエイジセンター
UFO⑩係

〒107 東京都港区赤坂9-6-27
日本ニューエイジセンター
電話 東京03(479)6576

当センターは「ヤソス」の音楽の日本における独占販売権を取得し、現在国内普及に努めております。「卸売り」「販売代理店」をご希望の方は右記までご一報下さい。